

武州多西吉富

真慈悲寺 推定地出土の

中世瓦



「蓮華唐草文軒平瓦」

2013

日野市郷土資料館

例 言

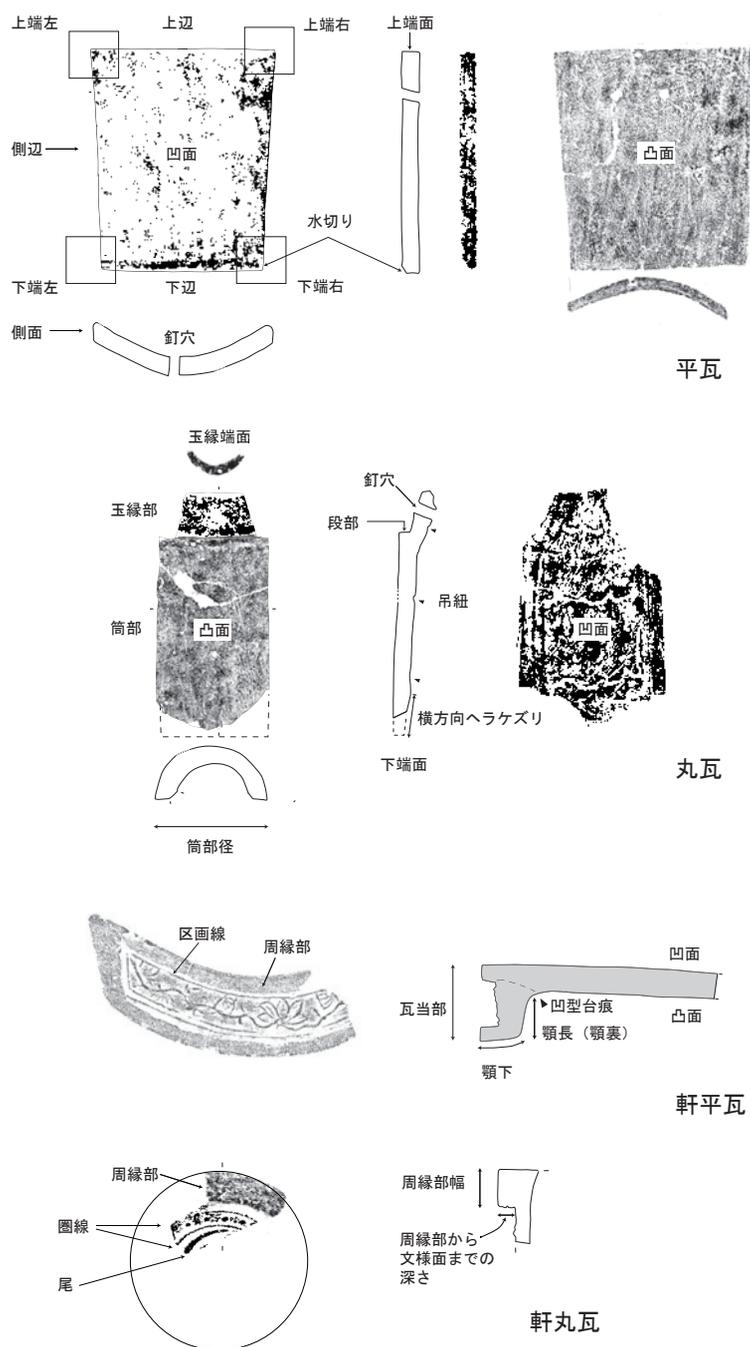
1. 本書は平成 18 年より「幻の真慈悲寺調査事業推進プロジェクト」の一環として日野市郷土資料館が進めてきた、主として京王百草園出土の中世瓦の整理調査報告書である。これらの瓦については、すでに日野市遺跡調査会編（1993、1998）、中世瓦研究会（2000）で、その一部が報告されている。プロジェクトでは全点に目配りした調査を進めており、視点や研究の深化によりこれまでの報告と分類等に違いが生じているが、詳細は本文や註を参照されたい。また、プロジェクトでの整理の中間報告は中山（2007）や小黑（2008）等でなされている。中間報告と本書でデータが異なる場合、本書掲載のものが優先する。
2. 京王百草園は、東京都日野市百草 5 6 0 に位置し、瓦の出土地点はおおよそ東経 35.653705、経度 139.427155 で、仁王塚遺跡地内に所在する。
3. 扱った資料は、百草園内出土の瓦と園内表採の瓦である。
4. 瓦の実測図は縮尺 1/4、写真は任意の縮尺で図示した。
5. 本報告で扱った資料は基本的に実測図と写真の両方で図示しているが、どちらか一方でのみ掲載している瓦も一部ある。
6. 本書の編集・図版作成・写真撮影は小黑恵子（日野郷土資料館学芸員）が行なった。執筆は本文第Ⅱ章第 1 節（4）を中山弘樹（日野郷土資料館学芸員）が担当し、第Ⅲ章は都立大学名誉教授峰岸純夫氏から玉稿をいただいた。その他は小黑恵子が担当した。附篇 1 は高橋俊行・金村忠（真慈悲寺調査の会）、附篇 2 を野村武男、山口昭・按田宗忠・齊藤勝美・梶谷尚（真慈悲寺調査の会）が担当した。附篇 3 はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
7. 資料整理にあたっては、真慈悲寺調査の会の全面的な協力を得た。
8. 報告書作成にあたっては、多くの方々にご協力・ご教示をいただいた。特にお名前を記すことはしないが、深く感謝の意を表する次第である。

資料整理参加者

阿知和宗男 按田宗忠 井内幹雄 石岡聖子 市川三千代 伊藤敬一 今井悠紀子 岩田好江
岩鶴一浩 上野さだ子 梅津豊 江口展司 大窪俊彦 大溝次子 岡本浩敏 荻田勝代 加地勝
梶谷尚 金沢信治 金村忠 桑原信夫 齊藤勝実 齊藤隆之 佐々木利幸 佐藤文俊 澤田輝男
須永征一 清水靖武 杉村真 鈴野成計 芹川孝一 高野壽一 高橋俊行 高山利忠 田中誠
中川節子 中野昌男 西村勉 野尻豊 野村武男 前田元治 増田克彦 松村聖子 宮崎竜一
峰岸純夫 柳内利之 山口昭 横山節 渡辺信雄 渡部孝志

凡 例

1. 本書では瓦の部位は下記のとおり表現している。



目 次

例言

第Ⅰ章	はじめに	出土瓦と中世の日野	1
第Ⅱ章	瓦について		
	第1節	瓦の出土状況	4
	第2節	瓦の分類	
		(1) 胎土・焼成・色調の特徴	5
		(2) 各群毎の組成	6
		(3) 各群毎の技術的な特徴	6
		(4) 丸瓦内面の吊紐痕	13
	第3節	まとめ	14
		参考文献・真慈悲寺関連資料・文献	16
第Ⅲ章	真慈悲寺をどのように考えたらよいか—平安末・鎌倉時代の丘陵霊場—		91
附篇1	真慈悲寺本堂復元の一例		95
附篇2	京王百草園出土瓦の分類の妥当性等の検討		101
附篇3	京王百草園出土瓦の胎土分析		105
附篇4	日野市指定有形文化財の瓦		115

挿図目次

第1図	中世の日野	2	第15図	Ⅲ群平瓦実測図(4)	29
第2図	京王百草園周辺の地形図	3	第16図	Ⅳ群丸瓦実測図	30
第3図	瓦出土地点	4	第17図	Ⅳ群平瓦実測図(1)	31
第4図	群別出土率	19	第18図	Ⅳ群平瓦実測図(2)	32
第5図	群別器種組成	19	第19図	Ⅳ群平瓦実測図(3)	33
第6図	Ⅰ群丸瓦実測図	20	第20図	Ⅳ群平瓦実測図(4)	34
第7図	Ⅰ群平瓦実測図	21	第21図	Ⅴ群丸瓦実測図(1)	35
第8図	Ⅱ群丸瓦実測図	22	第22図	Ⅴ群丸瓦実測図(2)	36
第9図	Ⅱ群平瓦実測図	23	第23図	Ⅴ群丸瓦実測図(3)	37
第10図	Ⅱ群軒丸・軒平瓦実測図	24	第24図	Ⅴ群丸瓦実測図(4)	38
第11図	Ⅲ群丸瓦実測図	25	第25図	Ⅴ群平瓦実測図(1)	39
第12図	Ⅲ群平瓦実測図(1)	26	第26図	Ⅴ群平瓦実測図(2)	40
第13図	Ⅲ群平瓦実測図(2)	27	第27図	Ⅴ群平瓦実測図(3)	41
第14図	Ⅲ群平瓦実測図(3)	28	第28図	Ⅴ群平瓦実測図(4)	42

第 29 図	V 群平瓦実測図 (5)	43	第 37 図	道具瓦実測図 (2)	51
第 30 図	V 群平瓦実測図 (6)	44	第 38 図	道具瓦実測図 (3)	52
第 31 図	Ⅲ～Ⅵ群軒丸瓦実測図	45	第 39 図	Ⅲ～Ⅴ群叩き痕	53
第 32 図	Ⅲ～Ⅴ群軒丸瓦実測図	46	第 40 図	吊紐痕 (1)	86
第 33 図	Ⅲ～Ⅴ群軒平瓦実測図 (1)	47	第 41 図	吊紐痕 (2)	87
第 34 図	Ⅲ～Ⅴ群軒平瓦実測図 (2)	48	第 42 図	吊紐痕 (3)	88
第 35 図	Ⅲ～Ⅴ群軒平瓦実測図 (3)	49	第 43 図	吊紐痕 (4)	89
第 36 図	道具瓦実測図 (1)	50	第 44 図	瓦の特徴一覧	90

図版目次

図版 1	I 群丸瓦	54	図版 17	V 群平瓦 (1)	70
図版 2	I 群平瓦	55	図版 18	V 群平瓦 (2)	71
図版 3	Ⅱ群丸瓦	56	図版 19	V 群平瓦 (3)	72
図版 4	Ⅱ群平瓦	57	図版 20	V 群平瓦 (4)	73
図版 5	Ⅱ群軒丸・軒平瓦	58	図版 21	Ⅲ～Ⅵ群軒丸瓦	74
図版 6	Ⅲ群丸瓦	59	図版 22	Ⅲ・Ⅳ群軒丸瓦	75
図版 7	Ⅲ群平瓦 (1)	60	図版 23	Ⅲ～Ⅴ群軒平瓦 (1)	76
図版 8	Ⅲ群平瓦 (2)	61	図版 24	Ⅲ～Ⅴ群軒平瓦 (2)	77
図版 9	Ⅲ群平瓦 (3)	62	図版 25	Ⅲ～Ⅴ群軒平瓦 (3)	78
図版 10	Ⅳ群丸瓦	63	図版 26	Ⅲ～Ⅴ群軒道具瓦 (1)	79
図版 11	Ⅳ群平瓦 (1)	64	図版 27	Ⅲ～Ⅴ群軒道具瓦 (2)	80
図版 12	Ⅳ群平瓦 (2)	65	図版 28	Ⅲ～Ⅴ群タタキ目痕	81
図版 13	Ⅳ群平瓦 (3)	66	図版 29	写真集成 1 (写真 1～11)	82
図版 14	V 群丸瓦 (1)	67	図版 30	写真集成 2 (写真 12～23)	83
図版 15	V 群丸瓦 (2)	68	図版 31	写真集成 3 (写真 24～35)	84
図版 16	V 群丸瓦 (3)	69			

表目次

表 1	群別出土点数	18	表 3	平瓦部位別出土点数	18
表 2	丸瓦部位別出土点数	18	表 4	丸瓦吊紐痕計測一覧表	85

第 I 章 はじめに 出土瓦と中世の日野

はじめに

平成元年、東京都日野市に所在する京王百草園内で小規模な確認調査が実施され、大量の中世瓦が発掘された。

瓦は軒平瓦に「蓮華唐草文」をあしらったもので、その意匠は他に類例をみない蓮の花の一生をテーマとした独特の構成で注目を浴びた。分析の結果、これらの瓦が中世の総瓦葺きの建物に用いられたものであることが判明した。ここに至って、『吾妻鏡』文治二年（1186）の条に記載された武蔵国真慈悲寺が該当する寺院ではないかと強く推定されるようになった。

この瓦の発見を契機として、真慈悲寺の調査が本格的に開始されることになった。以来、日野市では市民や研究者とともに調査・研究が継続的に進められてきた。京王百草園周辺の実踏や発掘調査によって、この地域の歴史が徐々に明らかになりつつある。今回の報告は、主に平成元年から平成9年にかけて京王百草園内の発掘調査で出土した瓦と一部表採によって集められた瓦の整理調査の結果についてまとめたものである（註1）。

なお、平成23年8月、これらの瓦のうち42点が日野市指定有形文化財（考古資料）に指定された。巻末に附篇4として写真と一覧を掲載した。

中世の日野（第1図）

京王百草園は多摩丘陵の北のはずれ、標高150mほどの小高い丘の上に位置している。ここからは眼前の多摩川の流れを越えて北に武蔵野の平野を透かし見ながら、遠くには筑波山までが望めるという絶好の眺望を誇る地である。大栗川へ開口する新堂が谷戸の谷頭にあり、東を向いている。東の多摩川沖積地には武蔵一ノ宮の式内社である小野神社があり、その周囲には古代から近世に至る集落と水田の複合遺跡である落川・一の宮遺跡が広がっている。その先、多摩川にはかつて鎌倉街道が横切る渡し場があり、元弘三年（1333）新田義貞による鎌倉攻めの戦場となった分倍河原の合戦場が、さらにその奥には武蔵国府・国分寺が遠くに望める。大栗川にせり出す丘陵末端には、江戸時代に5つの経筒を掘り出した

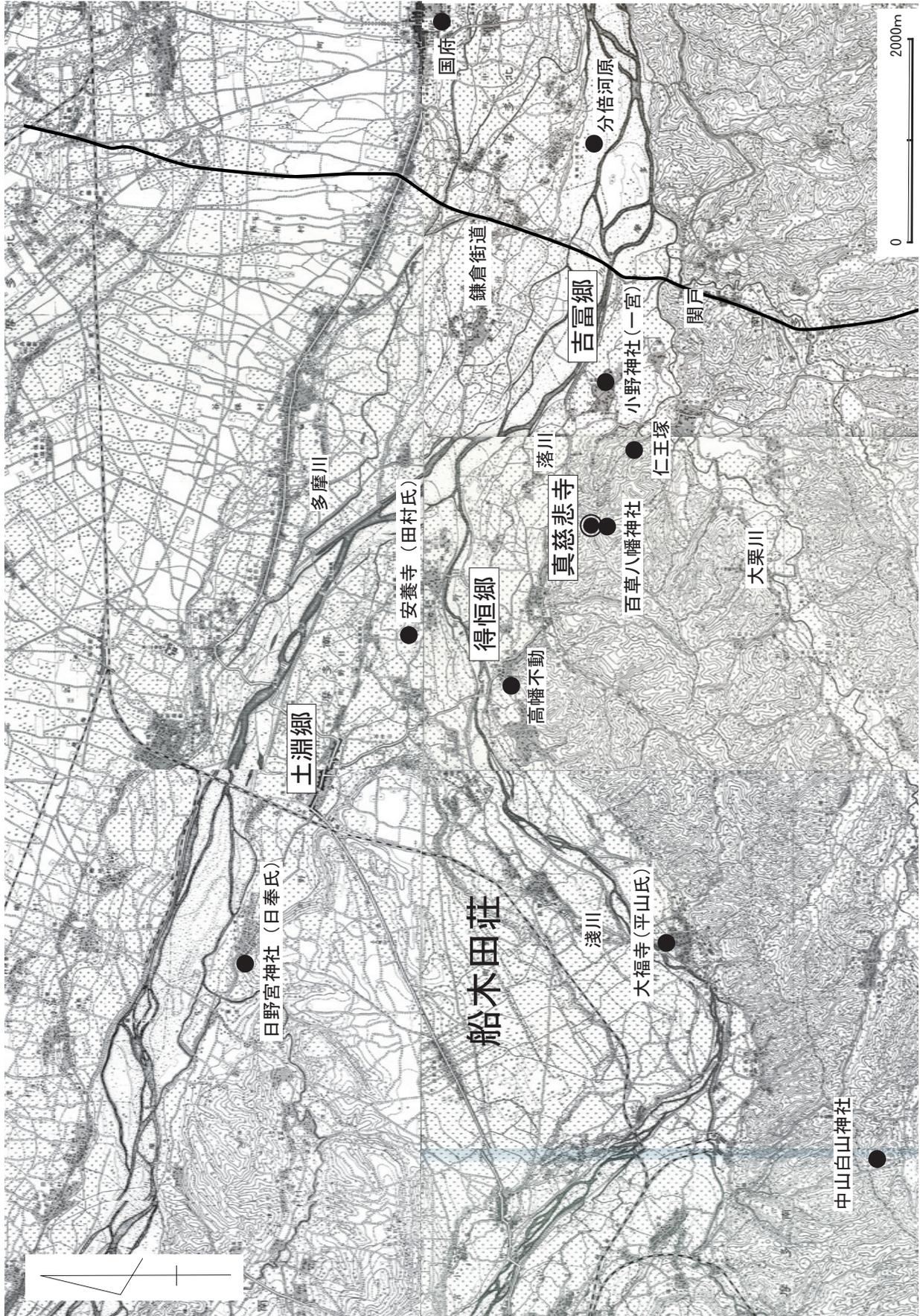
と伝えられている仁王塚がある。今に伝わる経筒は、長寛元年（1163）・永万元年（1165）・建久4年（1193）の年号を刻む。長寛の経筒には作者藤原守道の名があり、また永万の経筒の作者も藤原守道であるとされる（深澤2007）。平安時代末の真慈悲寺との関連が示唆される経筒である。京王百草園から7キロほど南西に離れて、同じく大栗川に開く谷戸の奥に八王子市中山白山神社があり、仁平四年（1154）の経筒が出土している。経巻の奥書に長隆寺の名が見える。また、多摩川を渡った国府近くの府中市定光寺からは仁安二年（1167）銘のやはり藤原守道による経筒が出土している。こうした経筒は、12世紀後半からこの地域に天台系のネットワークが存在していたことを示している。

中世において、日野地域は摂関家領の船木田荘と、土淵郷、得恒郷、吉富郷の3つの国衙領から成っていた。

吉富郷は関戸を中心とし、関戸・一の宮・連光寺・増井（百草）・中河原・鹿子嶋の六カ村で構成されていたと考えられており、真慈悲寺はこのうちの増井（百草）に属する。真慈悲寺の推定地とされる京王百草園の隣にある百草八幡神社には、建長二年（1250）建立の銅造阿弥陀如来坐像が伝わっており、その背面に刻まれた銘文に「日本武州多西吉富真慈悲寺」の文字がみえる。

銘文は漢詩文の四言形式で30行、約120文字からなり、「師長父母」「二親亡魂」の「助成・合力」、「同共往生」を願う内容であるが、施主については「施主源氏」と記されている。今野慶信はこれを関戸頼景の父安達義景の妻で、甲斐源氏の小笠原時長の女子であると指摘している（今野慶信2007）。

京王百草園から約2キロ西の得恒郷には、平安時代後期の丈六不動明王を納めていた十院不動堂が今に法灯を伝えている（高幡不動）。建武二年（1335年）の大風で倒壊した十院不動堂を再建した平助綱は、鎌倉時代後半にこの地域を領していた高幡高麗氏である。また、土淵郷には武蔵七党のうちの西党日奉氏の祖とされる日奉宗頼を祭っている日野宮神社や、日奉氏の一族で田村の



第1図 中世の日野

地名を名のる田村氏館跡とされる安養寺などが所在している。また、高幡不動の南西約3kmの浅川にのぞむ地点には、同じく日奉氏に属し、船木田荘平山郷を領した平山季重の館跡との伝承をもつ大福寺(明治に廃寺)があった。平山季重は源義朝に仕えて保元・平治の乱を戦った武将で、建久三年(1192)源頼実誕生の際の鳴弦の役を務めた。季重は建久二年(1191)に源頼朝の命により、小宮領横沢村(あきる野市)に大悲願寺を建立したと寺伝に伝えられている。

真慈悲寺の周辺(第2図)

真慈悲寺は多摩川と大栗川にのぞむ丘陵一帯にその寺域を展開していたと考えられている。新堂が谷戸の大栗川への開口部付近には「宝蔵橋」・「新堂橋」といった地名が残り、背後の山には経筒が出土したとされる仁王塚がある。新堂が谷戸(註2)の北向き斜面には13世紀末から14世紀初めにかけての常滑の玉縁口縁壺を出土した火葬墓をはじめとする石組墓群、157基の柱穴か

らなる掘立柱建物群が建つ平場が発掘により確認されている。また対岸の南斜面には真慈悲寺廃寺後、近世になって建立された2つの寺、榊井山松連寺と慈岳山松連寺関連の墓地などが点在しており、地元に伝わる「ラントウバ」の言葉なども、この一帯が古くから霊場として機能していたことをうかがわせる。

註1 真慈悲寺の調査は、平成4年に「多摩の古代・中世を考える会」、平成18年には「幻の真慈悲寺調査事業推進プロジェクト」が発足し、市民や研究者とともに実踏や発掘調査、シンポジウムの開催などを通して進められてきた。プロジェクトでは平成18年以来毎年、京王百草園内および周辺の丘陵地の発掘調査を実施してきた。その成果については、改めて報告書を作成し、公開の予定である。

註2 これまで真堂が谷戸・新堂が谷戸・新堂が谷戸・新堂谷戸などの呼称が使われており、本報告でも統一がとれていない。旧百草村の字名には「新堂谷戸」(しんどうやと)が使用されている。



第2図 京王百草園周辺の地形図

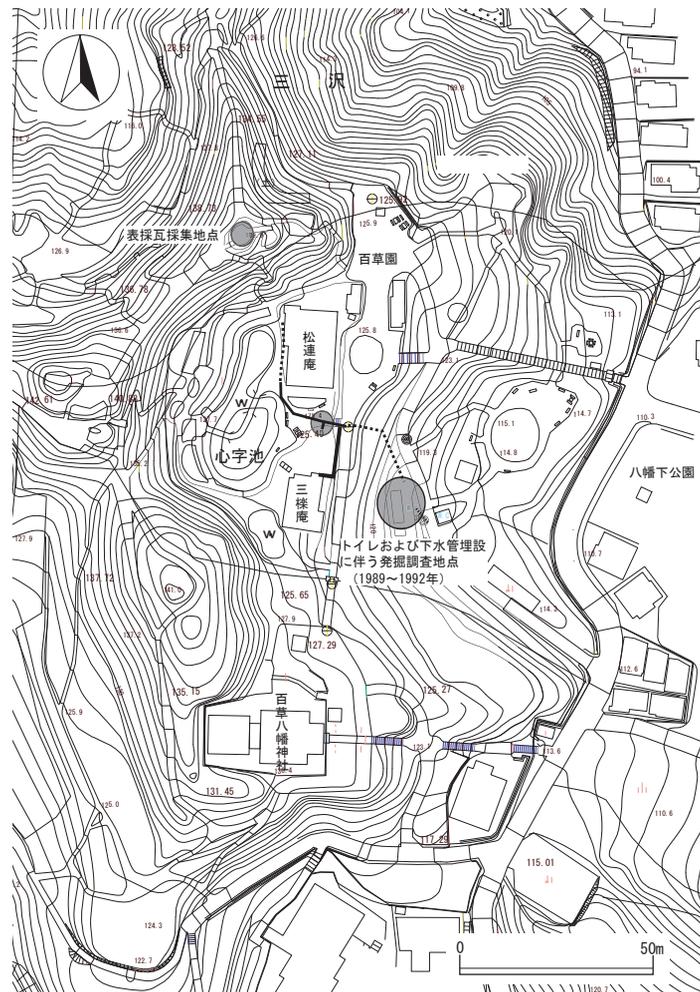
第Ⅱ章 瓦について

第1節 瓦の出土状況

京王百草園内の平場に建っている茶室「三椽庵」から谷側に下った水洗トイレ付近（第3図瓦出土地点）に瓦溜まりがあり、大方の瓦はここから出土した（真慈悲寺関連文献 19・23）。この瓦溜まりは、上方の平場から谷へ落された瓦の一部がここに留まったものと考えられる。瓦溜まりの瓦を葺いていた堂宇が建っていた場所は、「松連庵」や「三椽庵」がある平場と想定している。廃寺となって堆積していた瓦が下へ落とされた原因は、戦国時代の百草城築城や、近世の松連寺建立あるいは明治に入ってからの百草園開園時の整備にとまなうものな

ど、いくつかの要因をあげることができる。背後にある心字池は明治になってつくられた池である。100 m南には百草八幡神社が鎮座しており、真慈悲寺とも深い関係を持っていた。瓦は京王百草園・百草八幡神社を中心として、広くその周囲に分布している。今回分析に供した瓦はほとんど瓦溜まり出土のものであるが、表採された瓦も一部含まれている。平瓦で完形に近いNo. 125・126は松連庵の背後の小高い展望所付近で表採された。

瓦溜まりからは、常滑・青磁・在産火鉢など12世紀末から15世紀初頭にかけての遺物が出土している。



第3図 瓦出土地点

第2節 瓦の分類

(1) 胎土・焼成・色調の特徴

胎土・焼成・色調から、大きく分けて6つの群に分類できる(註1)。

I群

胎土は砂質で粒径がそろっており、胎土分析のための薄片観察用に切断した面をみると、粘土がよく練られて隙間が少なく緻密である。微細な白色粒子を含む。還元焰焼成。須恵器質で硬質な焼き上がりである(註2)。色調は灰色(N 4/0～7/0 灰色～灰白色、2.5 G Y 4/1～7/1 暗オリーブ灰色～明オリーブ灰色)を主体とする。

- ・ I-1 胎土が砂質。手に持つと感触がモサモサとしている。
- ・ I-2 胎土がやや粘土質。I-1のようにモサモサとしていない(No.22)。

全体で2点しか出土していない。もう1点は3cm四方の小破片。胎土・成形・整形技法はNo.22と全て同一であるが、焼成の際に酸化して明褐色(7.5YR5/6)を呈している。

II群

胎土は粘土質で、切断面をみると隙間が無く緻密である。1～8ミリ大の白色粒子や1～5ミリ大の淡い黒色粒子を多く含む。半還元焰焼成だが、焼きが甘く基質は滑らかでトロトロした感触がする。還元の甘いものも多く、淡い黒色粒子が酸化して赤褐色を呈しているものもある(2.5 Y R 4/8)。色調は5 Y 6/1～8/1(灰色～灰白色)、5 Y 6/2～8/2(オリーブ黄色～淡い黄色)で全体に薄い灰色を呈する。表面は吸炭して全面、あるいは部分的に薄い黒色を呈するものが多い。軽くて吸水性が非常に高い。

III群

胎土は砂質で、切断面をみると粘土を練った際にできたと考えられる細長い隙間が見られる。微細～2ミリ大の白色・淡い黒色粒子を含む。粒径の大きなものは少ない。還元焰焼成で、焼きあがりには硬く重量感がある。色

調は灰色～灰白色(7.5Y4/1～7/1)が主体である。

IV群

胎土には1～10ミリの大きささまざまな大きさの白色や黒色の粒子を多量に含む。切断面をみると粘土を練った際にできたと考えられる細長い隙間が多く見られる。酸化焰焼成であるが、焼きが甘く、色調は2.5Y8/1～8/3(灰白～淡黄色)、2.5Y7/1～7/4(灰白～灰黄～浅黄色)、10 Y R 7/4(にぶい黄橙色)で、色や硬さにムラが大きい。

V群

胎土には1～10ミリの大きささまざまな赤色や白色の粒子を多量に含む。酸化焰焼成である。赤く発色している粒子はIII群やIV群に見られる黒色粒子と同じ物質であるが、黒色のものが酸化して赤褐色(2.5 Y R 4/8)を呈している。

VI群

胎土はキメの細かい砂質で、微細な白色粒子を含む以外には特に混ざり物は見当たらない。酸化焰焼成ではあるが、表面の色調はややあずき色がかった暗い色合い5YR5/1(褐灰色)～5/2(灰褐色)である。表採遺物と合わせて2点のみの出土である。

以上、肉眼や手ざわりなどの五感を通して分類を試みた結果、上記の6つの群に分けることができた。しかし、実際にはIII群とIV群、IV群とV群を分けるにあたり、多くの迷いが生じた。特にIV群とV群は、色調や硬さなどが漸移的に変化しており、どこに区切りを設けるか迷うことが多かった。このため、五感を通じた分類と平行して、密度測定(附篇2)や鉱物学的分析(附篇3)も合わせて実施した。

その結果、III群に関しては目視的な分類と密度測定の結果による分類がほぼ一致している。さらに、瓦の薄片観察結果から、III群の瓦の焼成温度は1150℃～1200℃と推定されており、I群の1200℃前後やII・IV・V群の1150℃より低い焼成温度という結果と比較して、III群に分類される瓦は1つの群として成立している。

また、目視的に分類に迷うことの多かったIV群とV群

の間には、密度測定値からみるかぎり差がないことがわかった。また、粒径組成からの検討では、Ⅳ群・Ⅴ群とともに粗粒砂と中粒砂を中心に細礫から中粒シルトまでを含み、特に粘土・シルト塊が多量に含まれるなど共通点が多いことが指摘できる。

以上のような胎土・焼成・色調・密度測定・薄片観察などの検討から、当初6つの群に分けた資料が、大きくⅠ群、Ⅱ群、Ⅲ群、(Ⅳ・Ⅴ)群、Ⅵ群の5つに分類できた。さらに組成や技術的な特徴も加味して検討を加える。

(2) 各群毎の組成

各群の出土率 (表1・第4・5図)

各群毎の出土点数を表1に示した。総点数は5416点である。Ⅰ群101点(2%)、Ⅱ群99点(2%)、Ⅲ群726点(13%)、Ⅳ群1622点(30%)、Ⅴ群2866点(53%)、Ⅵ群2点である。Ⅰ群とⅡ群の出現率の低さに比べて、Ⅲ～Ⅴ群の瓦で全体の96%を占めている。Ⅵ群は軒丸瓦の小片が2点のみで、1%にも満たない(第4図)。

群毎の器種別出土点数を比較すると、Ⅰ群のみ丸瓦が平瓦より出土点数が多く、軒瓦や道具瓦が出土していない。またⅡ群は他の群に比べて軒瓦の占める割合が高く、道具瓦は出土していない。一方Ⅲ群からⅤ群はよく似た傾向を示し、各群毎の総量の中で丸瓦と平瓦の占める割合が圧倒的に高い(第5図)。

(3) 各群毎の技術的な特徴

Ⅰ群の瓦

総点数101点。丸瓦片61点、平瓦片40点が出土した。

Ⅰ群の大きな特徴は、資料数が少ないことと小破片が多いことである。また軒瓦および道具瓦が1点も出土していない(註3)。

a. Ⅰ群丸瓦 (第6図・図版1・表2)

61点中10点を図示した。部位毎の内訳は、大形の資料3点を除き、玉縁部～段部を含む資料9点、筒部下

端11点、筒部側辺11点、部位不明27点である。

大型の資料は3点のみで、他は10センチ以下の小破片である。しかし、幸いなことに玉縁部から下辺に近い部分までを含むNo.1が唯一完形に近いため、Ⅰ群の丸瓦の全容を知ることができる。

No.1を中心に観察する。残存長31.5センチ、筒部径は半径70ミリ、玉縁長55ミリ、玉縁端部半径45ミリ、玉縁付根の半径50ミリ、肩段幅13ミリ。筒部の厚さ16ミリを測る。

玉縁端部の内側には、幅1センチの横方向のヘラケズリが施され、玉縁端面の幅は13ミリほどに調整されている。凹面には布目痕とともに、布袋を絞りこんだ時の皺がつく(図版29-1)。玉縁部に吊紐痕は無い。

筒部凹面には明瞭な布目痕が整然と残り、糸きり痕を消しているが、注意深く観察すると布目ごしに見ることができる。布目は1センチ角に8本の糸を数えることができる(図版29-11右)。布袋の幅約5ミリの継ぎ目がきれいに残る。側辺の内側には幅15ミリの狭いヘラケズリが施され、ヘラケズリと凹面の布目の間には軽い段ができる。側面部と凸面との角は鋭角であるが、ナデによりわずかに丸められている。

吊紐痕が胴部に2段残る。吊紐の痕跡は幅3ミリと細い。大きく垂れることは無く直線的で、紐の縄目がくっきりとつく(図版29-2・3)。No.1は、下端部に近い部分が欠けているため、下端部については他の資料を用いて観察する。

No.9・10を含め下端部の資料が11点出土した。多くは下から3～5センチほどの幅で横方向に削られ、下端面の幅が平均13ミリになるように厚さを調整している。凸面の肩の部分に縄タタキ痕が観察されるが、丁寧なナデにより凸面全体が平滑に整えられており、縄タタキの痕跡はかすかに残るのみである(図版29-4)。

以上のNo.1と下端部No.9・10の観察から、Ⅰ群丸瓦の本来の全長は35センチ前後と復元できる。

Ⅰ群丸瓦の特徴は、①凹面に鮮明な布目痕が残る。②玉縁部に吊紐痕は無く、筒部に細くて直線的な二段の

吊紐痕が残る。③凸面は非常に丁寧なナデ調整により平滑に整えられている。

b. I 群平瓦 (第7図・図版2・表3)

40点中14点を図示した。40点の内、側辺の一部を残すものと部位不明のもので35点を占め、四隅の角は5点出土した。

瓦片の大きさは、最大で長さ12.8センチ、平均して6センチ前後の小破片である。このため、I群平瓦の全容を数値でつかむことはできない。厚さは15ミリ～最大25ミリを測るが、18ミリほどの厚さが一般的である。

凸面は縦方向のナデで成形された後、斜め格子文が刻まれた板で叩きしめられている。タタキ目痕は幅4ミリで一定しており、打ち込みは浅い(図版29-5)。その後、縦方向の指頭幅の粗いナデが施され、タタキ目痕を部分的に消している。凸面側辺ぎりぎりまで格子文が残り、凹型台の痕跡は無い。

凹面には布目痕が残るが、これはその後に施される入念なナデ調整のために大方が消されており、注意して観察しなければ気づかない程度の痕跡である。下端には0.5～1センチ幅のヘラケズリにより水切りが施されているが、幅が一定せず角度も浅い。I群の瓦が総じて非常に丁寧な整形を施しているのに対して、水切りに関しては規格性が見られない。

側面はヘラケズリの後のナデにより、凹面との間の角に丸みがつけられている。下端面はヘラケズリで、厚さ13ミリを測る。もともとの胎土が砂質であることから、離れ砂については、はっきりしないが、胎土に用いた砂と同じ砂を用いている可能性もある。凹面が丁寧なナデ整形で平滑に整えられているのに対して、凸面には特にザラザラ感が残る。凹凸両面とも糸きり痕は残らない。

No.22は、厚さ25ミリを測る厚手の部位不明の破片である。他のI群が18ミリと薄手であるのに比べると趣が異なる。胎土がやや粘土質で、I群に特徴的な白色粒子が少ない。凸面のみ吸炭して黒色を呈している。両面とも表面に柱状のキラキラと光る鉱物が特徴的に見ら

れる。この鉱物は断面の観察でもわずかに観察される。胎土・焼成からI-2に分類されている。凹面・凸面ともに丁寧なナデ調整。凹面にはナデ整形の後、焼成前につけられた、やや斜め方向の細くて浅い傷が複数見られる。凸面は斜め格子文を刻んだタタキ板で叩きしめられている。斜め格子文は、I-1群平瓦に見られる斜め格子文に比べて文様の幅が一定せず、打ち込みが深くて浮き出た面がでこぼこしている(図版29-6)。図示していないが、他に同じ仕様の資料が1点出土している。

No.19は、他のI-1群平瓦と同様の調整が施された瓦であるが、凸面に特殊な加工が施されている。側辺から2.5センチほど内側に棒状の工具により幅13ミリの溝が切られており、内部には粗く練った粘土が無造作に充填されている。溝の断面は半円形で深さ7ミリを測る。その用途については不明である(図版29-7)。

I群の平瓦の特徴は以下の通りである。①平瓦には厚手と薄手の2種類がある。②凸面には斜め格子文のタタキ痕が残る(2種類ある)。③凸面に凹型台痕がみられない。④凹面は丁寧なナデ調整が施される。

II群の瓦 (第4・5図・表1)

総点数99点。丸瓦37点、平瓦51点、軒丸瓦3点、軒平瓦8点出土した。II群の瓦が出土瓦全体に占める割合は2%で(第4図)、I群と同じく出土量が少ないが、軒瓦を含むことでI群の瓦とは性格が大きく異なる(第5図)。26点が10センチ以上15センチ未満の大きさで、残りは10センチ以下の小破片である。軒平瓦の製作に「顎貼り付け技法」を採用している。

a. II群丸瓦 (第8図・図版3・表2)

37点中10点を図示した。37点の部位毎の内訳は、玉縁部を含む資料が10点、筒部下端が5点で、このうち下端左が3点、下辺が2点である。また側辺部と部位不明あわせて22点出土した。

玉縁部の資料はいずれも同一個体のものは無いので、10個体以上の丸瓦の存在がうかがえる。No.25は玉縁部から肩部にかけての比較的良好な資料である。玉縁長

55 ミリ、玉縁端部半径 50 ミリ、玉縁付け根での半径 55 ミリ、筒部半径 75 ミリ、肩段幅 16 ミリ、筒部の厚さ 18 ミリを測る。

玉縁端部の内側には、幅 2～3 センチの横方向のヘラケズリが施され、玉縁端面の幅を薄く 5～6 ミリになるように調整している。他の群の丸瓦に比較してこの数値は特別に薄い。玉縁の凹面には、幅 1.5 センチほどの単位の鬚状の窪みが巡り、吊紐痕は確認できない（図版 29 - 8）。玉縁部凸面はナデによる整形だが、1 点のみ横方向に縄タタキ痕が残るものがある（図版 29 - 9）。

筒部凹面には糸きり痕が残るものが多い（図版 29 - 10）。布目を残すものもあるが、布目自体が非常に細かいことと、焼成が甘くて器面が荒れているためわかりにくくなっている。1 点のみ布目痕をよく残す破片から、1 センチ四方に 11 本の糸を数えることができた（図版 29 - 11 左）。扱う資料自体が僅少ではあるが、筒部に吊紐痕を残すものは確認できなかった。凹面の側辺には幅 1.5～2 センチのやや幅広のヘラケズリが施されるが、I 群の丸瓦と異なり筒部との間にめだつた段は無い。

側面部はナデにより調整され、凸面との間の角に丸みがつく。凸面側辺が指頭幅でわずかに窪むものもある。

筒部凸面には肩から下端部まで縄タタキ痕が不鮮明ではあるが残る（図版 30 - 12）。

II 群の丸瓦の特徴は以下の通りである。①玉縁部には布目の無い鬚状の窪みが残る。②吊紐痕がみられない。③凹面に糸きり痕がしっかり残り、布目痕が目立たない。④凹面に離れ砂が付着する。⑤凸面全体に縄タタキ痕が残る。⑥一枚ずつ丁寧に整形されており、筒部半径 70 センチ、段部幅 12 ミリなど規格性が強いなどをあげることができる。

b. II 群平瓦（第 9 図・図版 4・表 3）

51 点中 11 点を図示した。51 点の部位毎の内訳は、下辺 3 点、上辺 3 点、上端左 2 点、側辺部と部位不明合わせて 43 点である。全容を掴めるような資料はなく、2 片が接合した長さ 15 センチ×幅 9 センチの No. 42 が最大のものである。厚さは 13～22 ミリと幅があるが、

15 ミリほどの薄手のものが一般的である。両面ともに離れ砂が多量に付着している。離れ砂は細かく粒径がそろったもので、胎土には含まれないキラキラと光る鉱物を含んでいる。

凹面は丁寧にナデられており、糸きり痕や布目痕などの成形痕が消され、離れ砂も押し付けられて表面は滑らかなものが多い。側面はヘラケズリの後のナデにより凹面との間の角が丸く整えられる。この時に凹面側辺に沿ってわずかに余分の粘土が折り返された痕跡がつき、また凸面には側辺に沿ってわずかに粘土が盛り上がる（図版 30 - 13・14）。余分な粘土が凹型台の下にはみ出したものと考えられる。両面にはみだした粘土の形状から、使用された凹型台は上にのせた平瓦とほぼ同じ大きさであり、また調整時にはまださほど乾燥が進んでいなかったことがうかがえる。

No. 44 は、凹面下端に幅 1 センチほどの横方向のヘラケズリによって水切りが施されているが、角度は浅く、不明瞭な仕上がりとなっている。また凹面には細かな布目痕が残るが、II 群の平瓦で布目痕を観察できるのはこの資料のみである。布目痕の上には離れ砂が付着している。凸面には下端に沿って、多量の離れ砂の上から弧状の沈線がついている。

II 群の平瓦の特徴は以下の通りである。①薄手。②凹凸両面に離れ砂が多量に撒かれている。③凹面の丁寧なナデ調整と、それに派生する、凹面の折り返し痕と凸面の弱い粘土の盛り上がり（凹型台はみだし痕）。④凸面は離れ砂で覆われるが、糸きり痕、布目痕、ナデ、タタキなどの痕跡がほとんど残らない。

c. II 群軒丸瓦（第 10 図・図版 5）

軒丸瓦は 3 点が出土した。内 2 点は瓦当部、1 点は瓦当部が欠落した丸瓦部である。

No. 46 は三巴文軒丸瓦の顎部の破片である。瓦当面の上半分と周縁部を欠いている。文様面の厚さは 22 ミリで、薄手の II 群瓦としてはやや厚い。圏線はなく、三巴文の周囲を推定 14 個の珠文が巡っている。珠文径は 10 ミリ前後と大きめで、高さも 3～4 ミリと高い。三

巴文は左巻きで頭は尖り、尾は短い。高さは5ミリほどと高く、巴頭部の断面は幅広でやや平坦である。珠文を挟んで2本の范傷がある(図版30-15)。

No.47も三巴文軒丸瓦の顎部の破片である。周縁部が一部残存している。周縁部の幅は12～14ミリと一定しておらず、文様面までは16ミリと深い。周縁部の外側・内側ともに角は鋭角で、外側の角は外に向けてわずかにしゃくれている。内にむけては斜めに傾き、側面に横位の深い沈線や数本の皺が横方向に巡っている。

周縁部と文様面に多量の細かい離れ砂が付着する。顎下にも部分的に離れ砂が付着する。

文様面の厚さは15ミリで薄い。小破片のため復元は難しいが、仮に瓦当径を半径7センチとして復元すると、珠文は13個巡ることになる。珠文を挟んで2本の范傷がある(図版30-16)。珠文・三巴文ともに断面は高く、巴頭部は幅広でやや平坦である。

No.48は軒丸瓦の瓦当面が欠落した接合部付近の丸瓦である。剥離面には特に刻みなどは見られない。凹面には離れ砂が付着し、凸面は縦方向の粗いナデで調整されている。厚さは15ミリ。

Ⅱ群軒丸瓦の特徴は以下の通りである。①左巻きで、頭が尖り、尾が短い三巴文。②三巴文の断面は高くて頭部は幅広でやや平坦。③直径10ミリの大きな珠文がめぐる。④珠文の断面は高くて丸みを帯びる。⑤圈線はない。⑥周縁部の幅は一定せず深い。⑦周縁部が壊れやすい。

d. Ⅱ群軒平瓦(第10図・図版5)

8点が出土した。内、顎部5点、顎部の落ちた平瓦部が3点である。7点を図示した。

No.49～53は「顎貼り付け技法」による「連珠文軒平瓦」の顎部破片である。No.49～52は、直径13ミリほどのいびつな珠文が横に並び、その下に細くて断面が鋭い区画線が引かれている。上の区画線については確認できていない。No.49が唯一周縁部を観察できる資料である。周縁部の幅・深さともに1センチ前後、顎下は横方向のナデ、顎裏は縦方向のナデ。顎下と顎裏とは鈍角をなし、顎裏の高さは2センチと低い。Ⅱ群の平均的

な平瓦の厚さは18ミリであるから、復元される瓦当面の縦幅は4センチ前後と推定される。いずれも文様面も含め、細かく割れている。

No.53は同じく連珠文と下の区画線を主体とするが、No.49～52の連珠文の瓦とやや趣を異にする。残存する3つの珠文の内、いちばん右端の珠文はわずかな痕跡が残るのみである。真ん中のは形が大きく崩れて円形の体をなしていない。左の珠文は根元付近で直径13ミリ、断面は半円を描く。これら3つの珠文以外に、一番左端に細長い粘土が斜め上方に開くように浮き出ており、その形状は珠文のみ以外のものである可能性を秘めている(図版30-17)。今後の資料の増加に期待したい。顎下は磨耗しており観察不能、顎裏は縦方向のナデ。顎裏の高さは2センチで、顎下との角度は鈍角をなすと推定される。平瓦からの剥離面は平坦である。

No.54・55は顎部が欠落した平瓦部である。

No.54は約3センチ幅の顎部接合部に鋭い刻みが斜めに交差するようにつけられている。一部の刻みの上には別粘土が張り付いている(図版30-18)。凹面には多量の離れ砂が付着し、凸面は縦方向のナデにより離れ砂が押さえられている。平瓦部端面と凹面との間の角は10ミリの幅で面取りされている。この部分に面取りを施す成形上の理由は見当たらず、水切りを設けた平瓦を用いていると考えておきたい。

No.55も凹面に多量の離れ砂が見られる。凸面は顎部接合部分のきわに粘土を貼り付け、縦方向にナデつけている。顎部の剥離面は平坦で、No.54のような刻みはみられない。

Ⅱ群軒平瓦の特徴は、①「顎貼り付け技法」を採用している。②平瓦部の顎部と接合する箇所には刻みを入れている。③顎部は細かく砕けるように割れる傾向がある。④文様は下の区画線と連珠文からなる。⑤連珠文のみ以外の文様の可能性も残されている。

Ⅲ～Ⅴ群の瓦(第4・5図・表1)

軒平瓦には「瓦当貼り付け技法」を採用している。胎土・焼成・色調から大きく3つに分けているが、技法

上の特徴から大枠として共通の建物に葺かれた瓦群として捉えて記載する。丸瓦と平瓦は各群ごとに図版や表を組んでいるのに対して、軒瓦や道具瓦はまとめて同一の図版上に組んでいることからやや煩雑になっている。

Ⅲ～Ⅴ群の瓦の総点数は 5,214 点で、出土瓦全体の 96%を占めている(第 4 図)。特徴は、出土量が多いこと、個々の破片が大きいこと、組成面では軒瓦と道具瓦を含むことである。丸瓦が 1,161 点、平瓦が 3,972 点、熨斗瓦・谷戸瓦・鬼瓦などの道具瓦が 30 点、軒丸瓦・軒平瓦が 50 点である。77%が平瓦、22%が丸瓦で、その他の瓦は 1%に過ぎない(第 5 図)。膨大な量の瓦が平瓦と丸瓦で占められている一方で、軒丸瓦・軒平瓦・谷戸瓦が出土している。

a. Ⅲ～Ⅴ群の丸瓦(第 11・16・21～24 図、図版 6・10・14～16)

総数 1,161 点。内、Ⅴ群が約 2/3 の 685 点を占める。筒部半径 80 ミリ前後(幅 16 センチ)、玉縁部長 65 ミリ前後、肩段部幅 18 ミリ、厚さ 25～30 ミリを測る。Ⅲ群からⅤ群の瓦で数値がほぼ共通している。

玉縁端部の凹面には、幅 1 センチほどの横方向のヘラケズリが施され、玉縁端面の幅は 10～15 ミリほどに調整されている。Ⅳ群として分類したものの中に、玉縁部の側辺を幅広く削って広い平坦面を作り出しているものが見られる(図版 30-19)。玉縁部の凸面には、指の腹で押さえたために生じたと考えられる窪みが中央付近に残ることが多い(図版 30-21)。

吊紐痕は玉縁部に一段、筒部に二段見られる。吊紐痕は 5～8 ミリ幅で太くて深い。吊紐は布袋に刺し縫いされており、布袋の外に出ている部分は緩い弧を描いて垂れ下がる(図版 30-20)。

下端は端面より 6 センチほどの幅で横方向のヘラケズリによって厚みを減らし、玉縁部とうまくかみあうように成形している。下端面の幅は平均 15～16 ミリほどである。

筒部肩付近には縄タタキ痕が残り、玉縁部との接合のために補強した粘土を押さえたために生じた段が残

る。特にⅢ群の丸瓦では、No. 56 のように補強した粘土がそのまま二次調整されずに残っていたり、逆に荒々しい縄タタキによって大きく形を損ねたものなどが見られる(図版 30-22)。

側辺は、2 回のヘラケズリで成形された後、ナデて角を丸めている。丸め方の強弱はまちまちだが、ごく軽く角に触るだけのものも多い。

Ⅴ群の No. 112 は下端部をわずかに欠くが、残存状況の良好な資料で、京王百草園内での表採遺物である。残存長は 34.0 センチ。同じⅤ群の丸瓦下端部(No. 120・123・121)を観察すると、下の吊紐痕から下端まで約 9～10 センチであることや、Ⅴ群の完形の平瓦の全長が 33 センチ前後であることを考慮すると、No. 112 の全長は 39～40cm 前後と復元される。

Ⅲ～Ⅴ群の丸瓦の特徴は、①筒部の厚さが厚い。②玉縁に一段、筒部に二段の太くて緩やかな弧を描く吊紐痕が残る。③玉縁部の中ほどに指圧による括れをもつものが多い。④玉縁部と筒部の接合部の整形が雑なものが多い。⑤凸面に縄タタキ痕が残る。

b. Ⅲ～Ⅴ群の平瓦(第 12～15・17～20・25～30 図、図版 7～9・11～13・17～20)

総数 3,972 点の内訳は、ほぼ完形の瓦が 3 点、上下端を含む瓦 3 点、上端左が 145 点、上端右が 136 点、下端左が 87 点、下端右が 93 点、上辺 418 点、下辺 251 点、側辺 980 点、部位不明 1,856 点である。

出土した瓦は大小様々であるが、明らかに大型の破片が多く、Ⅰ群やⅡ群の瓦に比べると、調整の粗さがめだつ。凹凸両面ともに離れ砂が大量に雑に撒かれる。凸面にはコビキ A によるゆがんだ放射状の糸きり痕を残り、それを離れ砂が覆っている。その上から雑で粗い縦方向のナデが施される(No. 63～66、111・125・126)。側面はヘラケズリの後、ナデて凹面との間の角に丸みを持たせている。下辺凹面には幅 10～20 ミリのしっかりと角度をもった水切りが切られる。凸面の側辺に沿って、幅 5 ミリのバリ(凹型台の痕跡)が残る(図版 30-23)。

凹面は主にナデにより成形されているが、無文の板による叩きしめが施される場合もある (No. 125 ~ 127)。無文のタタキ痕は凹面、凸面の両面で観察されるが、明瞭に痕跡を残す資料は少ない。

凹面の側辺から約 4 ~ 5 センチ内側に、幅 5 ミリほどの細長い「くびれ」がめり込んだようについているものがある (71・73・78・88・94 ~ 103・105・106・108・110・129・133・140・146・147)。「くびれ」の中には布目がついている (図版 31 - 24)。瓦の側辺に沿っており全長に渡ってつくことはなく、末端は自然に細くなって終わっている。この「くびれ」については、凹型台に巻いた布の「よれ」である可能性が高い。Ⅲ ~ V 群の平瓦 3,972 点中 34 点に「よれ」の痕跡がみえる。この痕跡がみられる瓦の凹面には指頭圧痕がめだって器面がでこぼこしていることが多く、その窪みに布目痕が垣間見えている。

完形に近い 3 点 (No. 125 ~ 127) は、京王百草園内で採集された瓦である (註 4)。この 3 点の瓦は胎土・色調・焼成から V 群に分類される。大きさは平均して、上辺幅約 27.5 センチ、下辺幅約 24.5 センチ、長さ約 33 センチで、厚さは 24 ミリ前後を測る。凹面のたわみの深さは 42 ~ 52 ミリと幅をもつ。No. 125 の釘穴は直径 13 ミリで凹面から凸面にむけて穿たれている。凸面側に残る粘土の盛り上がりは未調整のまま残される。No. 126 は、凸面にくずれた放射状の糸きり痕 (コビキ A) が明瞭に残る。凹面の糸きり痕は上端左隅にわずかに残るのみで無紋の板タタキとナデで消されている。3 枚とも凸面の側辺に沿って幅 5 ミリのバリ (凹型台の痕跡) が残る。

Ⅲ ~ V 群の平瓦の特徴は、①厚い。①コビキ A による糸きり痕を残す。②離れ砂の撒き方、整形などにおいて全的に調整が雑。③凹凸両面に多量の離れ砂が撒かれる。④凸面側辺に幅 5 ミリのバリ (凹型台痕) がみられる。⑤凹面に凹型台に巻いた布の「よれ」がつくことがある。⑥広い端面に粘土くずや離れ砂がついていることがある。

c. Ⅲ ~ V 群の軒丸瓦 (第 31・32 図、図版 21・22)

軒丸瓦の総数 22 点のうち、17 点を図示した (No. 162 は図版 21 に写真掲載)。3 点は瓦当部分が欠け落ちた丸瓦の接合部である。No. 157・165 がⅢ群、No. 149・150・152・156・158・159・163 の 7 点がⅣ群、その他 8 点がⅤ群に分類されている。

文様の中心は右巻きの三巴文で、頭は尖り、尾は長くて細い。最後は圏線に接している。三巴文の断面は、高く丸みを帯びる。その周囲を 2 本の圏線に挟まれた推定 19 ~ 20 個の珠文が巡っている。珠文径は 5 ミリ弱で、高さも 2 ミリ以下の小さなものである (図版 31 - 25・26)。文様面や周縁部に離れ砂が付着するものが多い。

周縁部の幅は 2.5 センチ前後を測る幅広で、文様面までの深さは 15 ミリと深い。周縁部はヘラケズリの後、軽く叩いて平坦にしているが、筈ずれの痕跡は叩かれても残っている。周縁部の内側には横方向の沈線が複数本見られる (図版 31-27)。この沈線は、平行することなく、ほとんどの場合螺旋状に刻まれている。周縁部の外側の角がほぼ直角に近い角度を持つのに対して、内側の角は例外なくナデられて丸みをもつ。

顎裏は横方向のナデにより平坦に調整されている。文様面の厚さは 13 ミリ前後であるが、No. 148・154・155・158 などの割れ口を観察すると、その厚みのうち半分ほどが別粘土であることがわかる (図版 31 - 28)。

ⅢからⅤ群の軒丸瓦の特徴は以下の通りである。①右巻きで、頭が尖り、尾が長い三巴文。2 本の圏線に挟まれた直径 5 ミリの小さな珠文が巡る。文様の断面は高く丸みを帯びる。②周縁部は幅が広くて平坦。文様面まで深い。③周縁部には筈ずれ痕が残る場合がある。④周縁部の内側の角は例外なく丸く調整される。⑤周縁部の内側の側面には螺旋状の沈線が残る。⑥瓦当面、顎下に離れ砂が付着するなどが上げられる。

d. Ⅲ ~ V 群の軒平瓦 (第 33 ~ 35 図、図版 23 ~ 25)

軒平瓦の総数 28 点のうち、22 点を図示した (No.

173・183・184は図版23・24に写真掲載)。No. 169と175の2点がⅢ群、No. 177・178・180・187・190の5点がⅣ群に分類され、残りは全てⅤ群である。

軒平瓦は全て「瓦当貼り付け技法」でつくられている。No. 185～190は平瓦部から瓦当部が剥離した痕跡をとどめる資料である(第35図)。いずれも平瓦の広端を斜めに切り落としている。No. 186では切り落とした面に別粘土が貼られ、横方向になでつけた様子がよく観察できる(図版31-29)

顎下および顎裏はほとんどの場合、横方向のナデにより調整されるが、No. 168のように顎裏から平瓦凸面にかけて連続した粗いナデが施されている場合もある。顎下と顎裏とは比較的直角に近い。「顎貼り付け技法」によるⅡ群の軒平瓦では顎裏の長さが2センチ以下であるが、「瓦当貼り付け技法」では2～3センチと長い。瓦当面の縦幅はNo. 166で6センチ、No. 167で6.5センチを測る。

周縁部は平らでなく、特に上縁には瓦当範のずれの痕跡(No. 166・167・171・172・174・176)を残すものが多く、ヘラでの調整の際の不具合で段ができたものもある(No. 166・175)。

平瓦部凸面の顎の付け根あたりに凹型台の痕跡と考えられる圧痕が見られるものがある(No. 166・167・169・174)。圧痕にはNo. 167のように明瞭なもの(図版31-30)からNo. 166・174のような弱いものなど強弱がある。この圧痕は、顎整形の最終段階でついている。一方、No. 168は顎裏から平瓦凸面にかけて一気に縦方向にナデている(図版23-168)。その他の資料では、No. 175のように顎下および顎裏を横方向のナデで調整し、平瓦部との間は指で横にナデつけている。

瓦当文様は全て「蓮華唐草文」である。浮き出した文様から判断すると、彫りのきわめて鮮明な範型(No. 167・169・175～178)を使用したものと、個々の線が痩せて細くなっているかなり使い込まれた範型を使用したもの(No. 166・170)、瓦当面が磨耗しているもの(No.

174・179～182)に分けられる。

No. 166はⅣ群かⅤ群か迷うような焼成の甘い胎土で、平瓦部の厚さは18ミリと薄い。凹面は縦方向の繰り返しのナデにより整形されている。顎の長さ33ミリ。顎下・顎裏は横ナデ。布目痕は観察されない。平瓦部と顎部の接合部に凹型台の痕跡と見られる弱い線がつく。使い込まれた範型が使用され、文様面の線の断面が痩せて非常に鋭く、一部はかすれて線が見えなくなっている部分も存在する。

No. 175は重量感のあるⅢ群の胎土で、平瓦部の厚さが27ミリと厚い。凹面は3センチ以上の幅のタタキ板で丁寧に叩きしめられており、布目痕が消されている。注意して観察するとわずかな窪みに布目痕をようやく見ることができるとともに丁寧に消されている。側面や凸面も丁寧に整えられて平滑に仕上げられている。顎の長さ20ミリ。顎裏・顎下は横ナデ。平瓦凸面の顎部接合部分を強く横方向にナデつけ、その上からさらに指頭で押さえている。凹型台痕は見られない。文様面の残存状況が非常に良好でレンコンの太い細いが高低差も含めてリアルに描かれている。

範型の磨耗の度合いの違いは、No. 166と175に見られる胎土・焼成や整形技法の違いとともに時間差を反映していると考えられる。Ⅲ～Ⅴ群の軒平瓦は「瓦当貼り付け技法」の採用という点では大枠にくくれるが、同じ範型を使用しつつも若干の時間差が存在することがしれる。

Ⅲ～Ⅴ群の軒平瓦の特徴は、①「瓦当貼り付け技法」を用いている。②文様は「蓮華唐草文」である。③瓦当文様が瓦によって鮮明なものや磨耗しているものなどがあり、同一の範が長期間にわたり使用されている。④多くの場合周縁上縁部に範型のずれが見られる。⑤顎部と平瓦凸面の間に凹型台の痕跡と考えられる圧痕を残すものがあるなどである。

e. Ⅲ～Ⅴ群の道具瓦(第36・37図、図版26・27)

熨斗瓦 6点が出土している(No. 191～194・200・201)。胎土・色調からNo. 191～193はⅤ群、No. 194

はⅣ群に、No. 201・202 はⅢ群に胎土・色調から分類される。No. 191～194 は焼成前の平瓦を用いている。水切りを施す前の平瓦をヘラにより半割している。No. 191・192 は半割後に切断面をナデて凹面との間の角を丸めている。No. 193・194 は半割後の切断面の調整は施していない。それぞれに磨耗痕や煤などの付着物が残る。No. 201 は厚さ 25 ミリ、幅 9 センチで平らに仕上げられている、長さは不明。成形時の窪みや指圧痕、焼成後のひび割れが多いことや、粘土くず・離れ砂が多量に付着するなどの点で、No. 191～194 の平瓦を半割した熨斗瓦とは仕様が異なる。

谷戸瓦 4 点が出土した (No. 195～197・199)。胎土・色調は No. 196 がⅣ群、その他はⅤ群に分類される。いずれも丸瓦を使用し、上下端をヘラで斜めに切り落として成形している。

面戸瓦 1 点が出土した (No. 198)。胎土・色調はⅤ群に分類される。厚手の丸瓦の下端部分を利用して平面が四角形になるように加工している。

鬼瓦 No. 202 を図示した (日野市遺跡調査会編 1993 より転載)。No. 203 は図版 27 に写真を掲載した。No. 202 は鼻から口にかけての部分、No. 203 は鬼瓦のどの部位かは不明だが、手づくねでつくられており、深い挟り込みが複数ある。この他に文様がはっきりしないため、鬼瓦と断定することができない手づくねの粘土の塊が、20 点近く出土している。

特殊な加工が施された瓦 (第 38 図、図版 27)

No. 204・205 は平瓦、No. 206 は丸瓦を加工して一端を円弧状に、他の二端を狭めて先を尖らせている。円弧状に加工した凹面の縁は擦れて磨耗し、離れ砂が削られている。また凸面には紐状の擦痕が残される。胎土・色調から No. 204・205 はⅤ群、No. 206 はⅢ群に分類されている。

以上、熨斗瓦・谷戸瓦・鬼瓦などの瓦は総瓦葺きの屋根にも使用される瓦で、特に谷戸瓦や No. 204～206 のように特殊な加工を施した瓦の存在は、総瓦葺きを強く示唆している。

f. Ⅲ～Ⅴ群の平行文のタタキ目痕を残す瓦 (第 39 図、図版 28)

Ⅲ～Ⅴ群に分類された平瓦の凸面には平行文のタタキ目痕が施されている場合がある。タタキ目痕には斜め平行のもの (No. 208・213)、横に平行のもの (No. 210～212・214)、横二本線と斜め線が組み合うもの (No. 207・209・215・216) の 3 種類がある。

No. 207 がⅢ群、No. 208・215・216 はⅣ群、他はⅤ群に分類されている。Ⅲ～Ⅴ群として分類された平瓦 3972 点のうち、平行文のタタキ目痕が確認されたのは 19 点にとどまり、0.5%にも満たない。

Ⅵ群の瓦 (第 31 図、図版 21)

Ⅵ群の瓦は軒丸瓦の瓦当部が 2 点のみ出土している。No. 161 は圏線の無い、左巻きの三巴文である。大きめの形状の揃った珠文が 2 個で一単位となって三巴文の周囲を巡っている。珠文の断面は半円形を呈する。三巴の尾は大変細い。周縁部はやや内側に傾く。No. 162 (図版 21) は表採資料である。

(4) 丸瓦内面の吊紐痕 (第 40～43 図、表 4)

本節では、丸瓦の内面に認められる吊紐痕について記載する。丸瓦製作時には、その成形のために布を巻きつけた模骨に粘土版を張り付けると考えられている (註 5 及び 14 頁の図)。その布には紐が刺し縫いされており、波状を呈する紐の痕跡が瓦の内面に残る。この痕跡には、よく観察すると、紐が布の表に出ている部分と布の裏に回って布目が瓦についている部分があることがわかる。波のたとえを使うと波頭に相当する部分が布の裏に回っており、そこからたれた紐が布の表に出てきている。山崎 (2000) はこの紐が表に出ている部分と裏に回っている部分との比率が丸瓦の編年指標になり得ると考えている。そこで、数値の計測を中心に記載することとした。(註 6) そのため、この比率が検討可能な資料についてのみ、ここで報告する。

本節で初めて取り上げる資料については、内面の写

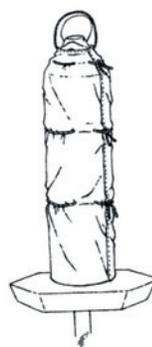
真、吊紐部を中心とした拓本を掲載し、図化可能なものについては縦断面図も付した。紐が布の表に出ている部分と裏に回った部分の計測結果とその比率については、表にまとめた。計測は瓦の内面に布メジャーをあててミリ単位で3回ずつ直接計測し、その平均値を表に掲載している。ただ、紐が表に出ている部分と裏に回った部分がくっきりと判別できる資料ばかりではないため、その境目をどこと判断するかによっては、誤差の生じる類のデータであることは否定できない。

なお、紐そのものについて、撚り方を観察すると、いずれも左撚りで縄文土器の施文原体という「L」であった。圧倒的に点数の多いIV、V群では紐の太さは圧痕から判断すると5～6ミリほどの太さのものがほとんどである。これに対し、I群は細く3ミリほどである。

山崎説をめぐる

山崎(2000)は、「吊り紐の比率が1:1であれば1200年代に、1:2.5であれば1330年前後に、1:6～7では1345年前後に年代づけられる訳であるから、1:1.5であれば1305年前後に、1:2であれば1320年代、1:4では1335～1340年前後に丸瓦を編年することが可能になるのである。」とするのだが、今回報告した数値からは、そう単純でないことが明らかだろう。ここで報告する資料の中には同一個体で、複数単位(布目部分を挟んで左側の縄目部分で1単位とし、同じ布目部分と右側の布目部分で1単位として計測したものもある。)の計測可能なものがあった。例えば、資料No.112(第21図)では5単位、資料No.113(第21図)でも5単位のデータが得られた。前者では、得られた比率は1.2～3.4までの差があり、後者でも1.9～3までの幅をもつ。山崎が想定するような斉一性は認められない。

傾向としては、比が大きくなる方向へ、また紐が大きく垂れ下がる方向へと時代が新しくなるにつれて変化するのは間違いなからうが、吊紐痕の比率だけを根拠に年代比定するのはいささか無謀ではないだろうか。少なくとも、ここで扱う資料群については、吊紐痕の比率のみで年代比定することは断念せざるを得ない。



推定される丸瓦模骨(註7)

第3節 まとめ(第44図)

時期について

当初、胎土・色調・焼成・薄片観察などの検討から大きくI群、II群、III群、(IV・V)群、VI群の5つに分類できた。しかし、その後の瓦製作の技術的な検討から、I群・II群・III～V群・VI群の4つの群に統合して考えることが妥当であることがわかった。各群の特徴と年代について触れておく。

I群は丸瓦と平瓦のみで構成される須恵器質の瓦である。丸瓦凹面に顕著な布目痕が残り、筒部に細くて直線的な吊紐痕が二段のみつく。伴う平瓦は凸面が斜め格子文で叩きしめられている。時期については、多摩ニュータウンNo.692遺跡のC区から出土した瓦群ときわめて類似しており、同一の技術集団によって製作された可能性が強い。C区は12世紀後半から14世紀前半の土地利用が考えられており、I群の瓦と同類の瓦がどの段階に所属するものなのかは明らかでない(註8)。1枚、1枚の瓦が丁寧に調整されている点に、次に述べるII群の瓦との共通点があり、ここでは13世紀中頃として捉えておき、今後の調査の進展を待ちたい。

II群は軒平瓦に「顎貼り付け技法」を採用している。軒丸瓦は「圏線無し・左巻き三巴文」で大きめの珠文が巡る。三巴文の頭は尖って断面がやや平坦である。丸瓦の玉縁部に吊紐痕が無い。平瓦には多量の離れ砂が撒かれ、凹面はナデにより丁寧に調整され、側面をナデた時の折り返し痕が残る。凸面には凹型台からのみ出し痕がつき、成形痕がまったく残らず離れ砂が満遍なく付着

していることに特徴がある。Ⅰ群の瓦と同様に、全体的に個々の瓦が丁寧に調整されている。焼成が甘く、軟質でとろとろした質感をもつ。時期については、「顎貼り付け技法」を採用していることから13世紀中頃と想定する。

Ⅲ～Ⅴ群の瓦は軒平瓦に「瓦当貼り付け技法」を採用している。丸瓦の玉縁部に1段、筒部に二段の太くて波状の吊紐痕がつく。軒丸瓦は「圏線有り・右巻き三巴文」で、二本の圏線に囲まれた小さな珠文が巡る。平瓦にコビキAの糸きり痕が残る。凹凸両面に多量の離れ砂が撒かれ、全体的に調整が雑である。まれに凸面に平行文のタタキ痕が見られる。99%の丸瓦と平瓦、1%の道具瓦（熨斗瓦・面戸瓦・鬼瓦・谷戸瓦）から構成されており、総瓦葺に用いられたと考えられる。時期について、清野は梵鐘に刻まれた蓮華唐草文の検討から、13世紀後半としている（清野1996a）。また、深沢はⅢ～Ⅴ群の瓦がすべて「瓦当貼付け技法」によるものであることから「瓦当貼付け技法」が定着した13世紀後半でも新しい時期としている（深沢2007）。ここではⅢ～Ⅴ群の瓦の年代を13世紀後半～13世紀末にかけてと押さえておく。

Ⅵ群の瓦は軒丸瓦に「圏線無し、左巻き三巴文」2個一単位の大きめの珠文が巡る。大きさ・胎土・色調・焼成・成形技法など全てにおいてⅠ群・Ⅱ群・Ⅲ～Ⅴ群とは様相を異にしている。Ⅵ群の瓦の正確な時期については不明である。資料の増加を待ちたい。

以上、主に顎部の成形技法からⅡ群の瓦を13世紀中頃、Ⅲ～Ⅴ群の瓦を13世紀後半から13世紀末に比定した。この2つのグループは出土量や組成から、前者は屋根の一部の大棟に葺かれた瓦で、真慈悲寺の名を背銘に刻んだ国指定重要文化財の阿弥陀如来坐像（1250年造立）が納められたであろう阿弥陀堂の屋根に葺かれた瓦と考えられる。また後者はその後、真慈悲寺が鎌倉幕府のバックアップの下で急激に発展していく過程で形を整えたと考えられる総瓦葺きの本堂に用いられた瓦と想定する。

「顎貼り付け技法」

出土した顎部の瓦は文様面を含めてひどく破損している。割れ口はいずれも砕けるように細かく割れており、その状況は平瓦部からの剥離面に限らず、珠文や周縁部が欠ける場合も同様である。このことから、顎部を形づくった粘土は、最初から顎の形状を想定してこしらえた紐状のものではなく、粘土塊であったと考える。凸型台の上にのせた平瓦の凸面の端に幅3センチほど浅く窪めて新鮮な面を露出させ、そこに格子状に刻み目（近世の棧瓦にみられるカキヤブリに相当）を施し、顎部となる粘土を貼り付けるのであるが、その際に貼り付けた粘土は棒状に練った粘土紐ではなく、塊を少しずつ刻み目の中に押し付けながら顎の形を作ったと考えられる。復元される顎の高さが4センチと低く、顎下と顎裏とが鈍角をなすのは、指で縦方向に押しつけながら形つくられた結果ゆえであると考えられる。

「蓮華唐草文」

文様は全て左右非対象の「蓮華唐草文」である。20点出土した蓮華唐草文軒平瓦の瓦当部のうち、中心の満開の蓮花から向かって左側の文様を構成しているものが9点、右側の文様を構成しているものが11点である。完形の瓦当資料は出土していない。向かって左側の出土資料を第33図に、向かって右側の資料を第34図にまとめた。左側で観察される文様には「蕾」や「咲きかけの花」は全く見受けられない。一方、右側で観察される文様には例外なく「蕾」が見られ、最後はくねったレンコン部分で終わるなどの点で、左右で文様が固定化している。このことから、「蓮華唐草文」は、満開の花（図版31-31）を中心としてその左右に「ハチス」（図版31-35）を配し、右側に「蕾」（図版31-32）や「咲きかけの花」（図版31-33）を刻み、左へ向かうにつれて「満開」、「ハチス」、横向きの「咲き切った花」を2つ配した、左右非対称で極めて特殊な構成内容であった可能性が高い（註9）。

註

註1 清野利明が『京王百草園内三椽庵移築工事に伴う埋蔵文化

財発掘調査の報告書』1998年、『東京の中世瓦』2000年の中で、百草園内出土の瓦をA類からD類に分類した。その後、中山弘樹が『日野市郷土資料館紀要第2号（通巻第10号）』「京王百草園（推定「真慈悲寺」跡）出土の中世瓦の研究Ⅰ—丸瓦についての中間報告—」2006年で、Ⅰ群からⅤ群に分類し、Ⅰ・Ⅱ群が清野分類のC・D群に、Ⅳ・Ⅴ群をA・B類に相当するとし、Ⅲ群を新たに設定した。翌2007年に小黒恵子が「京王百草園（推定「真慈悲寺」跡）出土の中世瓦の研究Ⅰ—軒平瓦についての中間報告—」の中で、中山が設定したⅠ群からⅤ群の分類を時代の古い順番に番号をふり直したために、最初からの読者にとって分類番号がわかりずらくなっている。本報告では、2007年の分類番号を踏襲し、今までの清野・中山による報告内容も説明に加味・補完しながら最終的な分類としたい。

註2 薄片観察による特定鉱物の変質から推定される焼成温度は1200℃前後と報告されている（附篇3参照）。

註3 ここでⅠ群として分類している瓦は、清野利明が『京王百草園内三椽庵移築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書』1998年でA類として報告した資料である。清野は報告の中で、その特徴をA・B類としてまとめて記述しているが、今回改めて詳細に検討した結果、A類とB類には明確な技術的な違いがあることがわかったので、清野のA類をⅠ群、B類をⅡ群に分けて報告した。

註4 №126・127の瓦は、京王百草園内の展望台付近で採集された。№125の完形の平瓦、112の丸瓦、174の軒平瓦は福田健司氏が寄託された瓦で京王百草園周辺の実踏の際に表採したものである。発掘調査で出土した瓦は全て割れており、完形のものはない。

註5 中世瓦の製作法については服部・余語（1990）に基づく。

註6 中間報告として、中山（2007）が計測値のみすでに報告している。しかし、最終報告に向けてデータを取り直したところ、かなりの計測ミスが判明した。中間報告時の論旨に影響するものではないが、数値は本報告書記載のものに訂正が必要である。

註7 日野市遺跡調査会編（1993）より転載

註8 東京都八王子市別所1丁目22番地の多摩ニュータウン№692遺跡からⅠ群の瓦と酷似する瓦が出土している。実見によると、胎土・焼成・色調・製作技術など全てにおいてⅠ群の瓦と共通しており、同じ窯、同じ技術者集団によるものである可能性が

非常に高い。№692遺跡のすぐ北側斜面には曹洞宗由木山蓮生寺が位置している。蓮生寺は源義朝の護持僧円浄房が創建したと伝える寺で、頼朝が丹後局のお腹にいた時の御帯を加持したのが円浄房である。円浄房は、寿永元年（1182）四月二十日に頼朝に召し出されて鎌倉に参上している（『吾妻鏡』）。その4年後の文治二年（1186）『吾妻鏡』の中に記述される真慈悲寺とともに源頼朝と深い関係をもつ寺である。また、蓮生寺の背後に控える小高い山の山頂付近より、清野により14世紀初頭とされる「瓦当貼り付け技法」による瓦も報告されている。（『シンポジウム幻の真慈悲寺を追う』2007年）

註9 前掲清野（1998）で「蓮華唐草文」を想定復元し図示している。清野はこれを「・・・これは根を張ったような唐草文を巡りながら蓮華の一生を表現したものであろう（輪廻転生）。また、一つの根に様々な段階の蓮華が咲いているという蓮華の特徴を表わす、非常にリアリティーに富む表現方法を採用したものだろうか？」と述べている。

参考文献

1. 東洋一 1994 「平瓦製作における中世の技術革新について」『研究紀要第1号』（財）京都市埋蔵文化財研究所
2. 大森健二 1998 『社寺建築の技術—中世を主とした歴史・技法・意匠—』理工学社
3. 石川安司 1996 「比企地方の中世瓦（2）（3）—資料の補遺と同範・同文異範瓦を中心に—」『比企丘陵2』比企丘陵文化研究会
4. 石川安司 2007 「比企型中世瓦とその展開—同範資料を中心とする再検討」『埼玉考古42』埼玉考古学会
5. 鎌倉市教育委員会 2002 『鎌倉市二階堂国指定史跡 永福寺跡 国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査報告書—遺物編・考察編—』
6. 株式会社第三開発編 2006 『東京都日野市 仁王塚遺跡—百草谷緑地保全地区計画に伴う埋蔵文化財発掘報告書—』日野市
7. 木口 一・菱山泰一 1984 「百草園 松連寺寿昌院 上・下」『多摩のあゆみ』第34・35号
8. （財）京都市埋蔵文化財研究所 1996 『研究紀要第3号』
9. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991 関越自動車道（上

越線) 地域埋蔵文化財発掘調査報告書第8集『白石大御堂遺跡—園池を伴う中世寺院址の調査—』

10. 極楽寺中心伽藍跡群発掘調査団 1998 『神奈川県・鎌倉市極楽寺旧境内遺跡—江ノ島電鉄株式会社極楽寺地区改良計画に伴う発掘調査報告書』

11. 小林康幸 1989 「関東地方における中世瓦の様相—中世都市鎌倉と周辺地域にみる系譜性を中心として—」『神奈川考古』第25号

12. 今野慶信 2007 「関東御祈禱所について」『シンポジウム 幻の真慈悲寺を追う』《発表要旨》多摩地域史研究会

13. 埼玉県立民俗文化センター 1986 埼玉県民俗工芸調査報告書第4集『埼玉のかわら』

14. 佐川正敏「鎌倉時代の軒平瓦の編年研究—よみがえる中世の瓦」『文化財論叢Ⅱ』奈良国立文化財研究所

15. 玉置豊次郎監修・坪井利弘著 1976年 『日本の瓦屋根』理工学社

16. 土渕英夫 1988 「百草園の史蹟について」『日野の歴史と文化』27号 日野史談会

17. 東京芸術大学大学院美術研究科文化財保存学研究専攻保存修復建造物研究室編 2011 『鏝阿寺本堂調査報告書』足利市教育委員会

18. 二宮考古館資料整理委員会編 2004 二宮考古館資料整理報告書『武州二宮神社と古代・中世の瓦』あきる野市教育委員会

19. 服部実喜・余語琢磨 1990 「称名寺旧境内の中世瓦」、『物質文化研究』53 物質文化研究会

20. 深澤靖幸 2001 「武蔵府中高安寺の中世瓦」『府中市郷土の森博物館紀要第14号』府中市郷土の森博物館

21. 深澤靖幸 2004 「二宮神社境内出土の中世瓦をめぐって—鎌倉時代末期を中心に—」『郷土あれこれ』第14号 あきる野市教育委員会

22. 深澤靖幸 2011 「国府八幡宮の中世瓦」『府中市郷土の森博物館紀要第24号』府中市郷土の森博物館

23. 法隆寺昭和資財帳編集委員会 1996 『法隆寺の至寶 瓦—昭和資財帳15—』

24. 山崎信二 2000 『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報第59冊 奈良国立文化財研究

真慈悲寺関連資料・文献

1. 小黑恵子 2008 『京王百草園(推定「真慈悲寺」跡)出土中世瓦の研究Ⅱ—軒平瓦について—の中間報告—』日野市郷土資料館紀要第3号(通巻第11号)

2. 小黑恵子 2012 「日本武州多西吉富真慈悲寺について」『多摩・中世寺院の諸様相—多摩における中世寺院の機能・役割を考える—』《発表要旨》多摩地域史研究会

3. 葛飾区郷土と天文の博物館編 2007 『葛飾区郷土と天文の博物館紀要』第11号

4. 清野利明 1996 「梵鐘に刻まれた蓮華唐草文と瓦」『貝塚』51 物質文化研究会

5. 清野利明 1996 「真慈悲寺の深淵を探索(上) 平安遺文401号文書を中心として」『日野の歴史と文化』第43号 日野史談会

6. 清野利明 2001 「日野の遺跡“こぼれ話”(1) 百草園と蓮の瓦」『THE HINO NEWS』第298号

7. 清野利明 2002 「日野の遺跡“こぼれ話”(15) 謡曲「横山」のモデルを探索—真慈悲寺出土の経筒から—」『THE HINO NEWS』第301号

8. 清野利明 2010 「真慈悲寺推定地出土の中世瓦—佐渡配流の日蓮が視た墓—」『幻の真慈悲寺を追い求めて』日野市郷土資料館

9. 郷土出版社 2007 『図説 八王子・日野の歴史』

10. 京王帝都電鉄・京王百花苑 1990 「百草園の史蹟をたずねて—幻の真慈悲寺—」講演会資料

11. 下田九一 1981 「百草周辺の史跡」『日野の歴史と文化』第15号 日野史談会

12. 谷 春雄 1975 「百草松連寺私考」『日野の歴史と文化』第8号

13. 多摩の古代・中世を考える会編 1993 『真慈悲寺の研究』多摩の古代・中世を考える

14. 多摩の古代・中世を考える会 1994 「幻の真慈悲寺とその周辺」シンポジウム資料

15. 多摩地域史研究会 2007 シンポジウム『幻の真慈悲寺を追う』《発表要旨》

16. 中世瓦研究会 2000 『東京の中世瓦』第7回中世瓦研究会資料集

17. 中山弘樹 2007年『京王百草園（推定「真慈悲寺」跡）出土中世瓦の研究Ⅰ—丸瓦についての中間報告—』日野市郷土資料館紀要第2号（通巻第10号）
18. 日野市 1992「遺跡が語る日野の中世 京王百草園発掘調査の中間報告」講演会資料
19. 日野市遺跡調査会編 1993 日野市埋蔵文化財発掘調査報告14『京王百草園の発掘調査—幻の真慈悲寺を探る』京王帝都電鉄株式会社
20. 日野市史編さん委員会 1994『日野市史 通史編二（上）中世編』
21. 日野市ふるさと博物館 1993「中世の日野～幻の真慈悲寺と高幡不動～」企画展図録
22. 日野市ふるさと博物館 1995「特集 日野の中世城館を探る」日野市ふるさと博物館紀要第4号
23. 日野市遺跡調査会編 1998『京王百草園内三椽庵移築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』京王帝都電鉄株式会社、
24. 日野市郷土資料館 2007「幻の真慈悲寺」リーフレットNo.1
25. 日野市郷土資料館 2007 第1回特別展「幻の真慈悲寺を追う」展示解説リーフレット
26. 日野市郷土資料館 2008「幻の真慈悲寺」リーフレットNo.2
27. 日野市郷土資料館 2009「百草・倉沢散策マップ」日野市郷土資料館・幻の真慈悲寺調査の会 2010年『幻の真慈悲寺を追い求めて』
28. 日野市郷土資料館 2011「幻の真慈悲寺」リーフレットNo.3
29. 日野市郷土資料館 2011 第2回特別展「幻の真慈悲寺を追う」展示解説リーフレット
30. 峰岸純夫 1990「武蔵国吉富郷真慈悲寺」『地方史研究』227 第40巻5号
31. 峰岸純夫 2010『近藤義雄先生卒寿記念論集』「鎌倉時代における安達氏と小笠原氏の連携—女性と寺社の視点から—」
32. 吉田 幸一 1979「日野市百草地内推定経筒群出土の中世陶器」『日野考古研究』2 日野考古学会

	軒丸瓦	軒平瓦	丸瓦	平瓦	谷戸瓦	熨斗瓦	面戸瓦	鬼瓦	他	合計
I群	0	0	61	40	0	0	0	0	0	101
II群	3	8	37	51	0	0	0	0	0	99
III群	2	2	138	581	0	2	0	0	1	726
IV群	9	8	338	1259	0	1	0	6	0	1621
V群	11	18	685	2132	3	3	1	11	2	2862
VI群	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
合計	27	36	1259	4063	4	6	1	17	3	5412

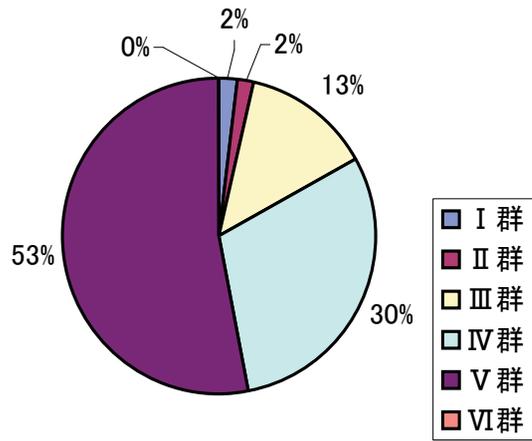
表1 群別出土点数

	玉縁部～段部	筒部側辺	筒部下端	部位不明	合計
I群	12	11	11	27	61
II群	10	13	5	9	37
III群	19	38	38	43	138
IV群	81	89	48	120	338
V群	166	160	93	266	685
VI群	0	0	0	0	1259

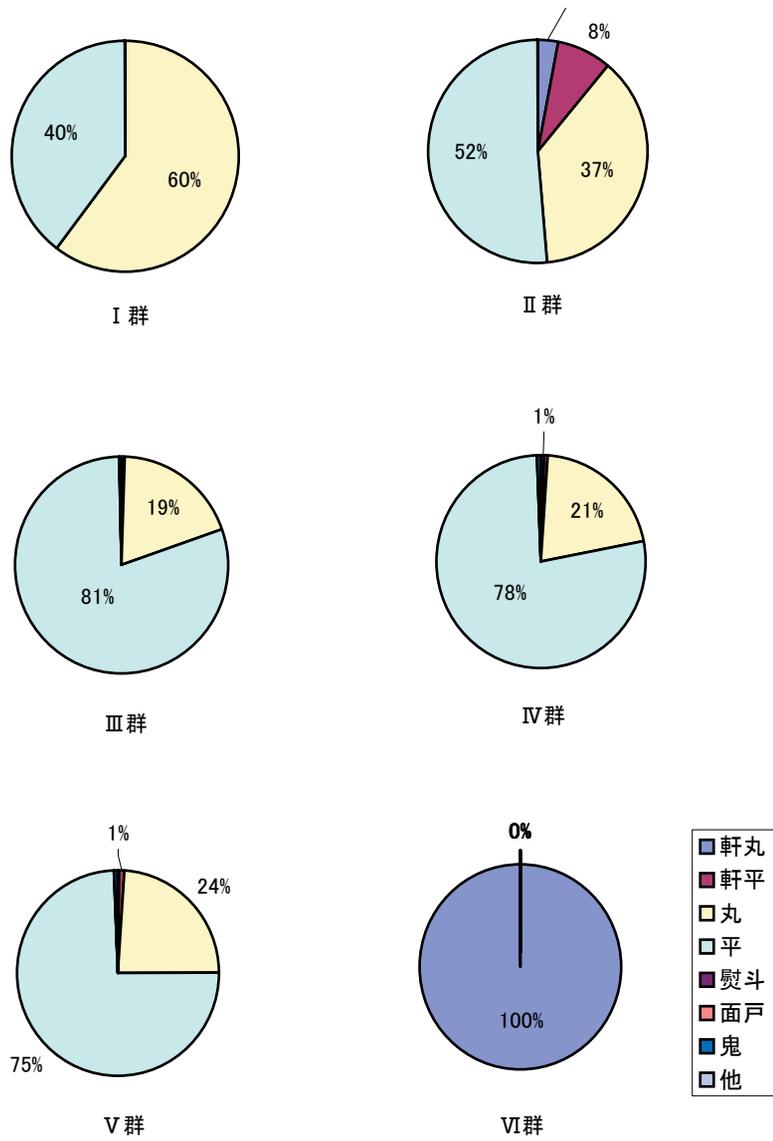
表2 丸瓦部位別出土点数

	上下	上端左	上端右	下端左	下端右	上辺	下辺	側辺	部位不明	合計
I群	0	2	0	2	1	0	0	15	20	40
II群	0	2	0	0	0	3	3	12	31	51
III群	2	20	18	12	14	45	40	160	270	581
IV群	1	47	39	35	36	137	56	317	591	1259
V群	3	78	79	40	43	236	155	503	995	2132
VI群	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

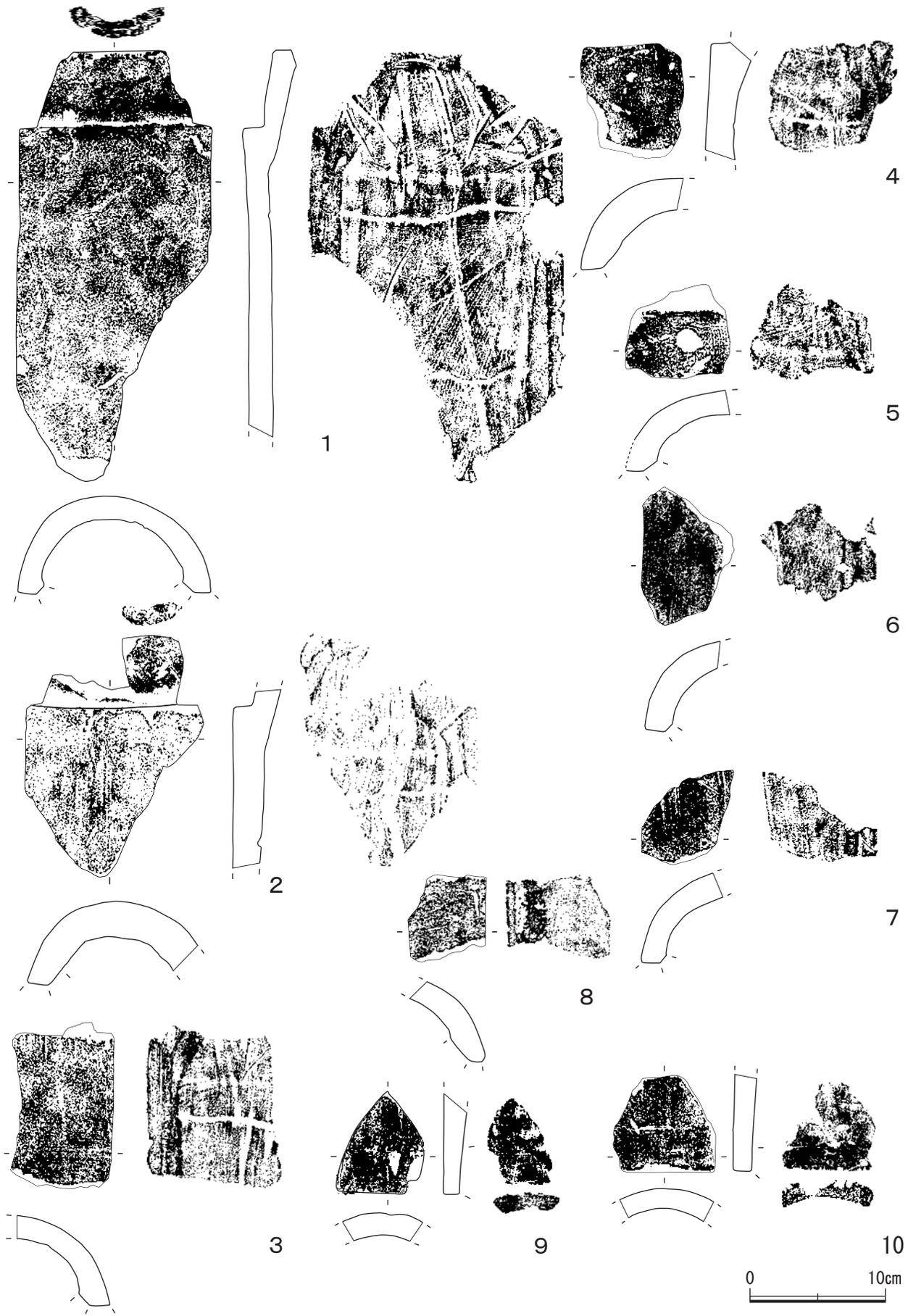
表3 平瓦部位別出土点数



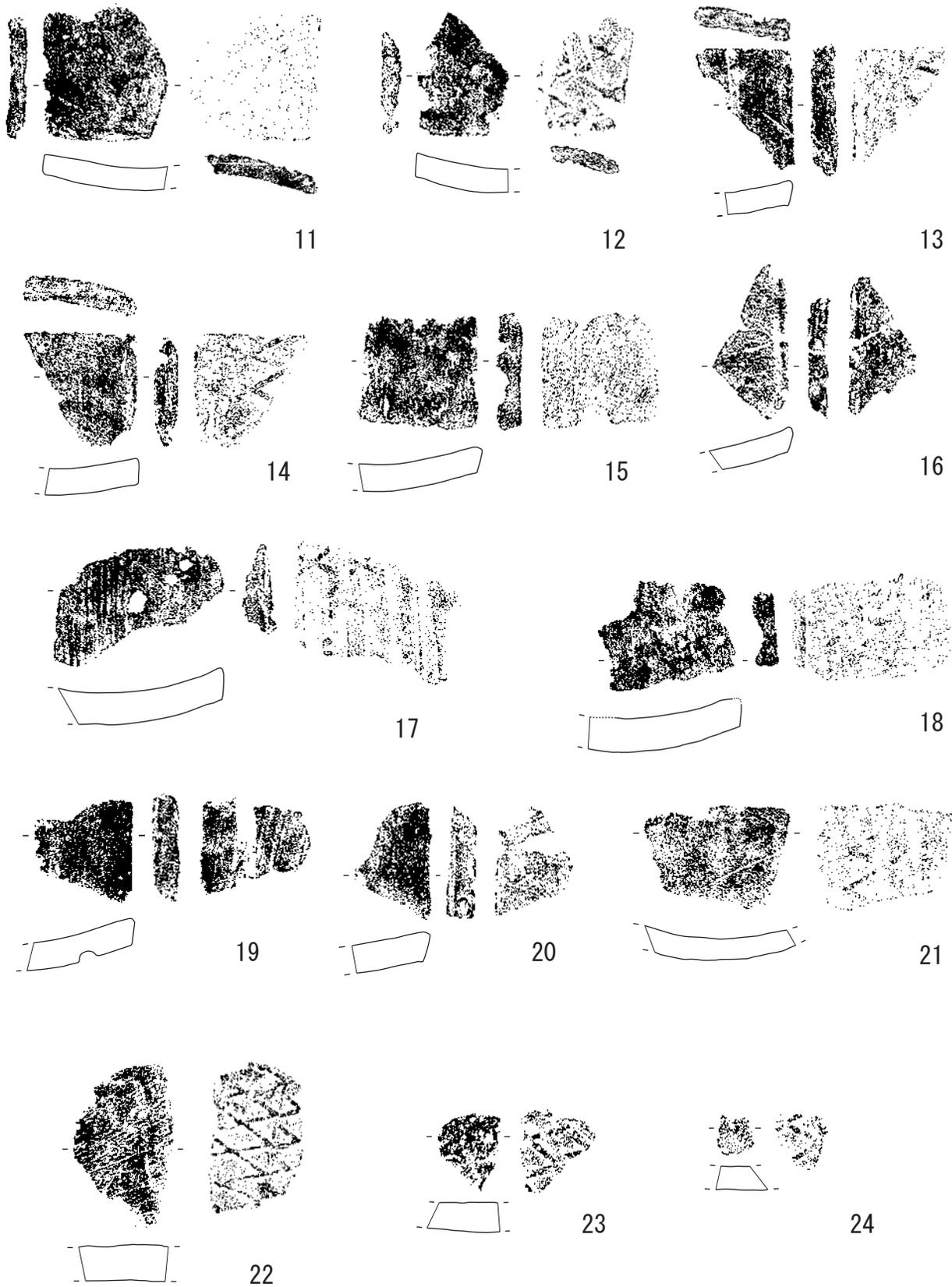
第4図 群別出土率



第5図 群別器種組成

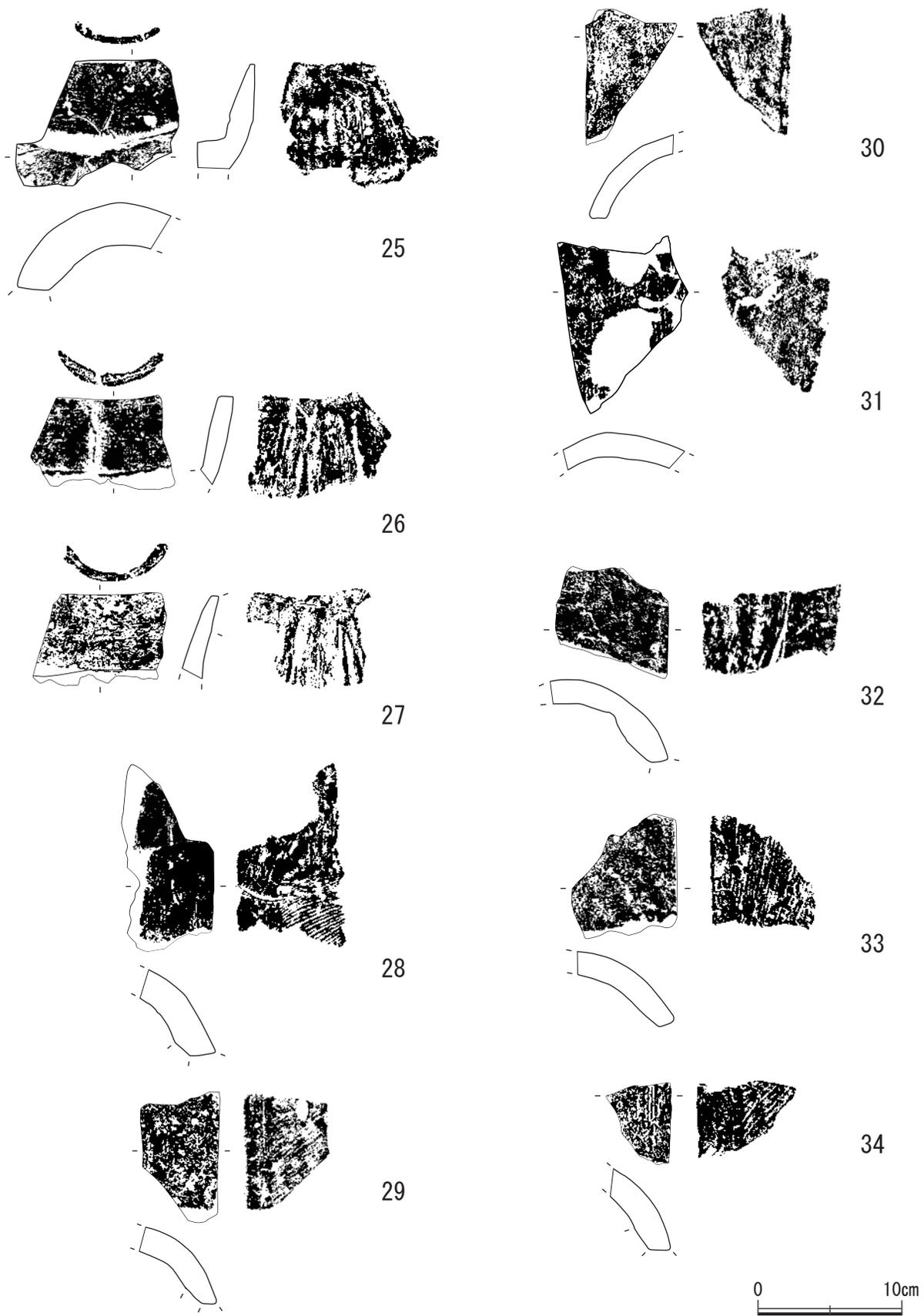


第6图 I群丸瓦

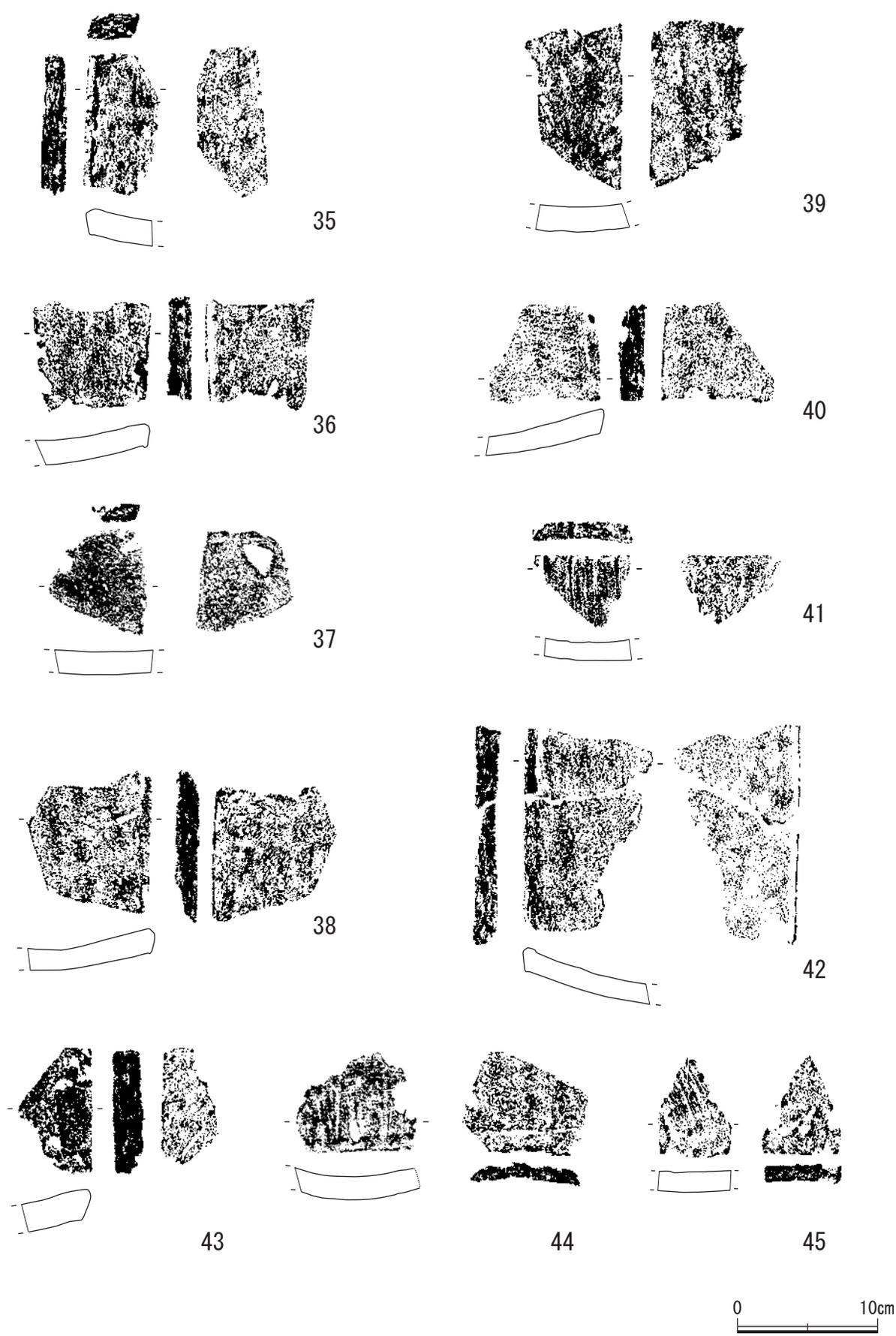


0 10cm

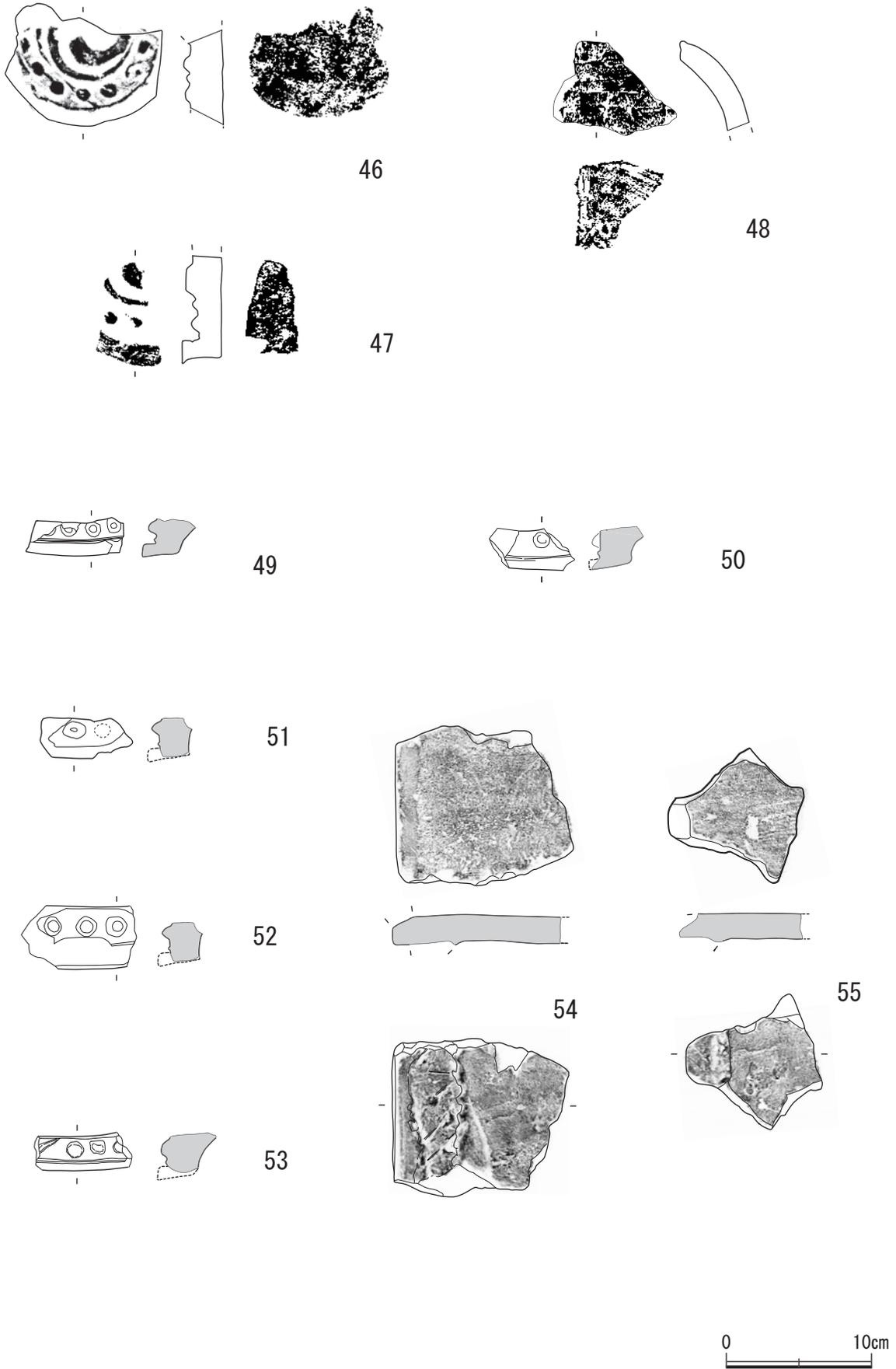
第7图 I群平瓦



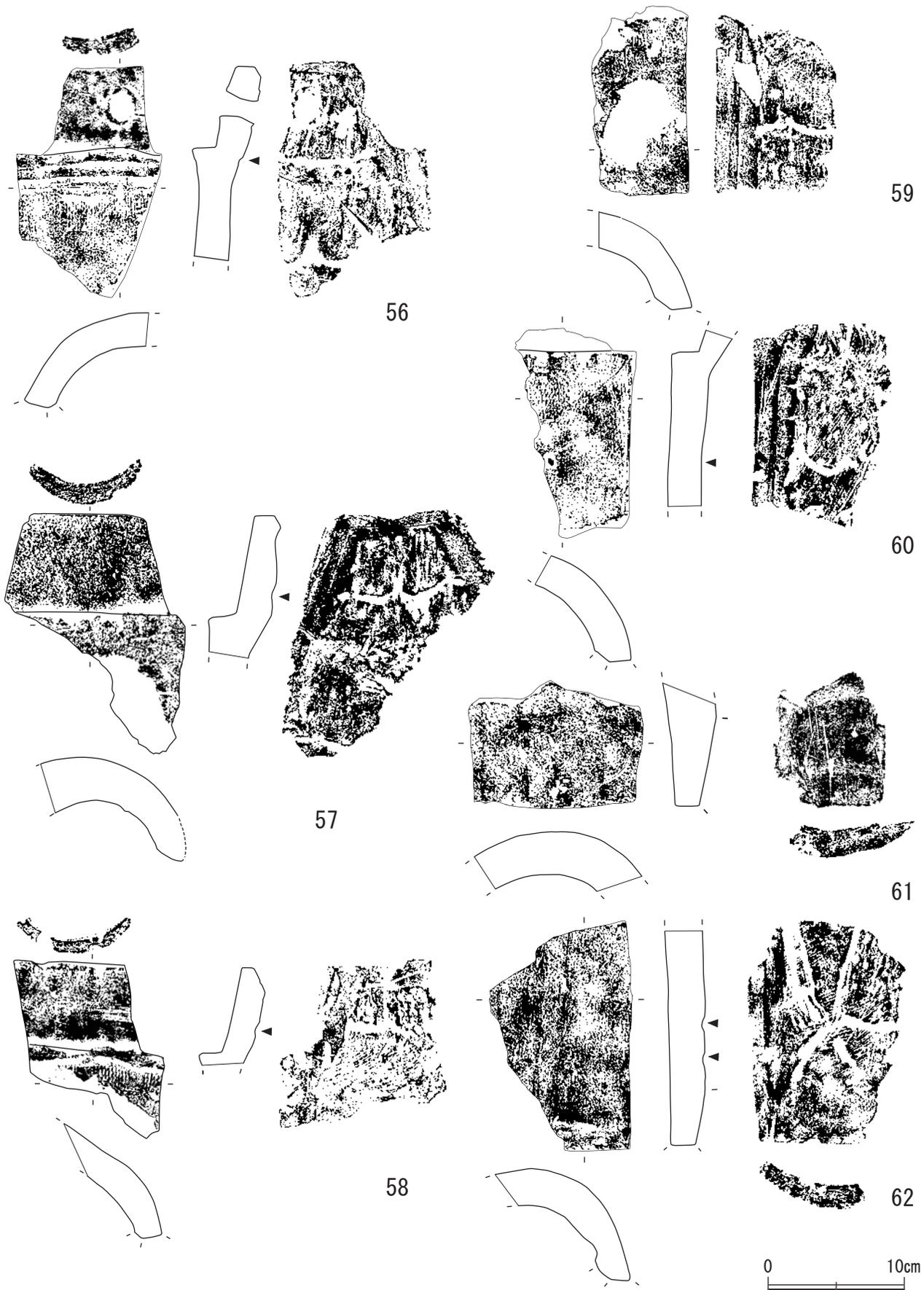
第8図 II群丸瓦



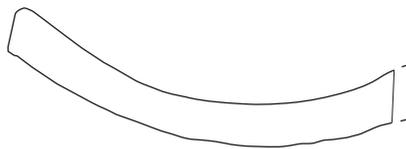
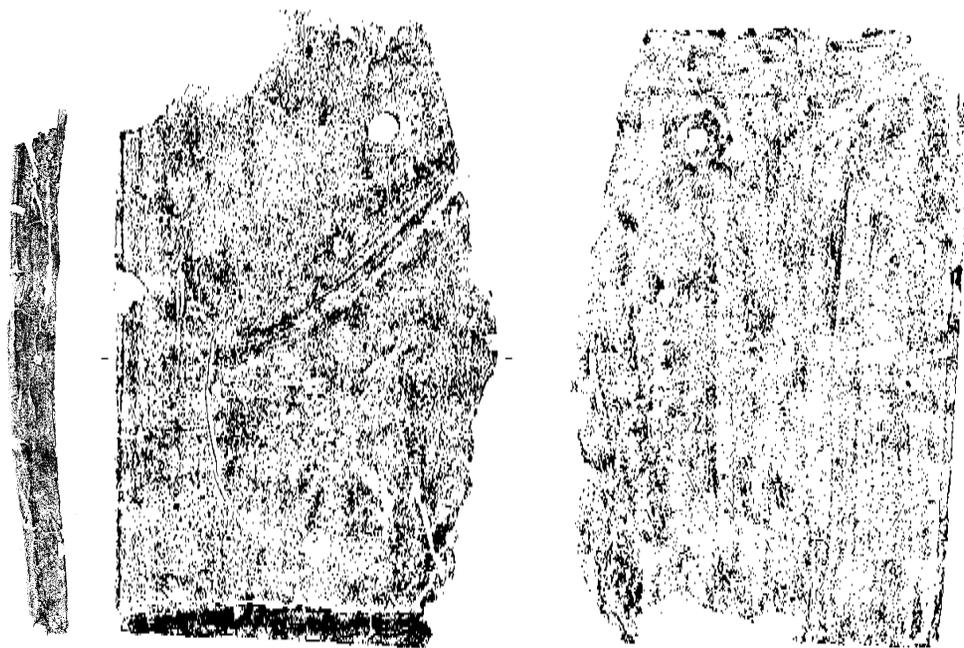
第9图 II群平瓦



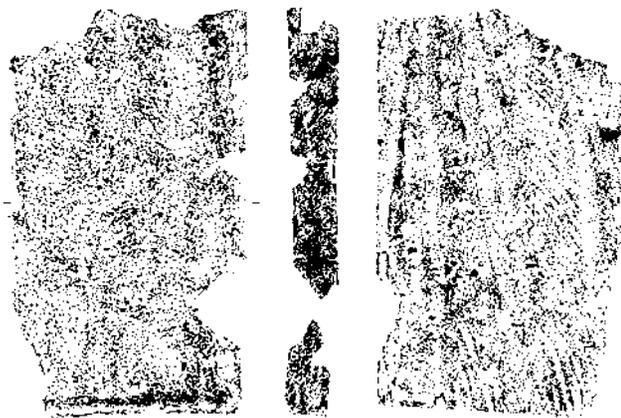
第10図 II群軒丸・軒平瓦



第11图 Ⅲ群丸瓦



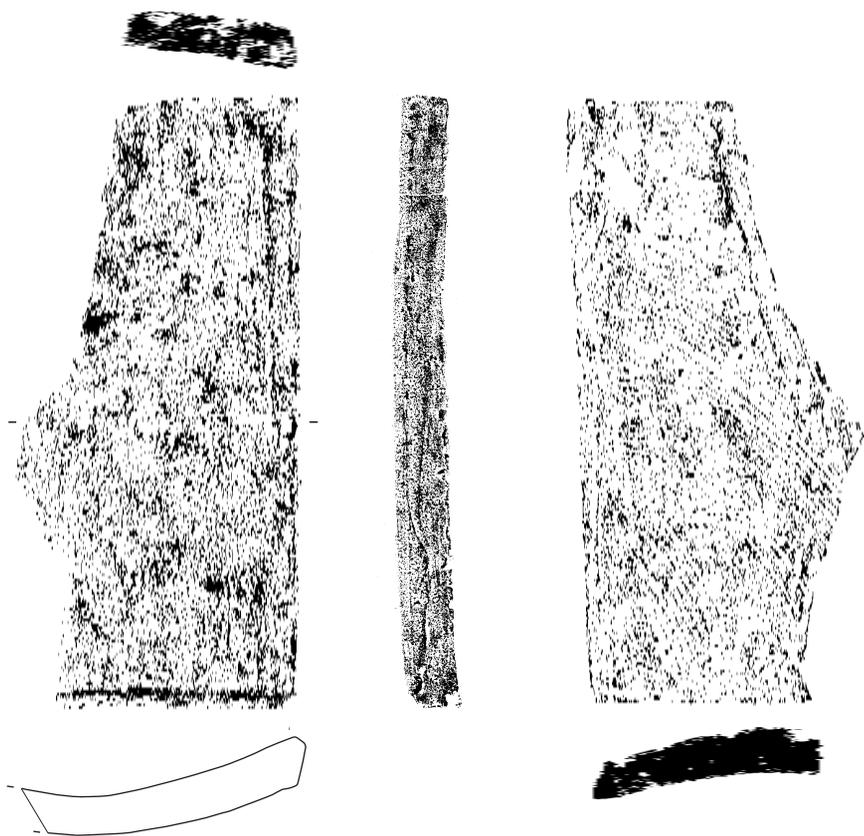
63



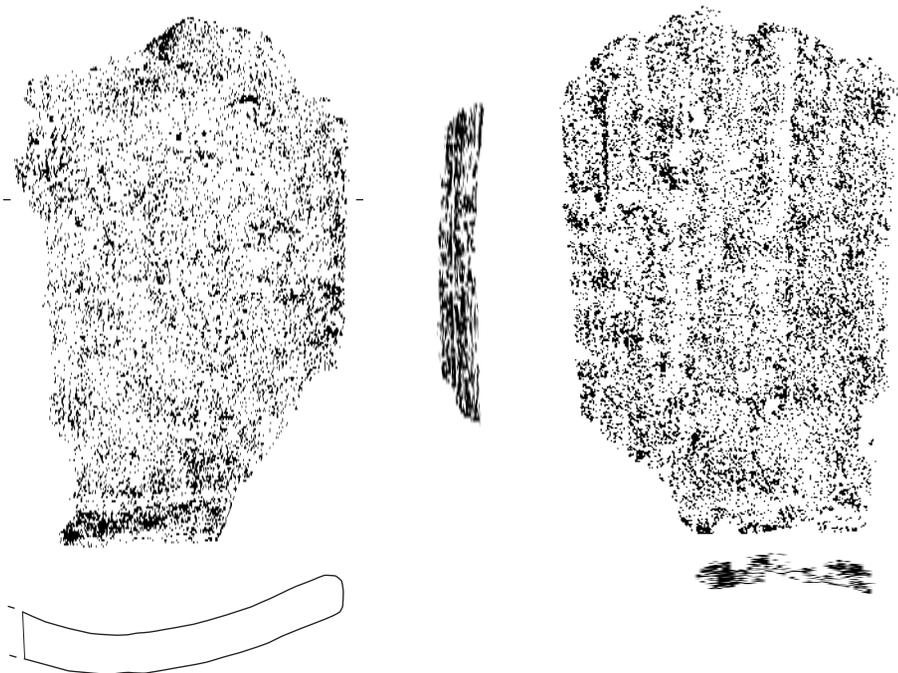
64



第12图 Ⅲ群平瓦 (1)



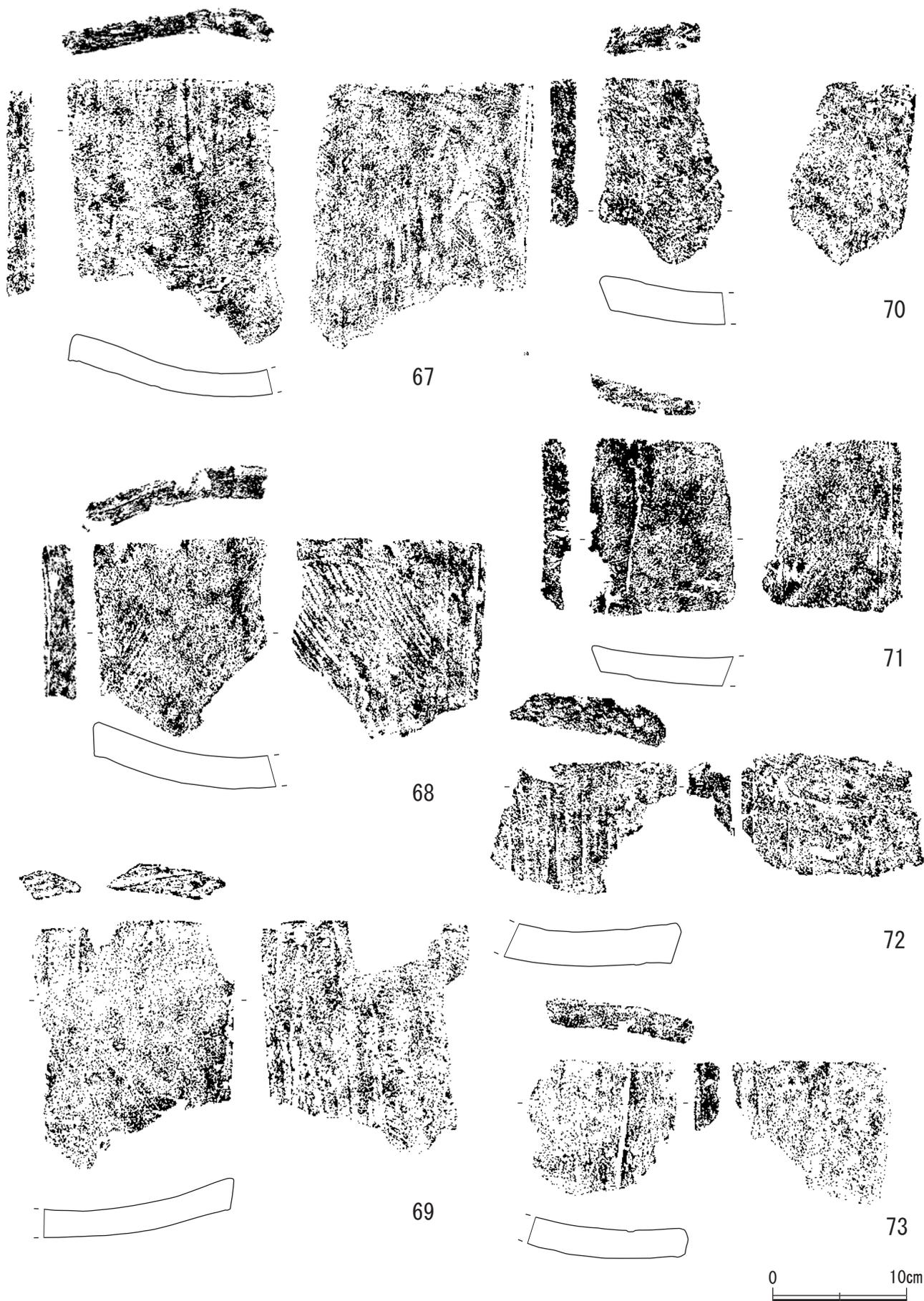
65



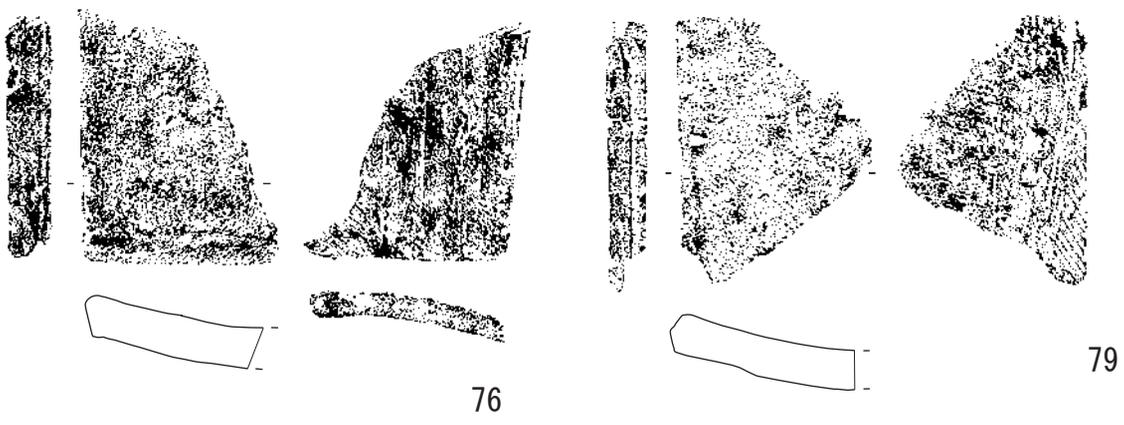
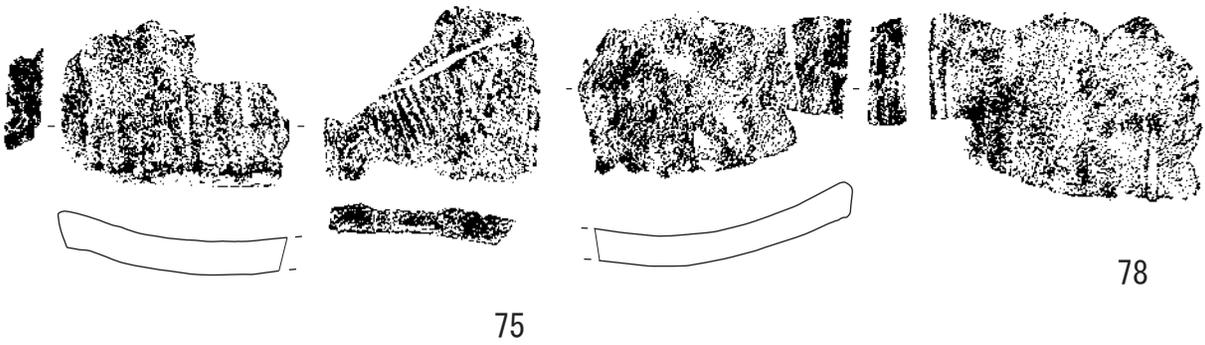
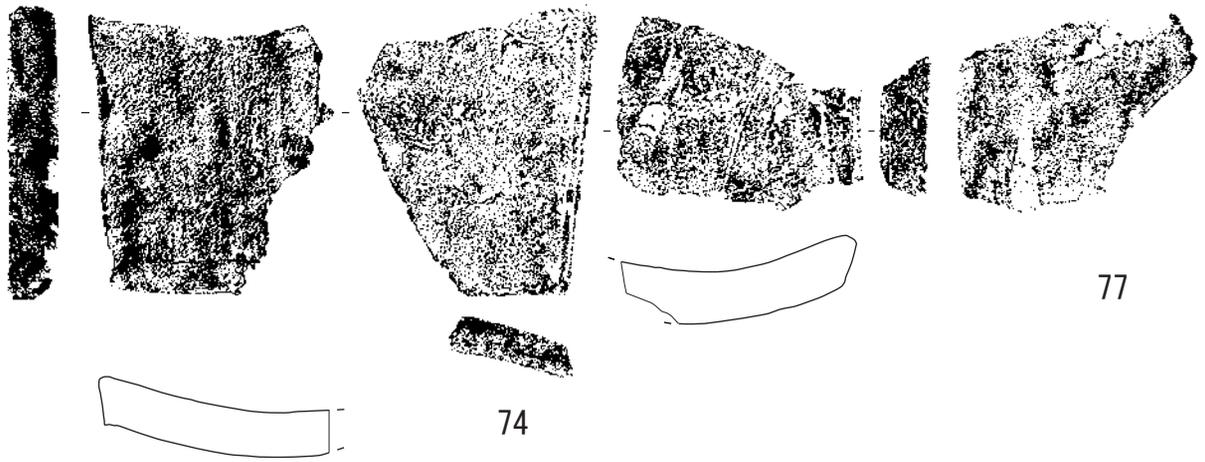
66

0 10cm

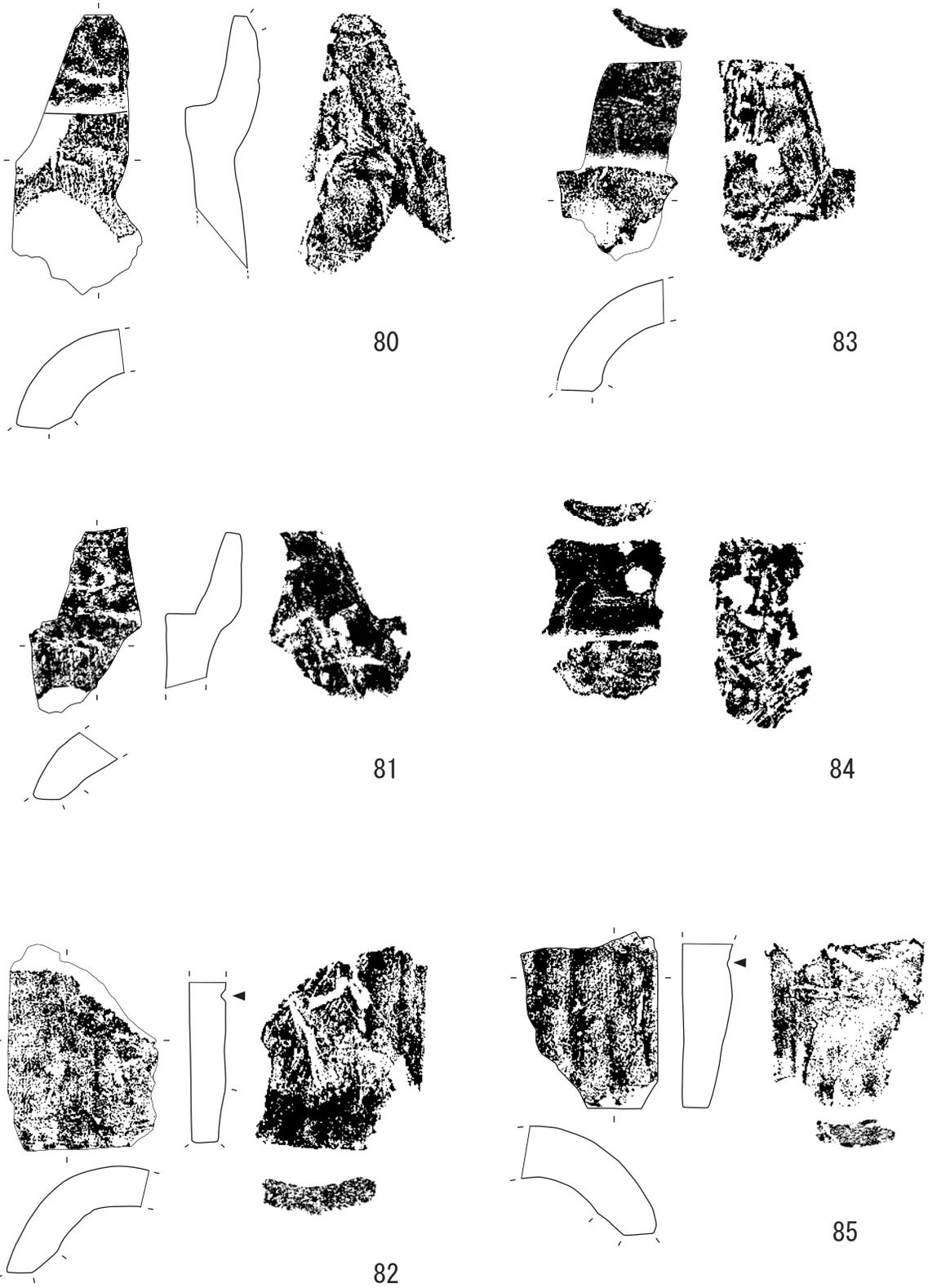
第13図 Ⅲ群平瓦（2）



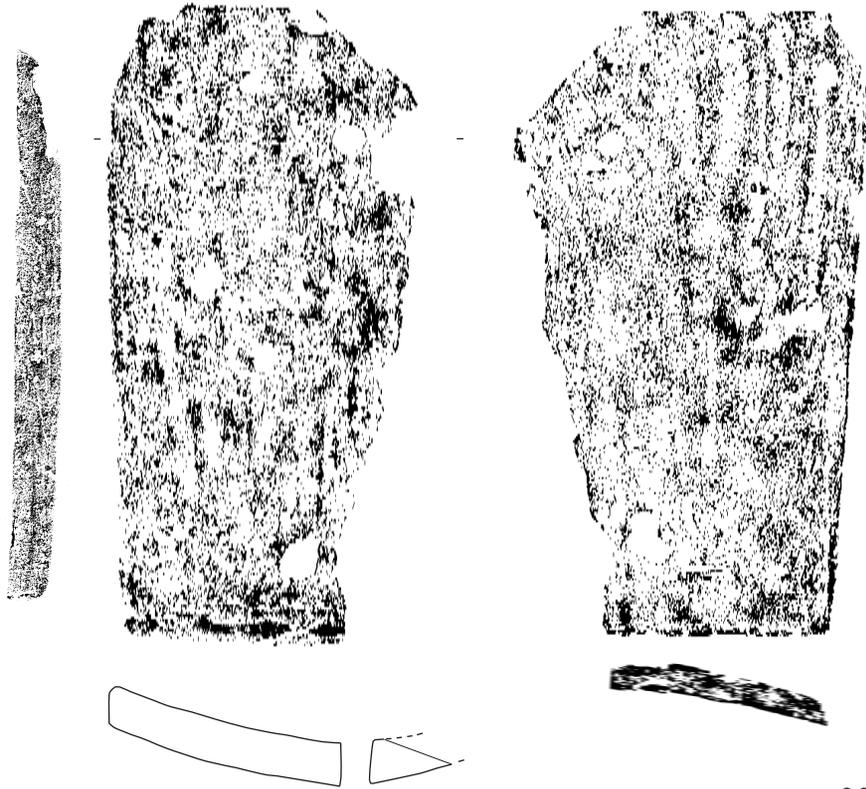
第14图 Ⅲ群平瓦（3）



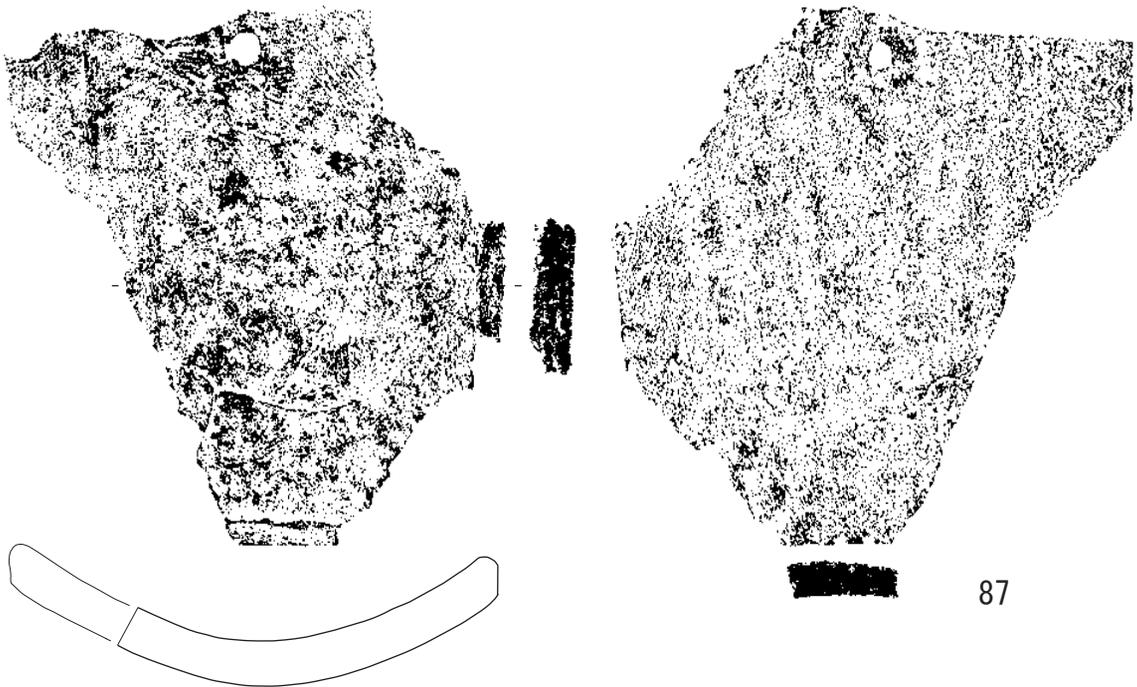
第15図 Ⅲ群平瓦（4）



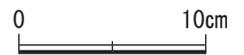
第16图 IV群丸瓦



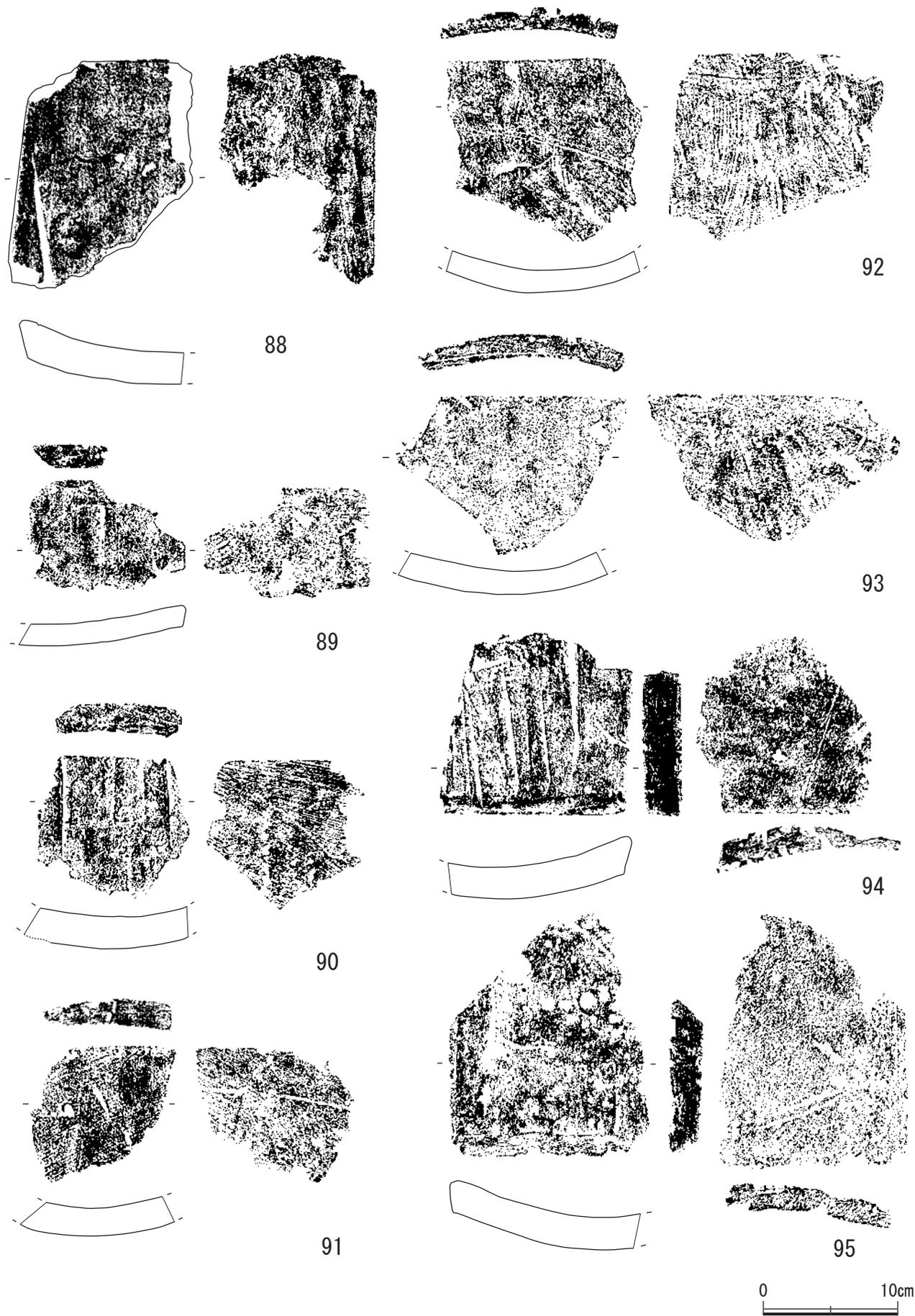
86



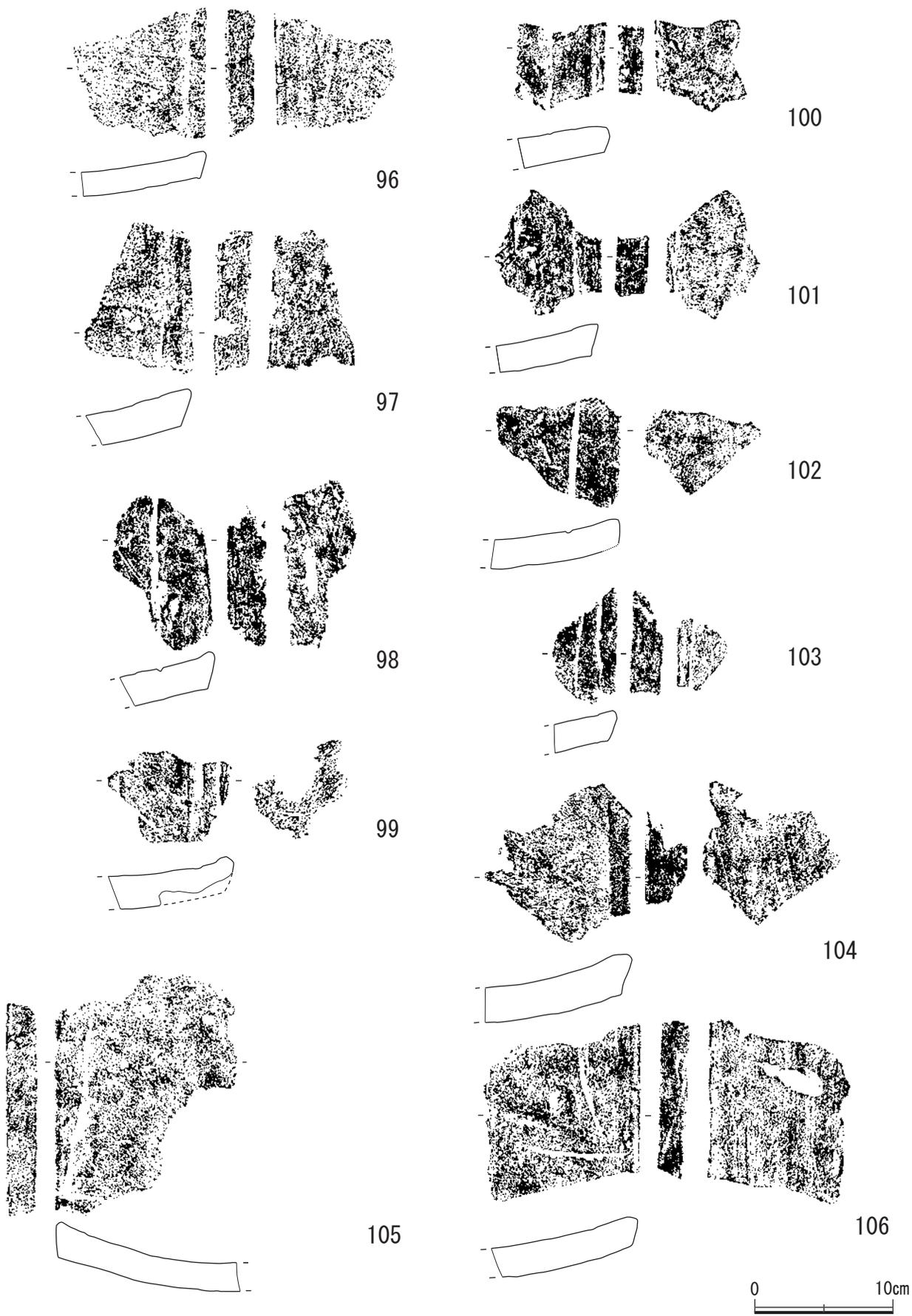
87



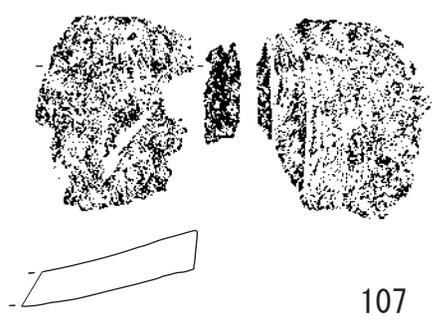
第17图 IV群平瓦 (1)



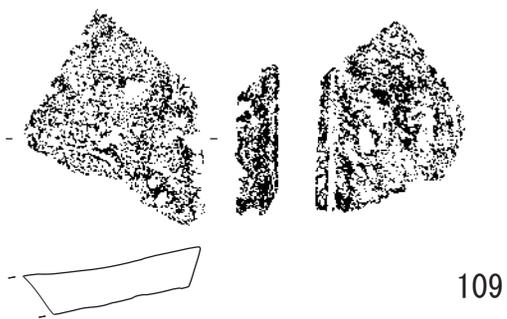
第18图 IV群平瓦(2)



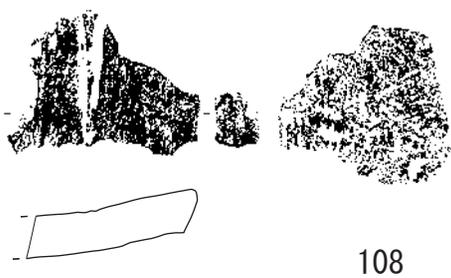
第19図 IV群平瓦 (3)



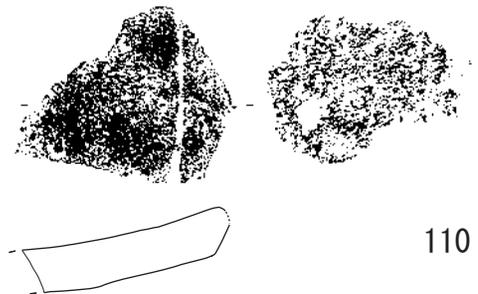
107



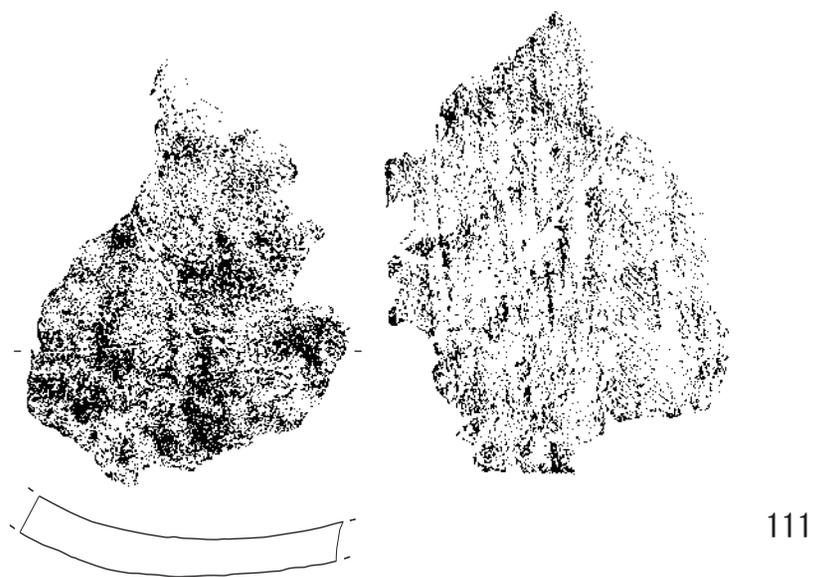
109



108



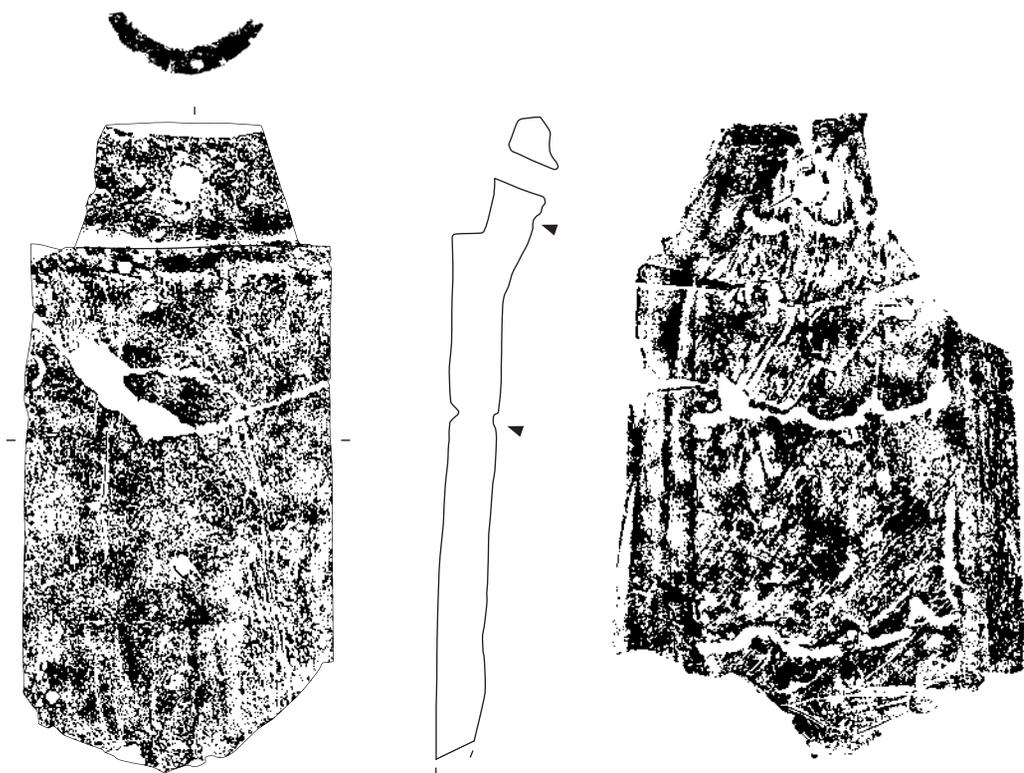
110



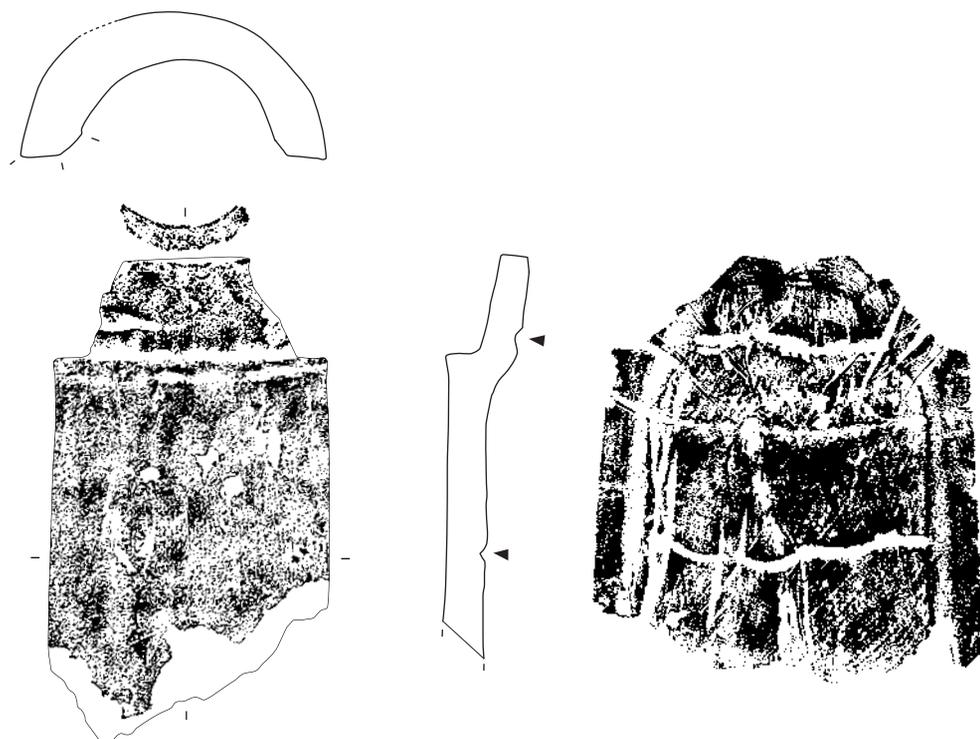
111



第20図 IV群平瓦 (4)



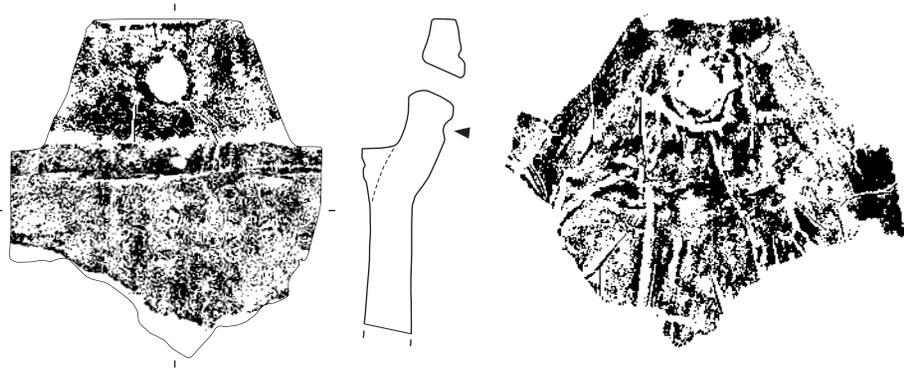
112



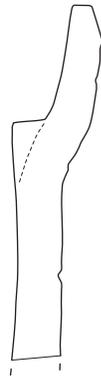
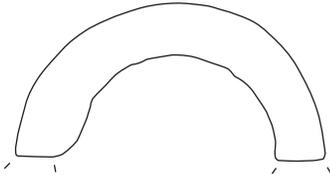
113

0 10cm

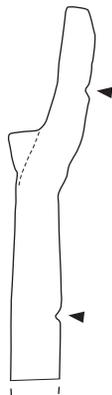
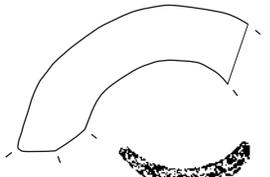
第21图 V群丸瓦(1)



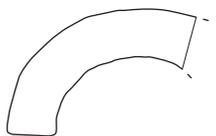
114



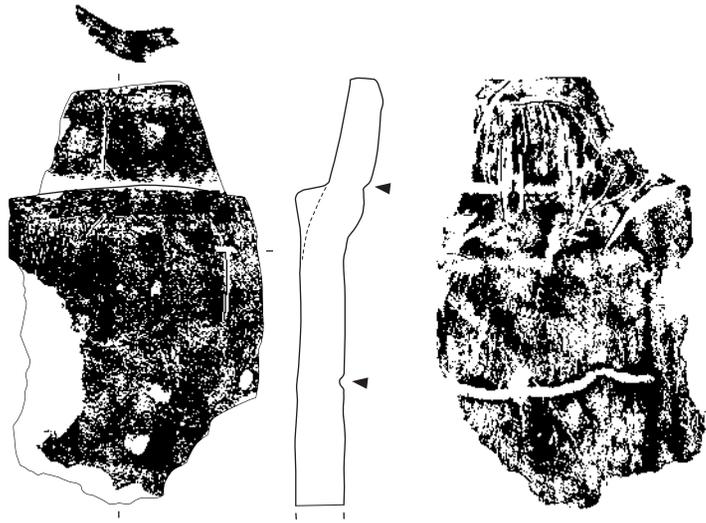
115



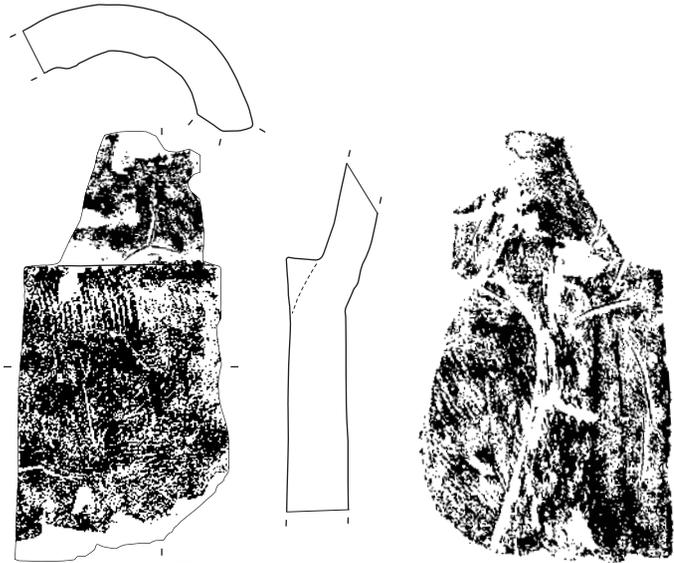
116



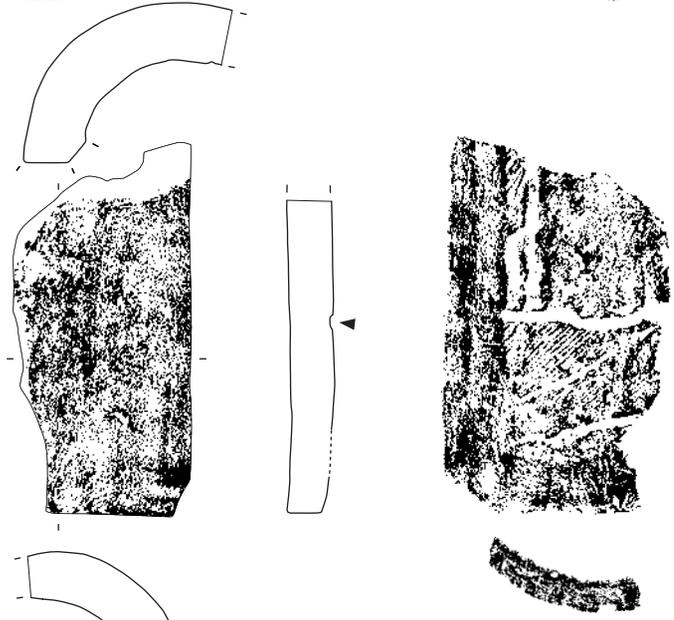
第22图 V群丸瓦(2)



117



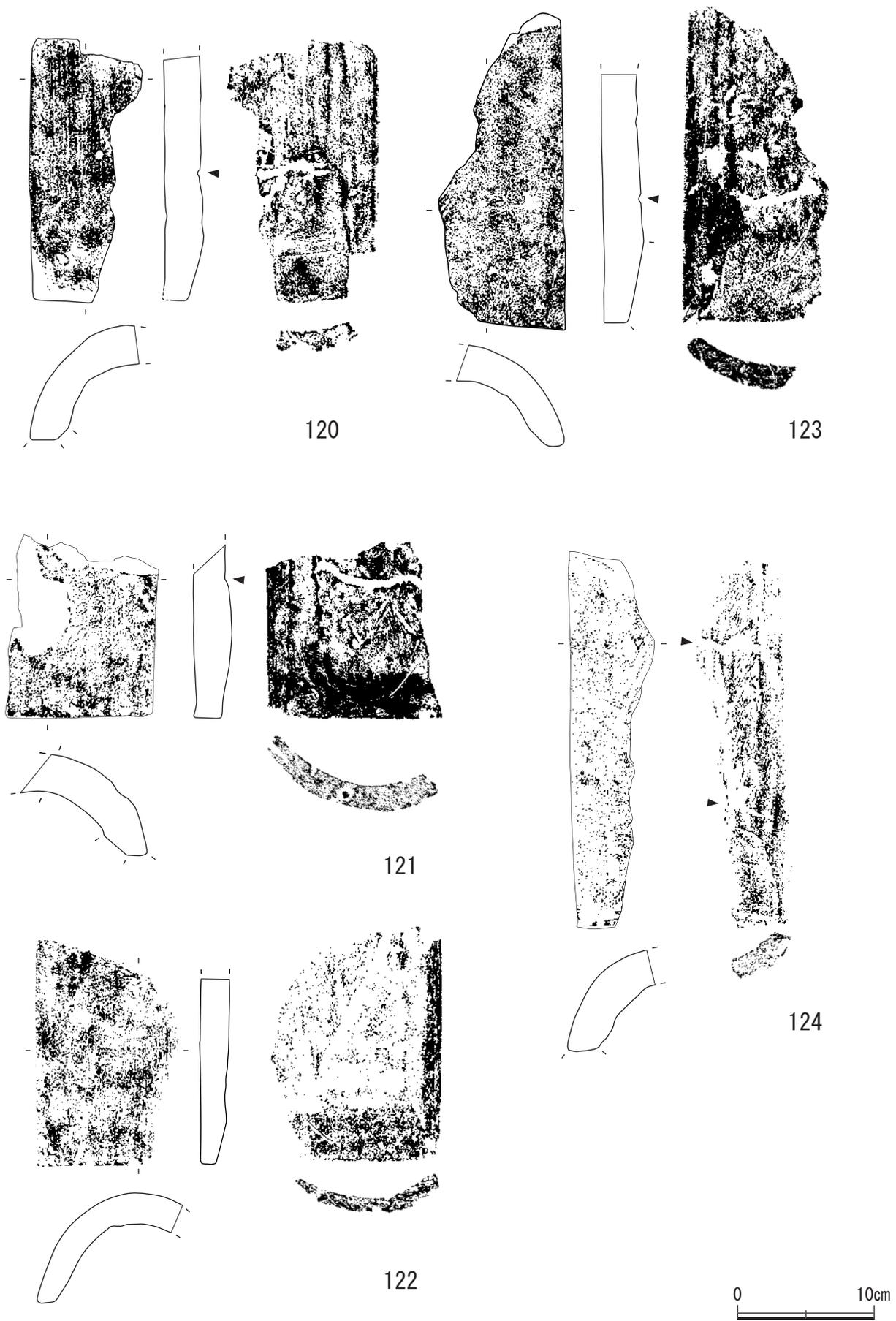
118



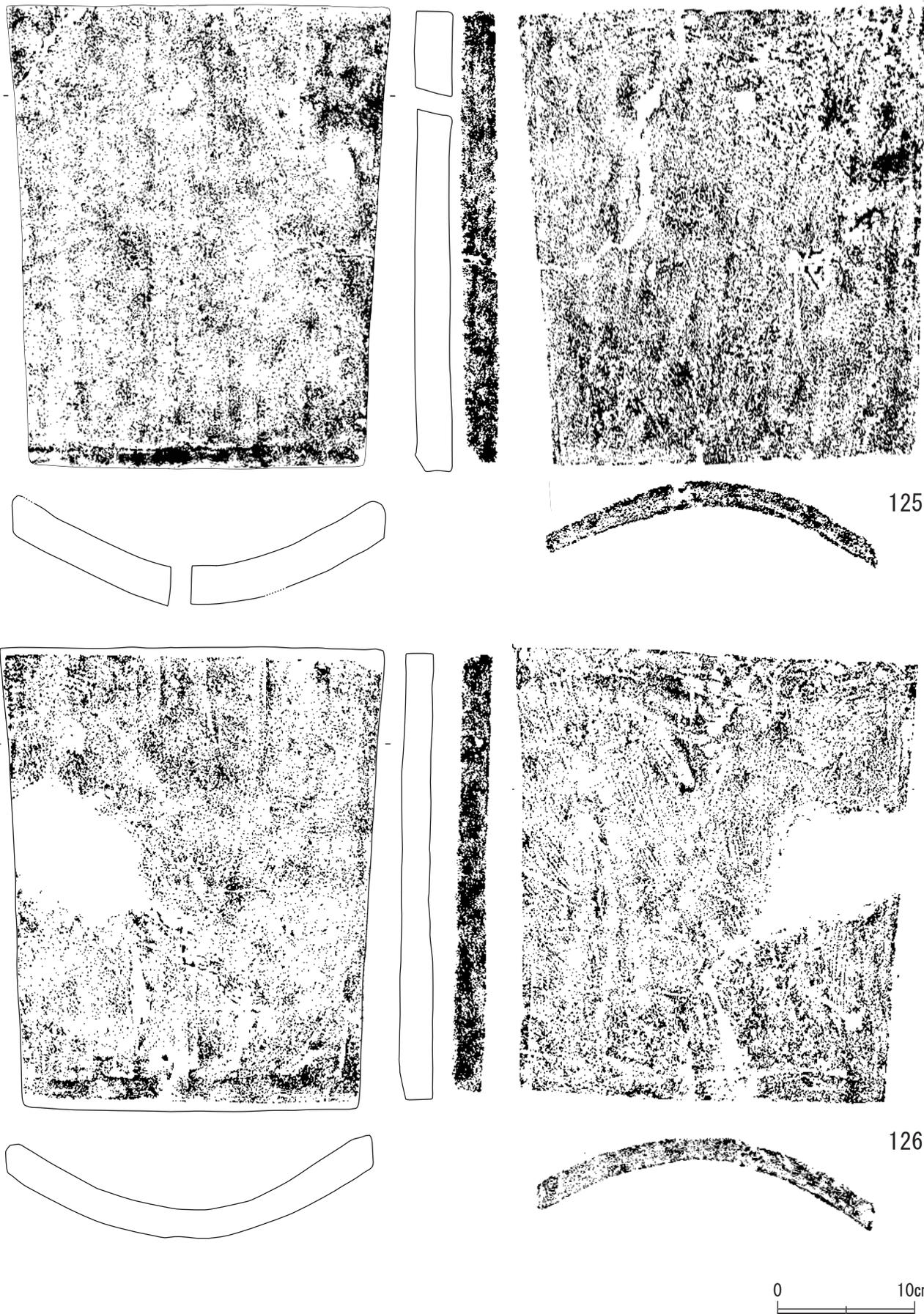
119



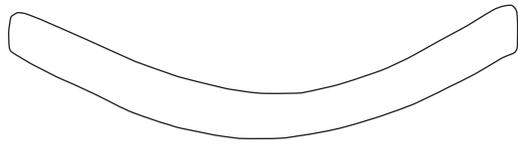
第23图 V群丸瓦 (3)



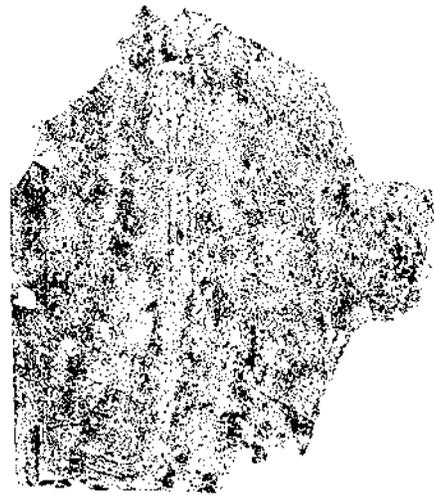
第24図 V群丸瓦(4)



第25図 V群平瓦（1）



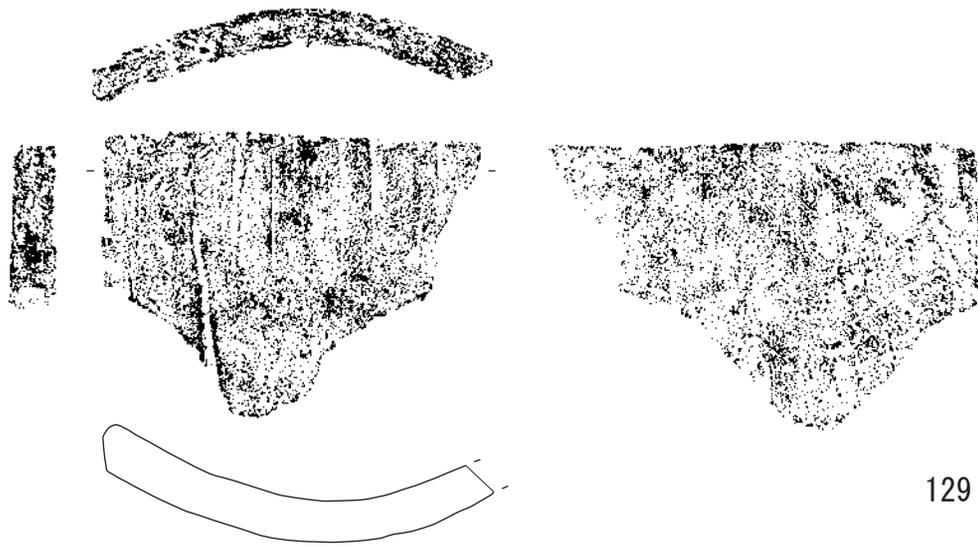
127



128



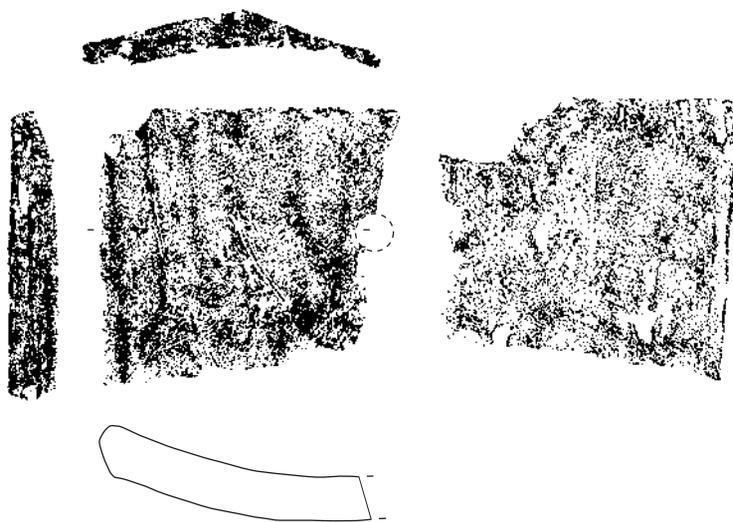
第26図 V群平瓦(2)



129



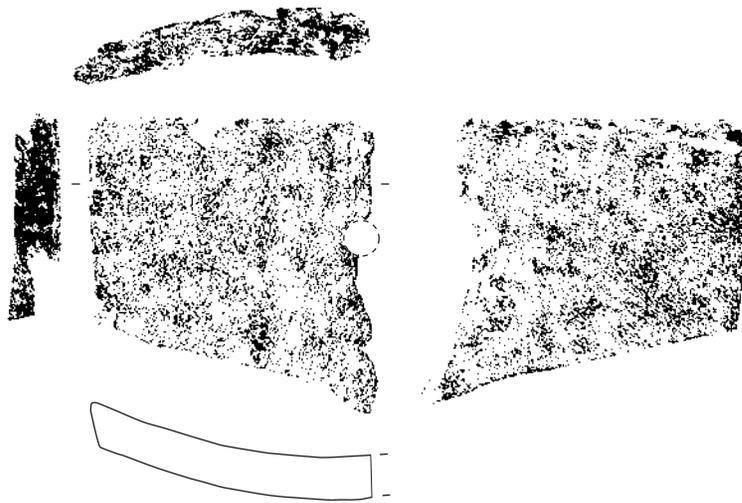
130



131



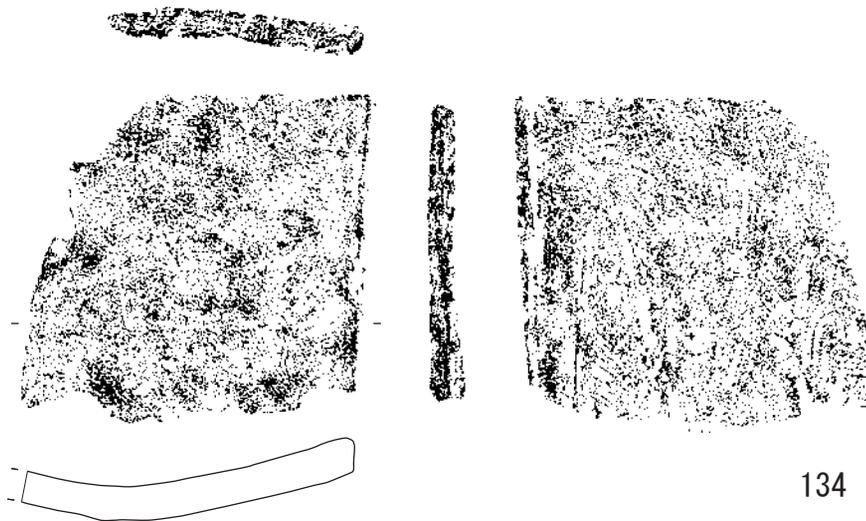
第27图 V群平瓦 (3)



132



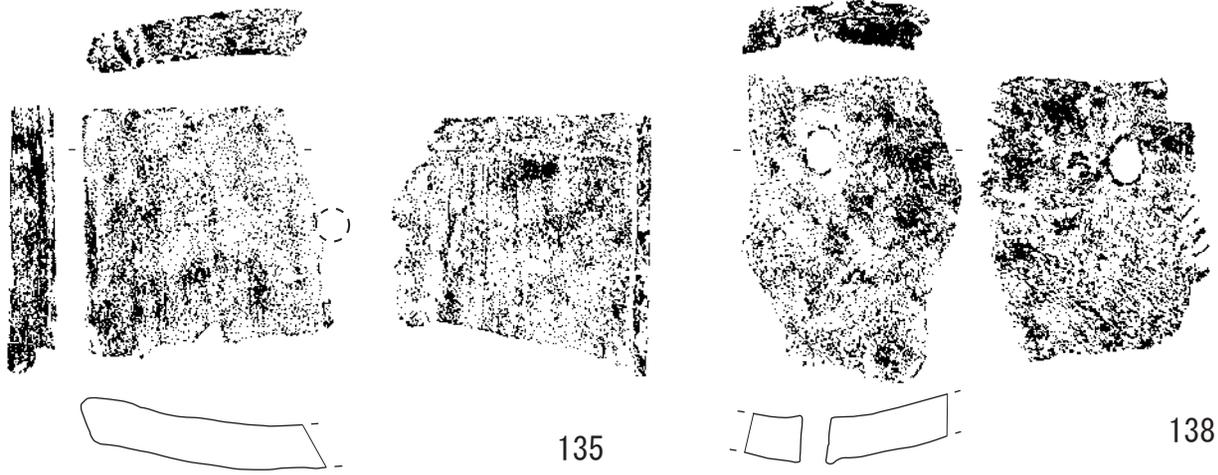
133



134

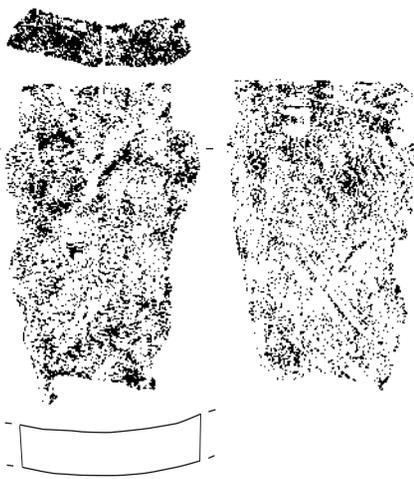


第28図 IV群平瓦 (4)

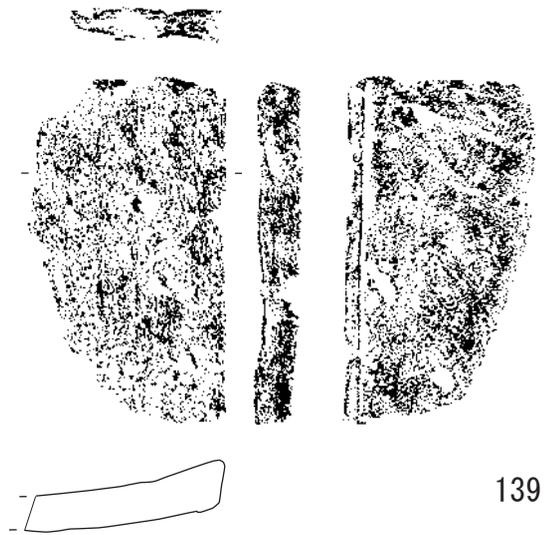


135

138



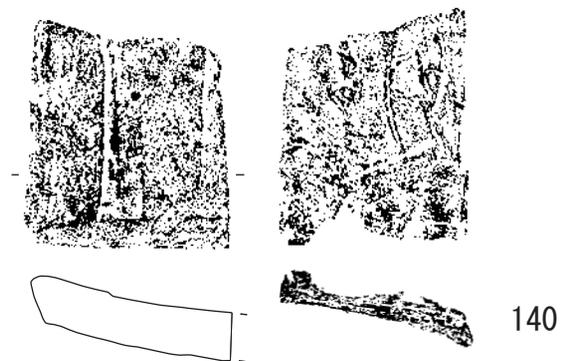
136



139



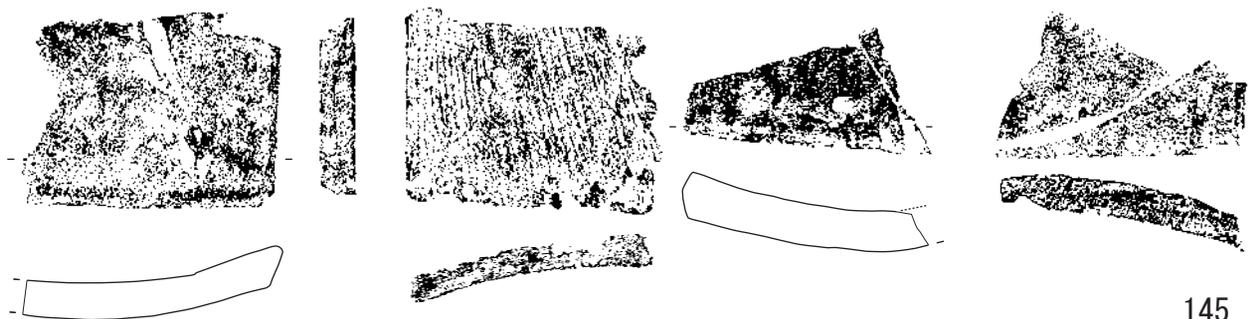
137



140

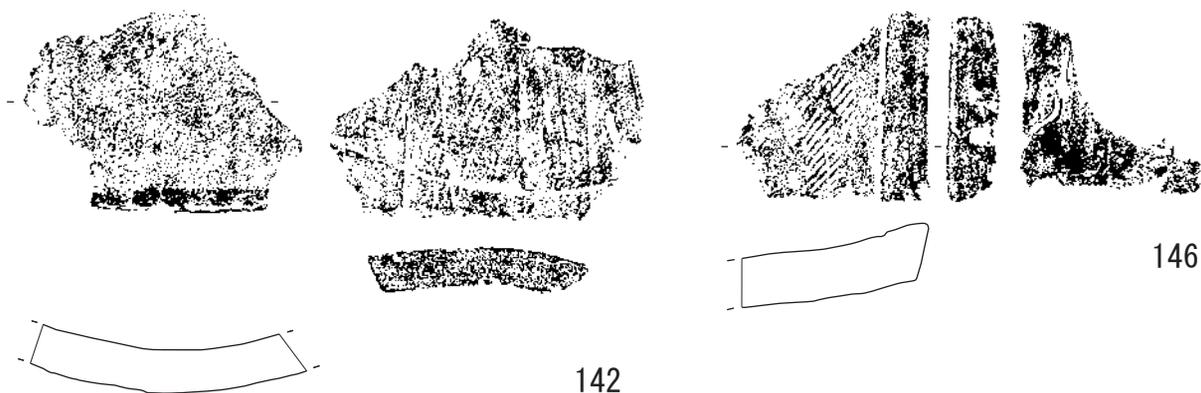


第29図 V群平瓦 (5)



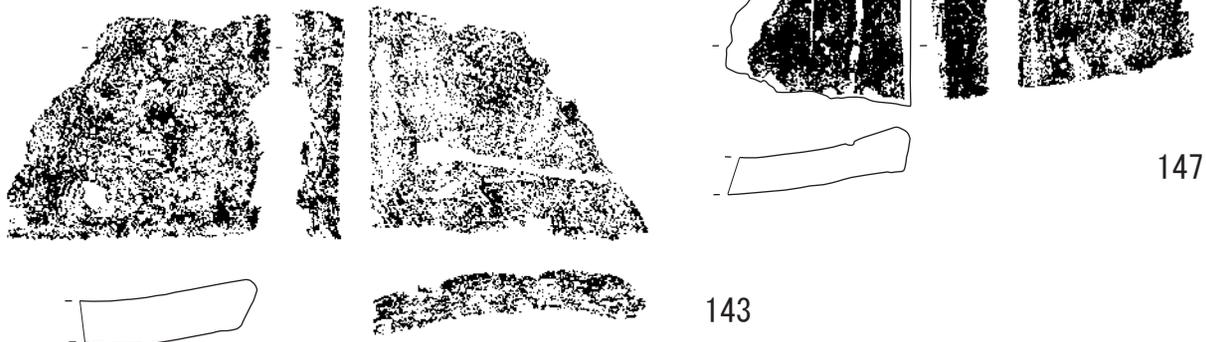
141

145



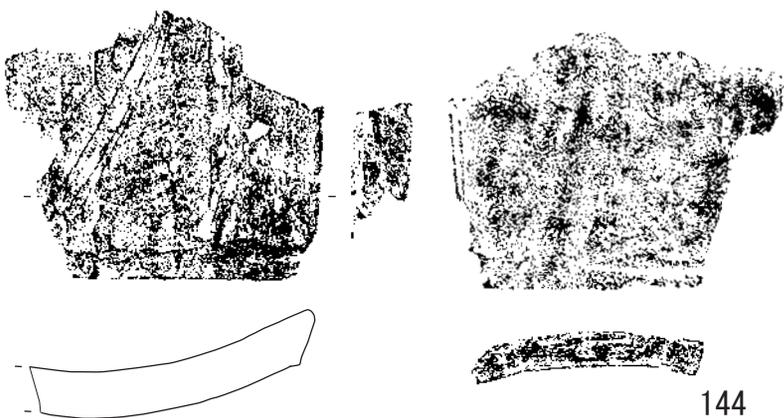
142

146



143

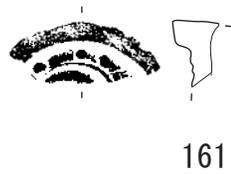
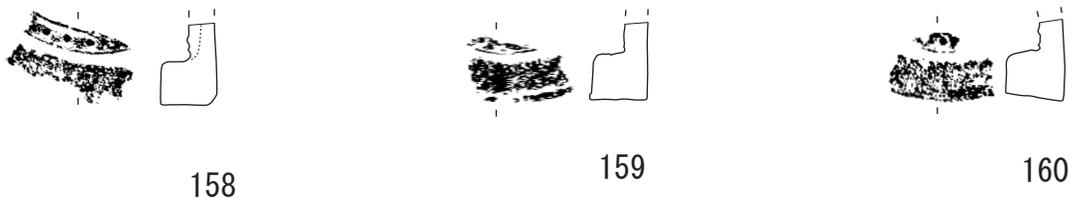
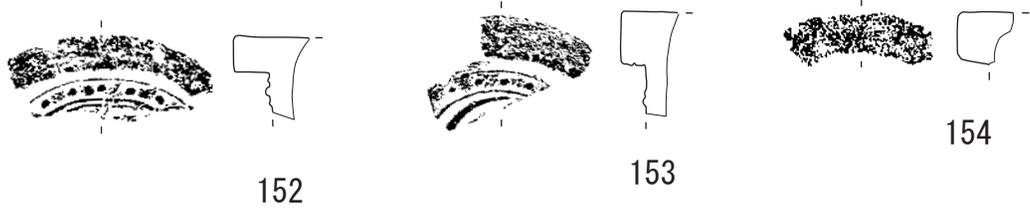
147



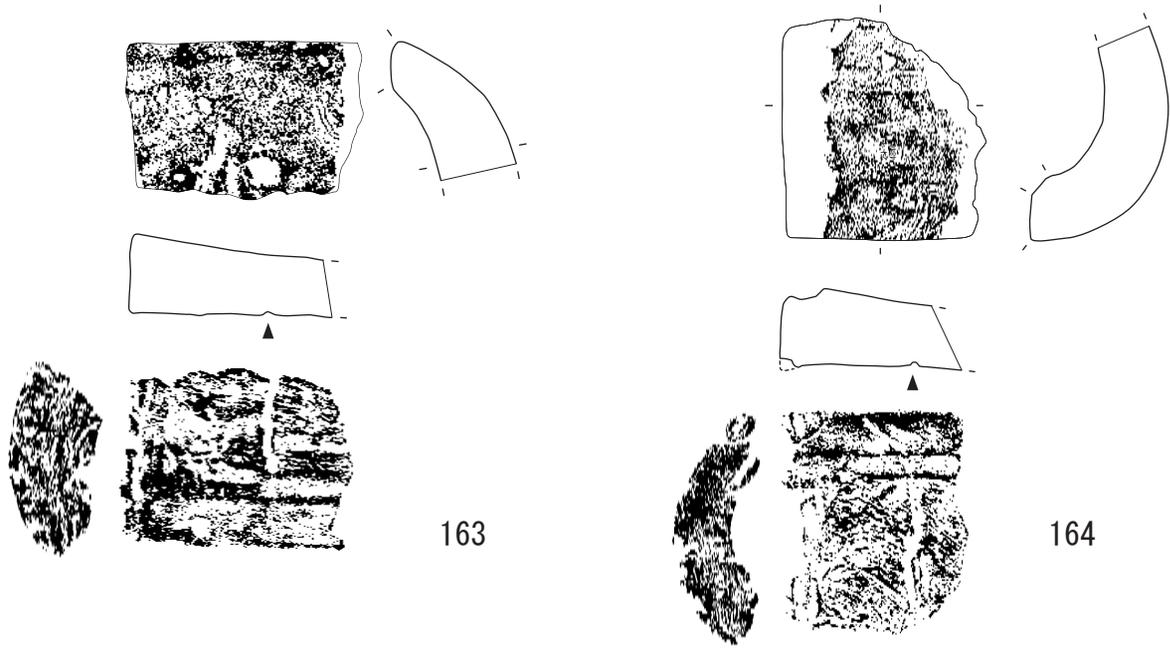
144



第30图 V群平瓦(6)



第31图 Ⅲ~Ⅵ群軒丸瓦



163

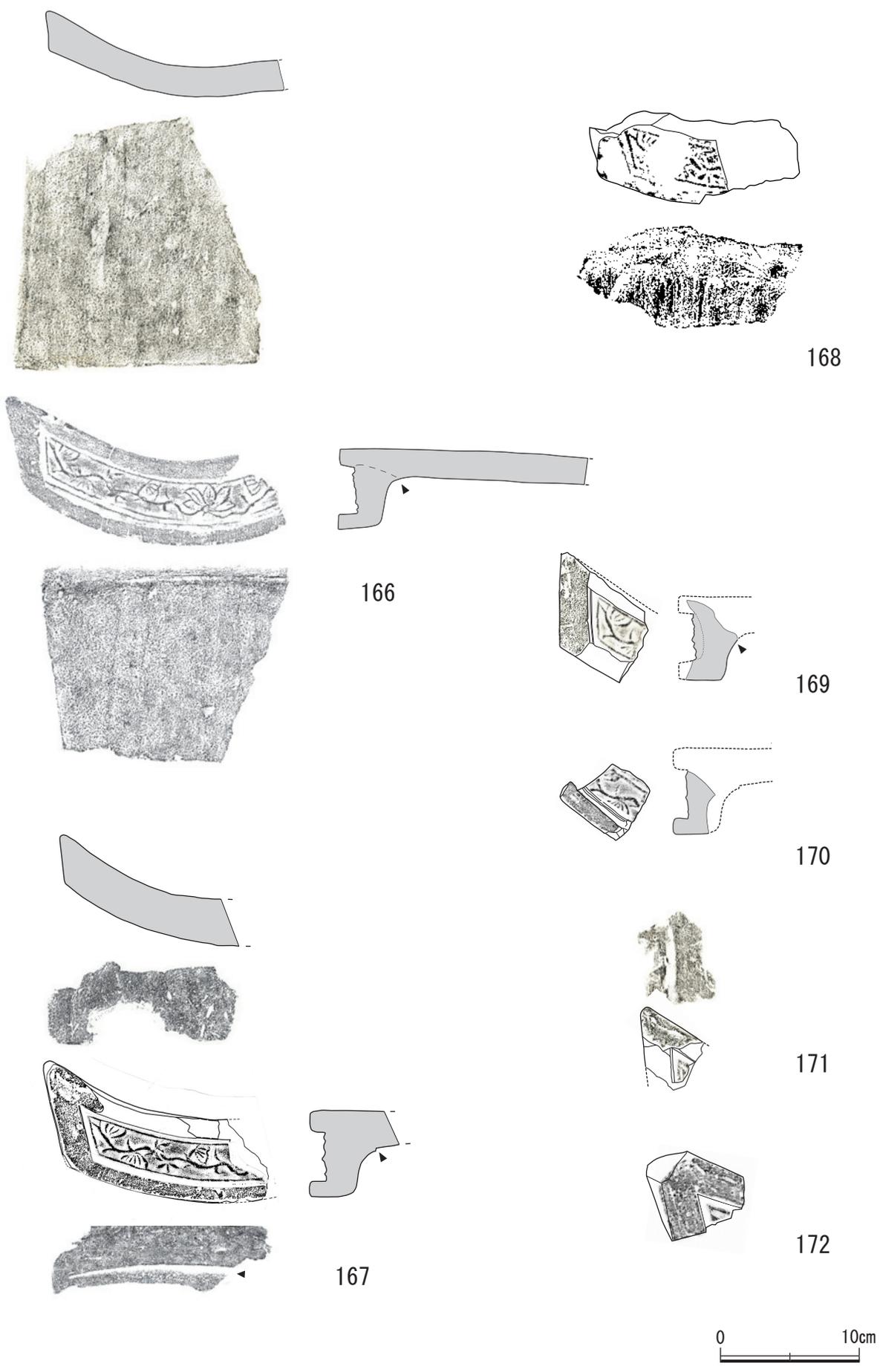
164



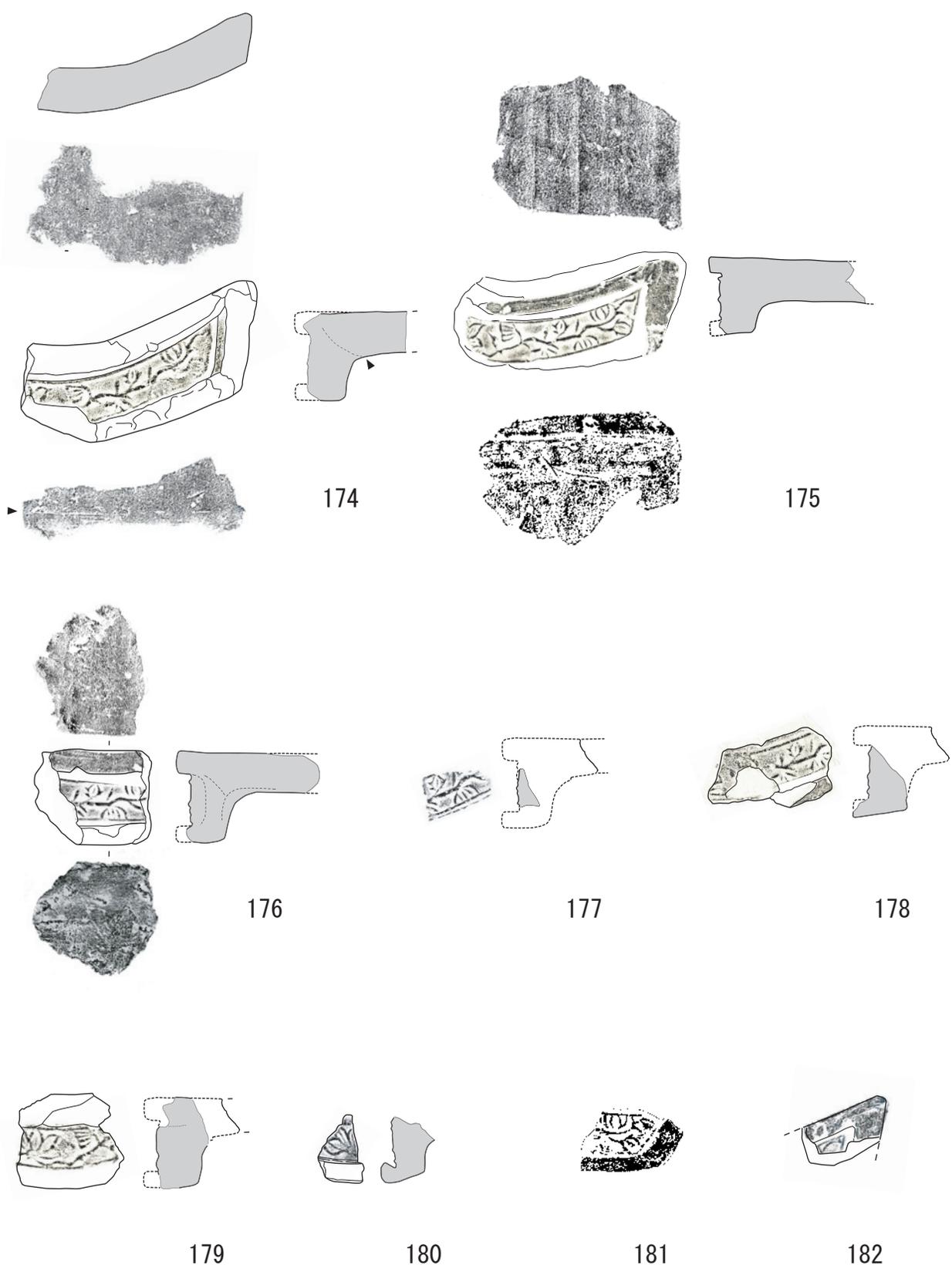
165



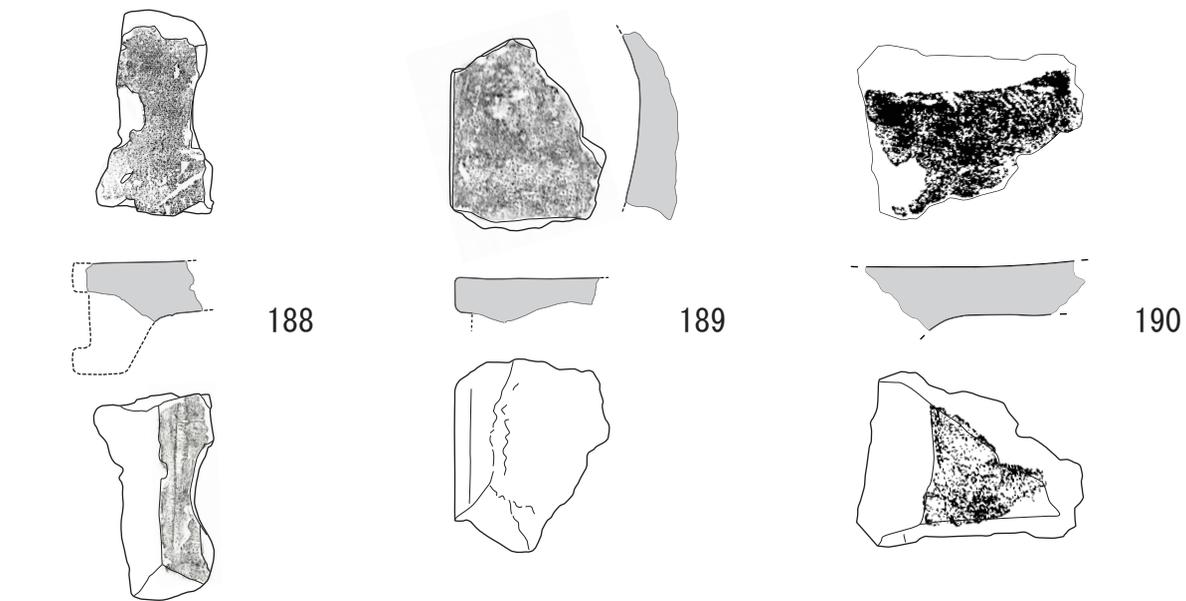
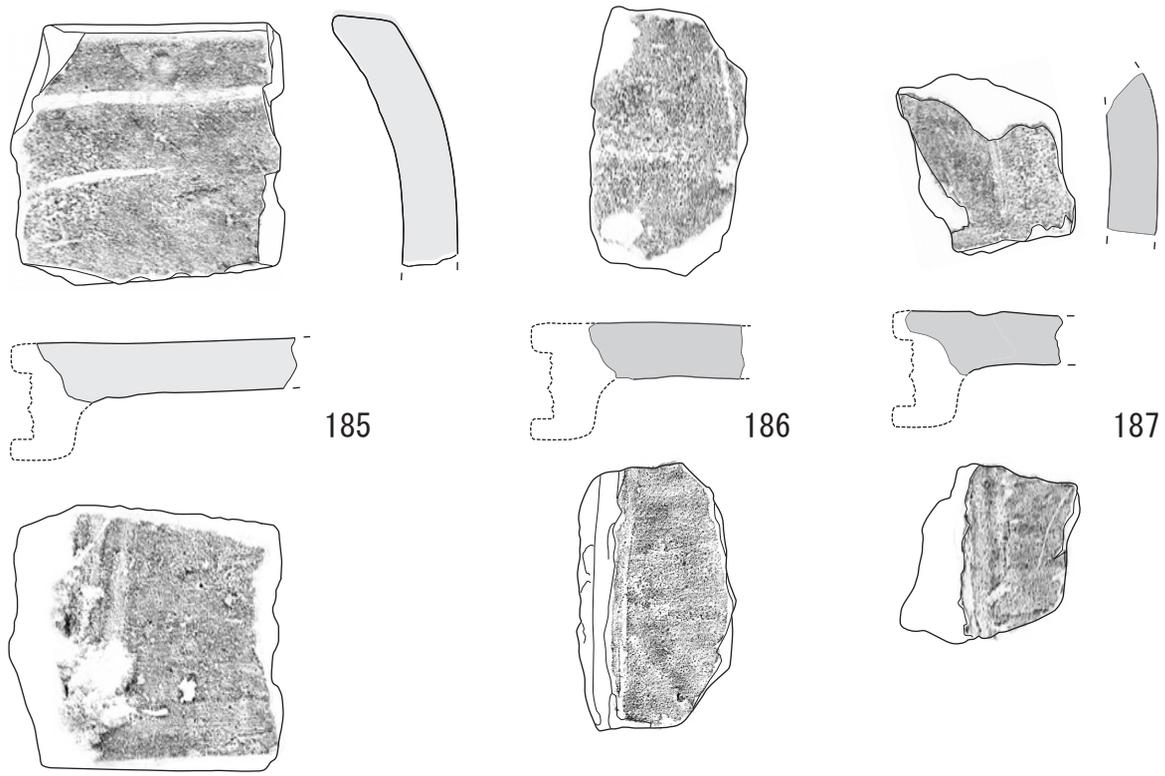
第32図 Ⅲ～Ⅴ群軒丸瓦



第33図 III～V群軒平瓦（1）

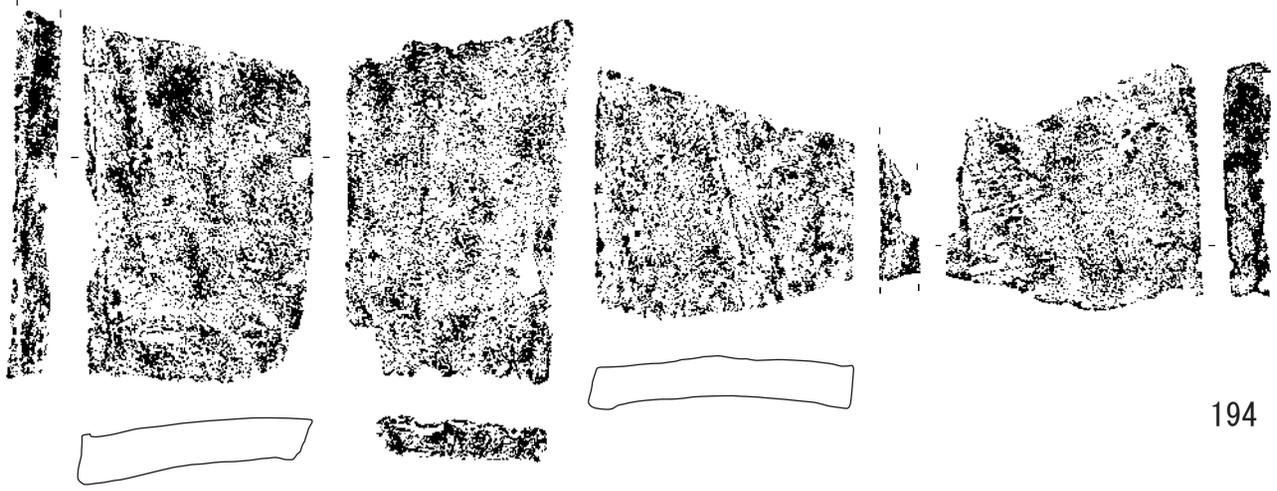


第34図 III～V群軒平瓦 (2)



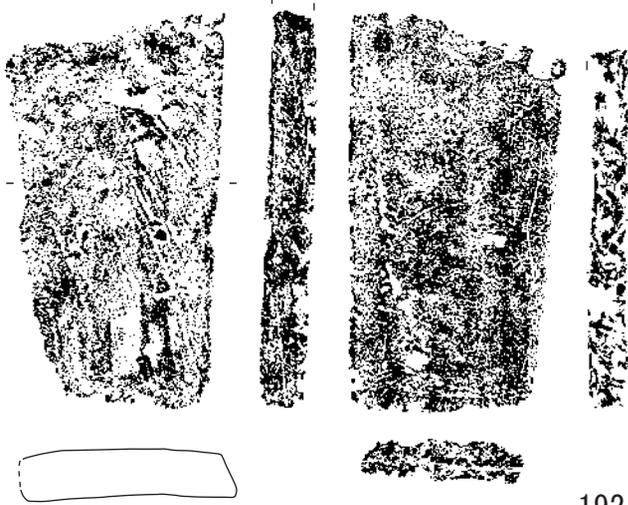
0 10cm

第35図 Ⅲ～Ⅴ群軒平瓦(3)



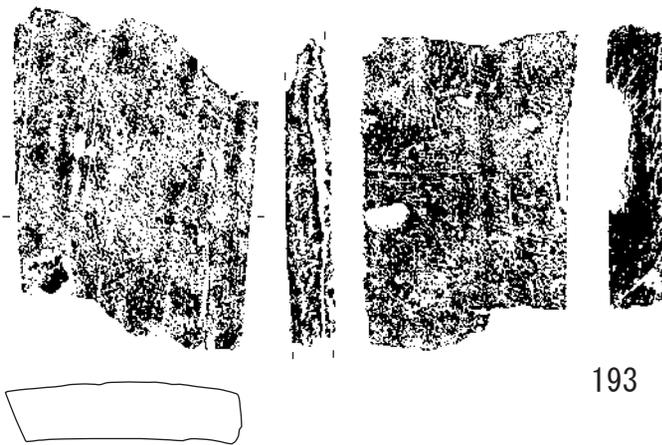
191

194



192

195

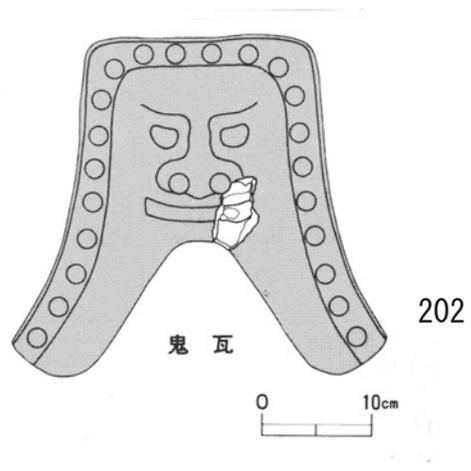
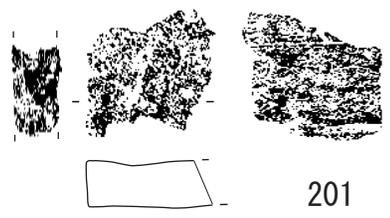
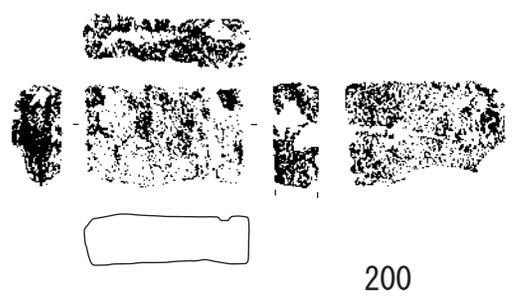
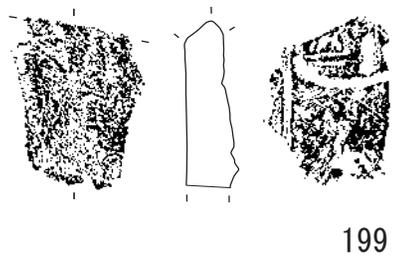
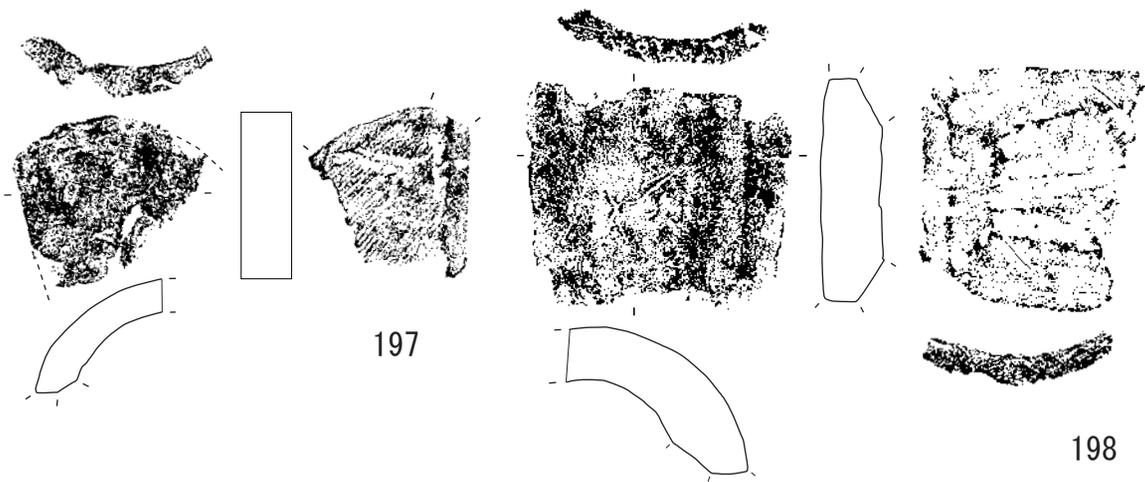


193

196



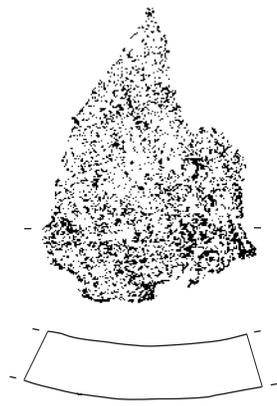
第36図 道具瓦(1)



*日野市遺跡調査会編（1993）より転載



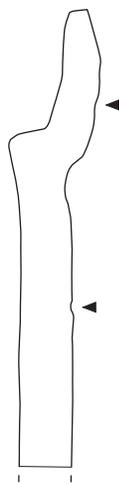
第37図 道具瓦（2）



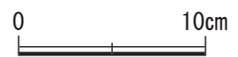
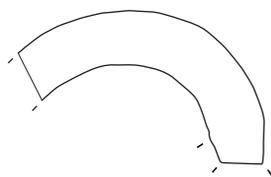
204



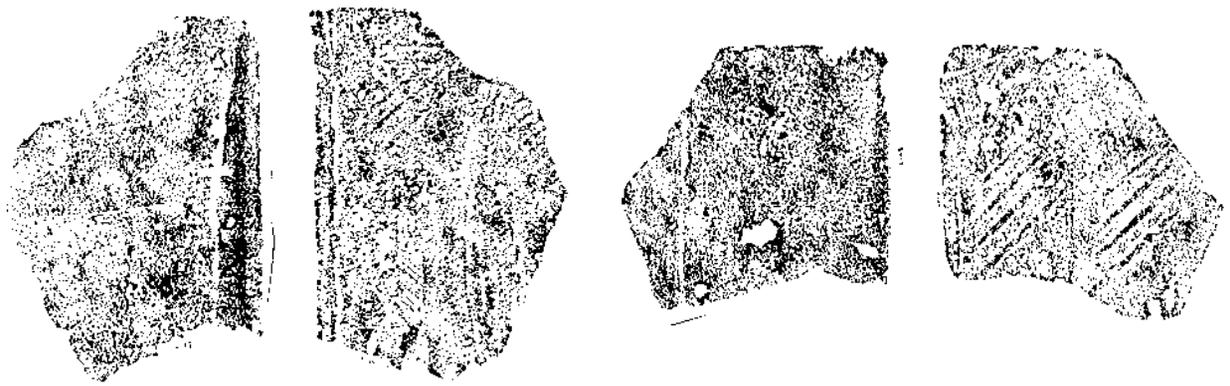
205



206



第38图 道具瓦 (3)



207

208



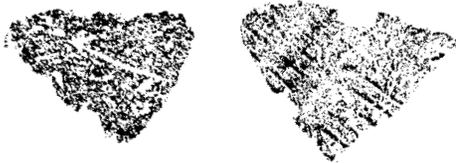
209



210



211



213



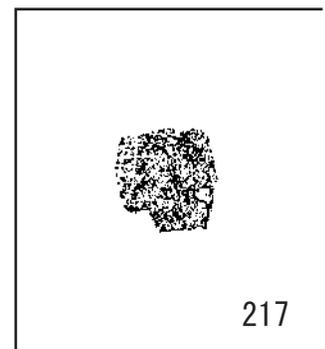
214



215



216

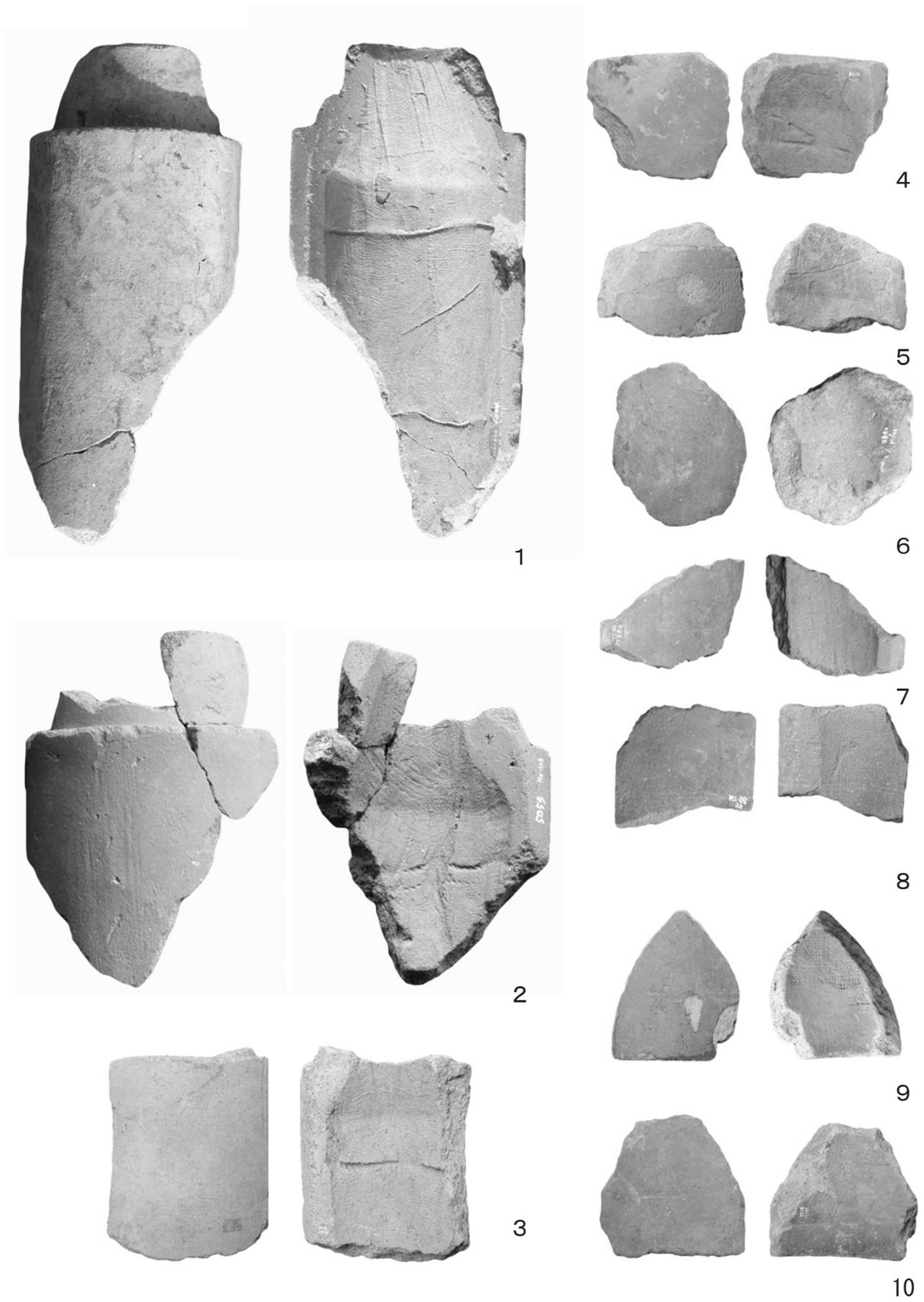


217

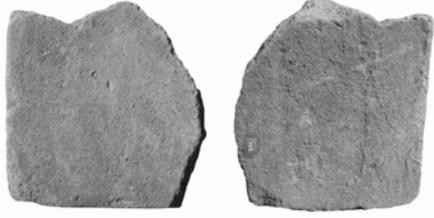


第39図 Ⅲ～Ⅴ群タタキ目痕と刻線

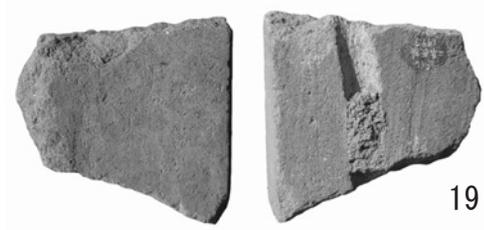
图版 1 I 群丸瓦



图版2 I 群平瓦



11



19



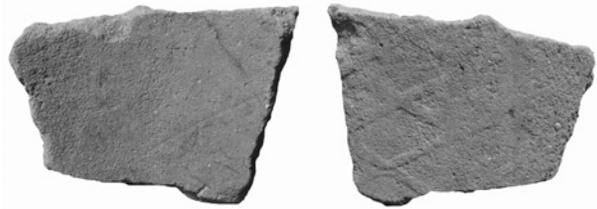
12



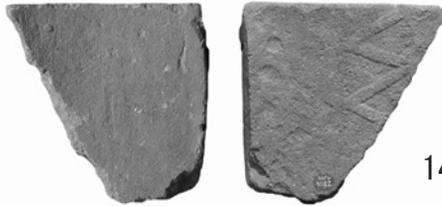
20



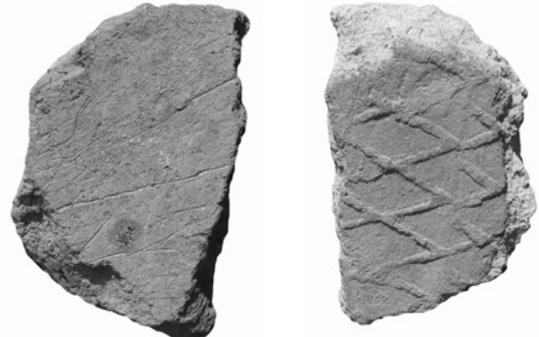
13



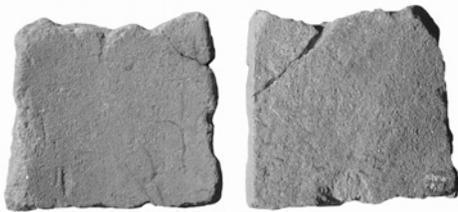
21



14



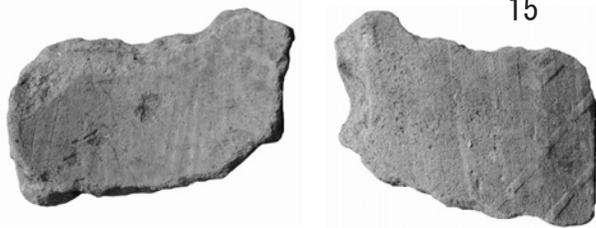
22



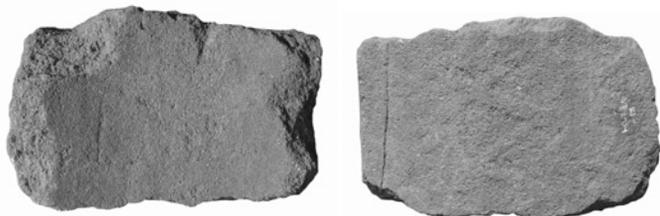
15



23



17



18



24

图版3 II群丸瓦



25

30



26

31



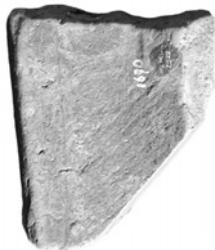
27

32



28

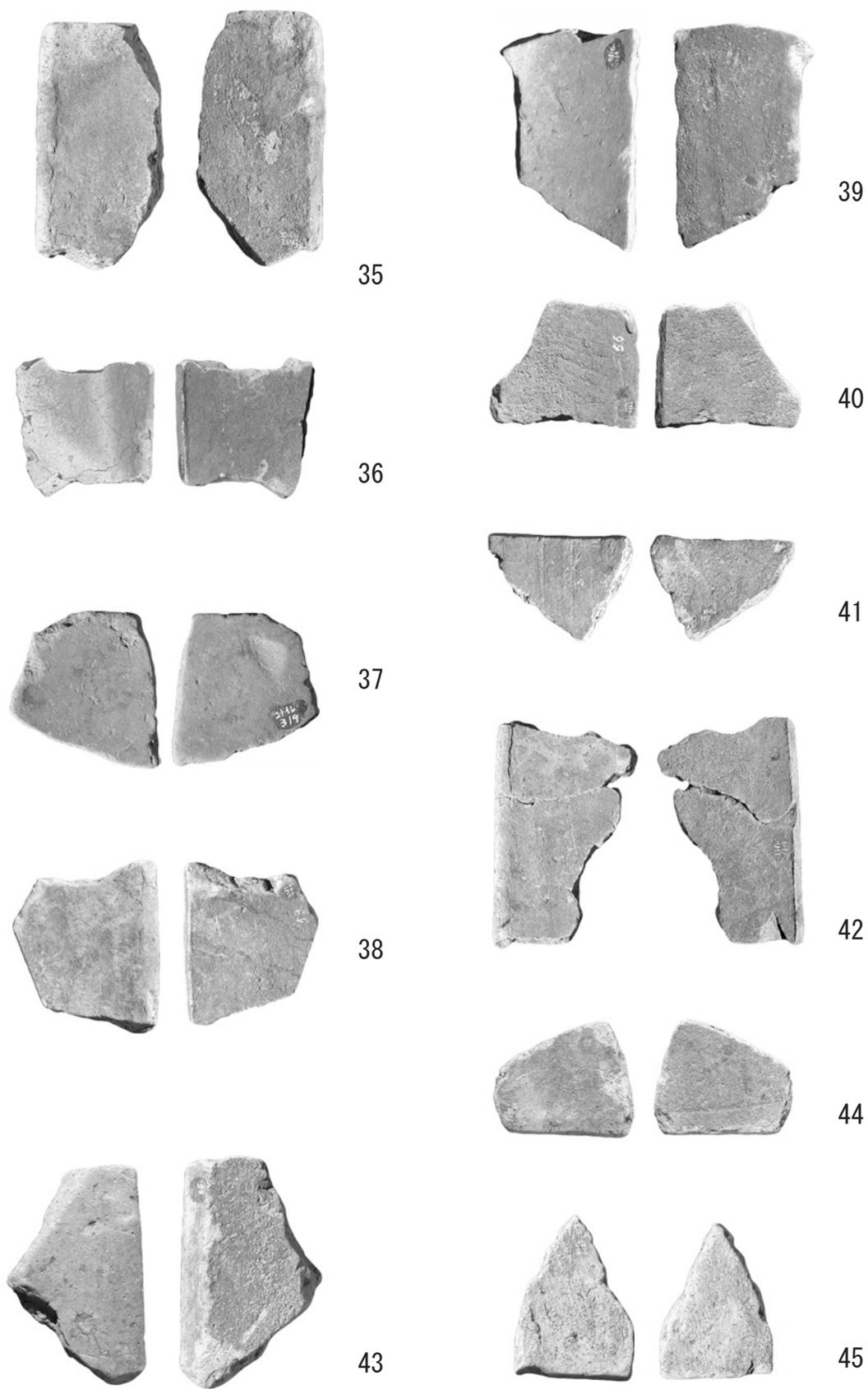
33



29

34

图版 4 II 群平瓦



图版5 II群軒丸・軒平瓦



46



47



48



49



50



51



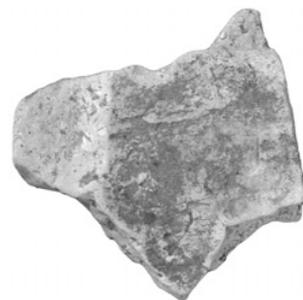
52



53



54



55

图版6 Ⅲ群丸瓦



56



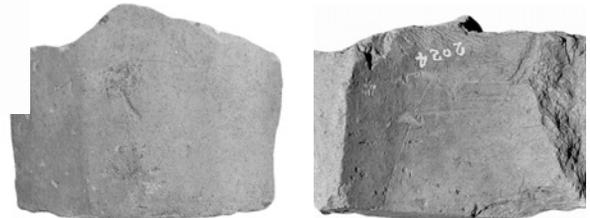
59



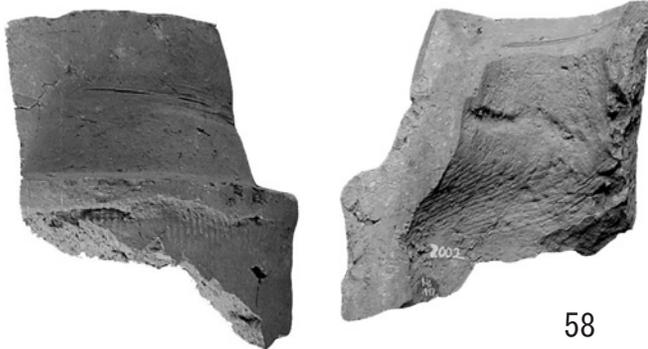
57



60



61



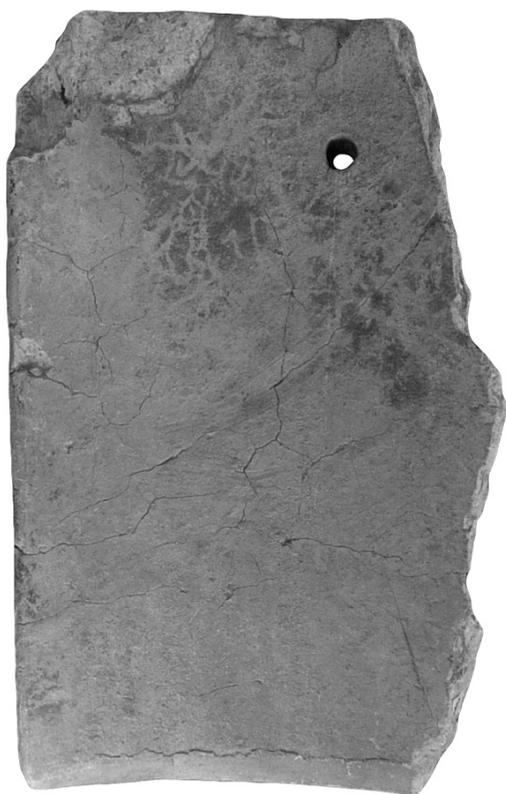
58



62

59

图版7 Ⅲ群平瓦（1）



63



60



64

图版8 Ⅲ群平瓦（2）



65

66



67

70



68

71



69

72

61

图版9 Ⅲ群平瓦 (3)



73



77



74



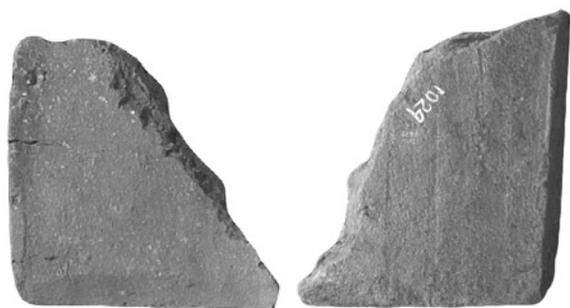
78



75

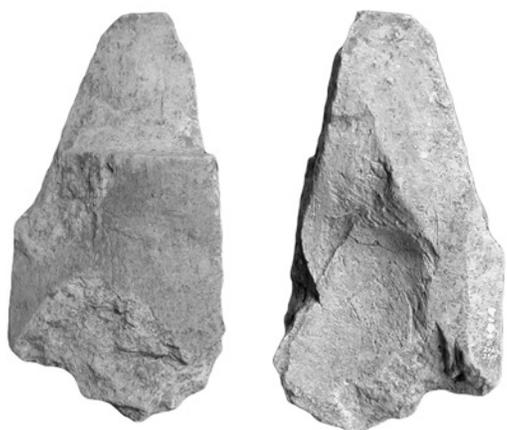


79



76

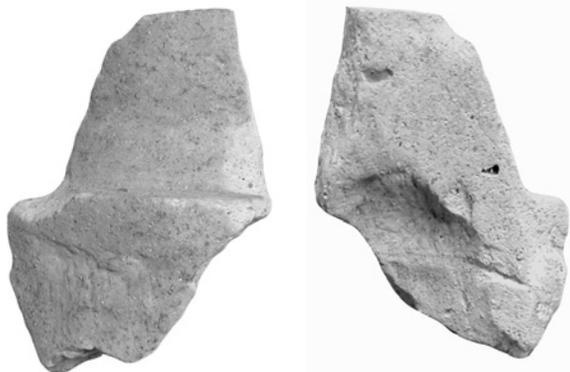
图版10 IV群丸瓦



80



83



81



84



82



85

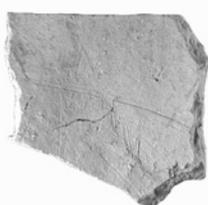
图版11 IV群平瓦(1)



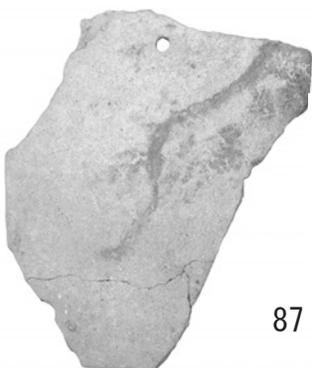
86



91



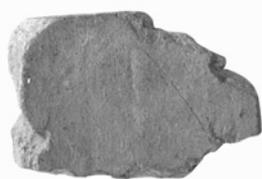
92



87



93



89



94

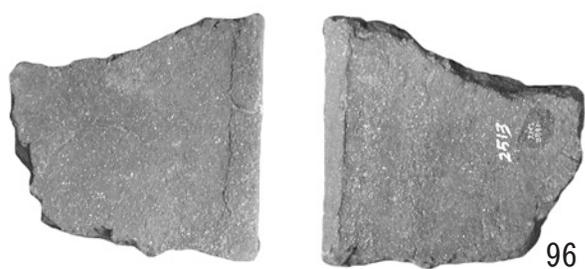


90



95

图版12 IV群平瓦(2)



96



100



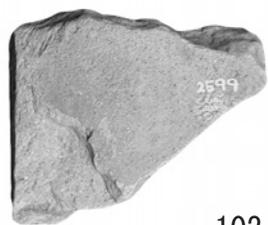
97



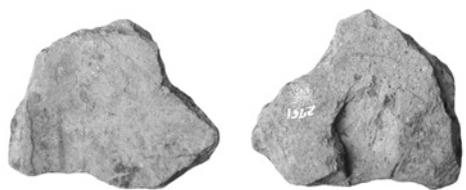
101



98



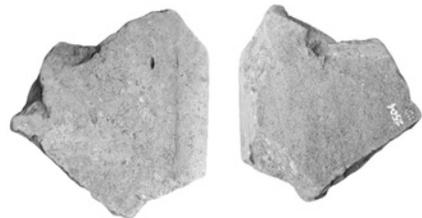
102



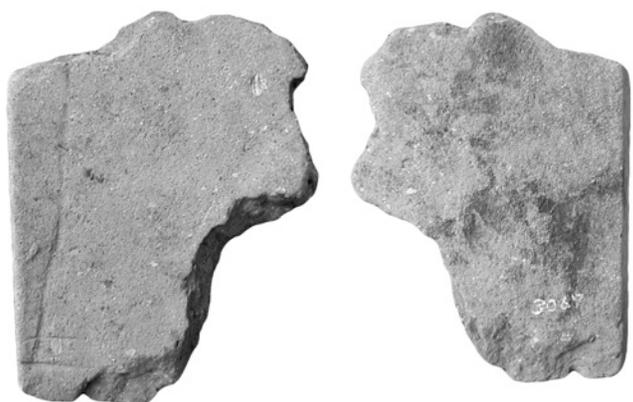
99



103



104



105



106

图版13 IV群平瓦 (3)



107



109



108



110



111

图版14 V群丸瓦（1）



112

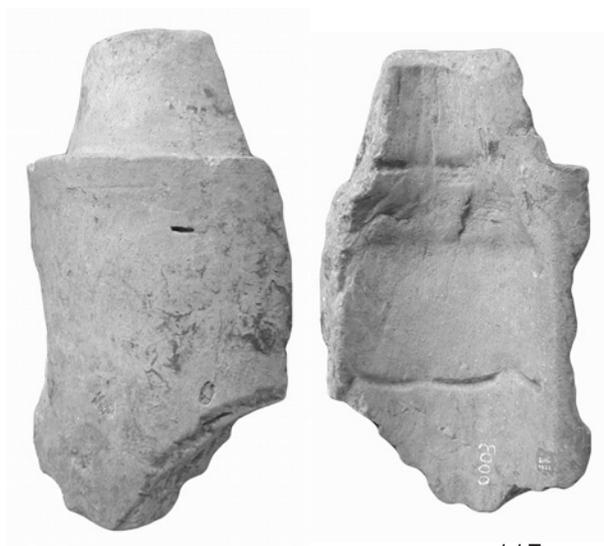


113

图版15 V群丸瓦(2)



114



117



115



118



116



119

图版16 V群丸瓦 (3)



120



123



121



124



122

图版17 V群平瓦（1）



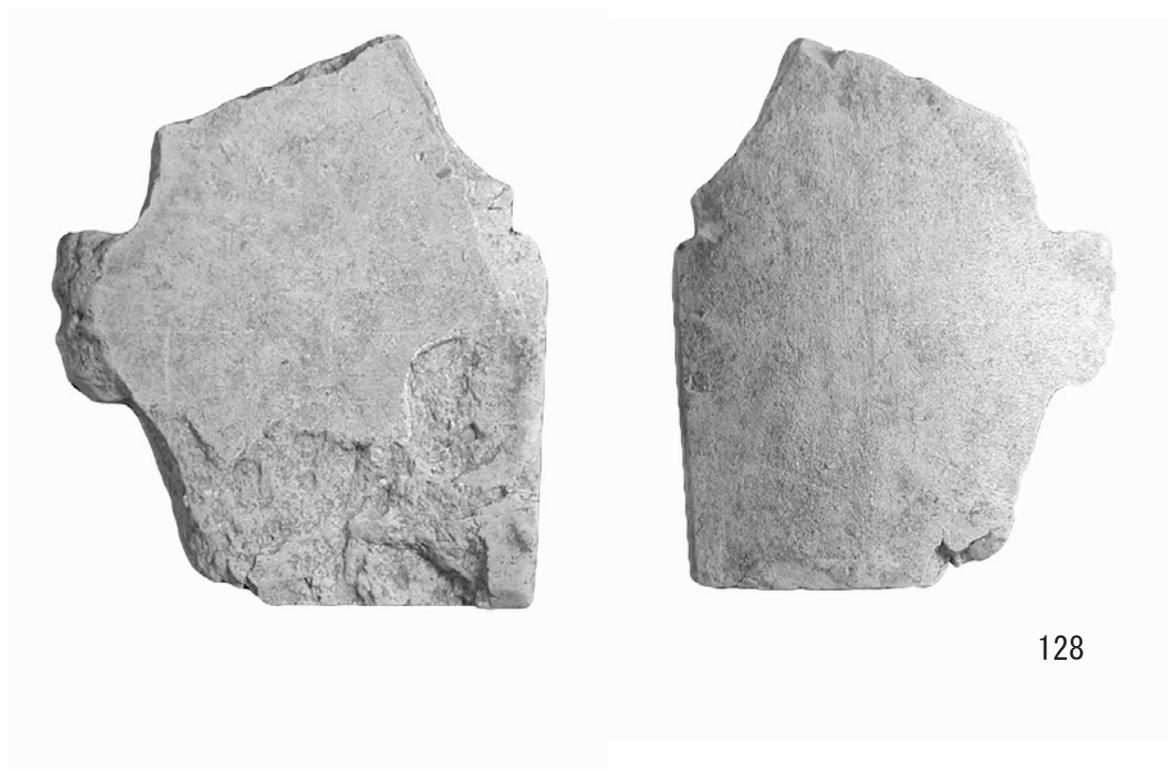
125



126

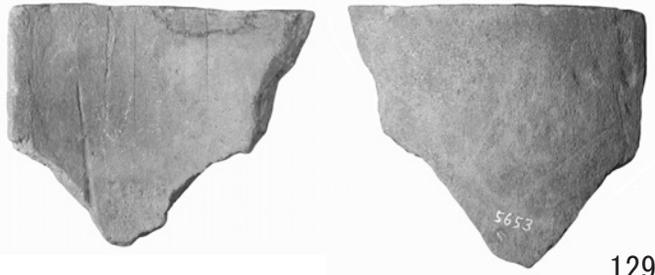


127

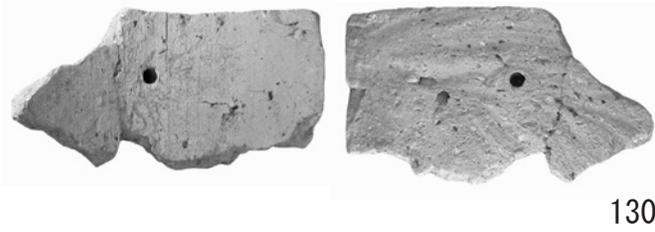


128

图版19 V群平瓦 (3)



129



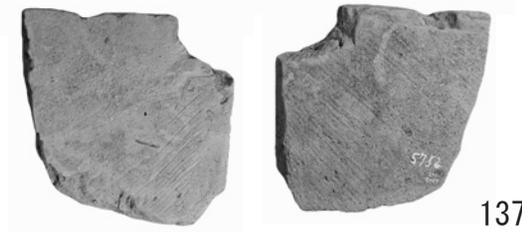
130



135



131



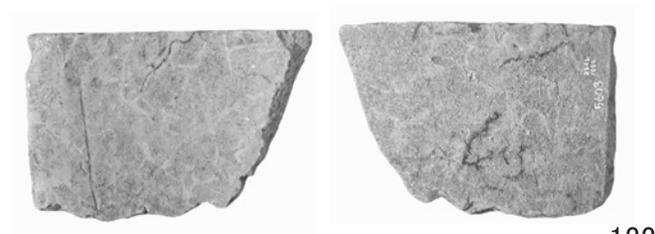
136



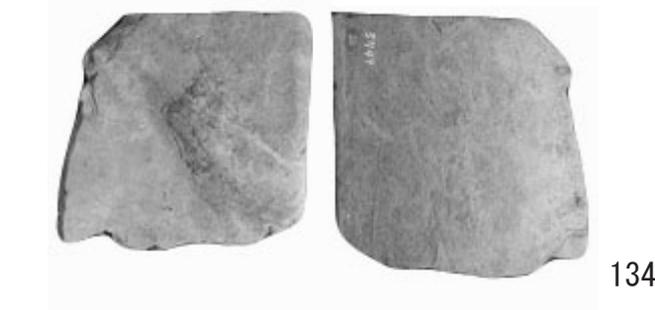
132



137



133



134



138

139

图版20 V群平瓦（4）



140

142

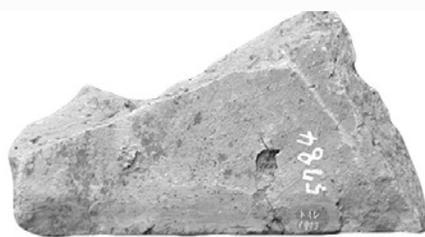


141

143

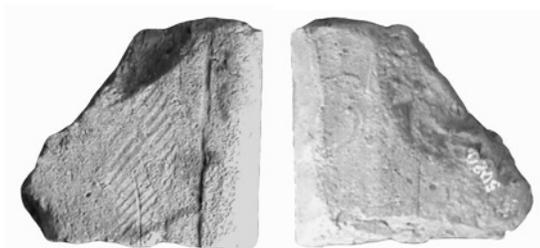


144



5845

145



146



147

图版21 Ⅲ~Ⅵ群丸瓦(1)



148



149



150



151



152



153



154



155



156



157



158



159



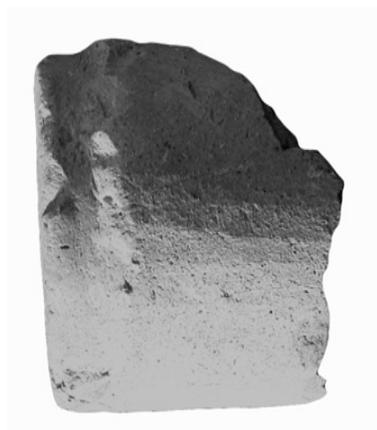
160



161



162



164



165



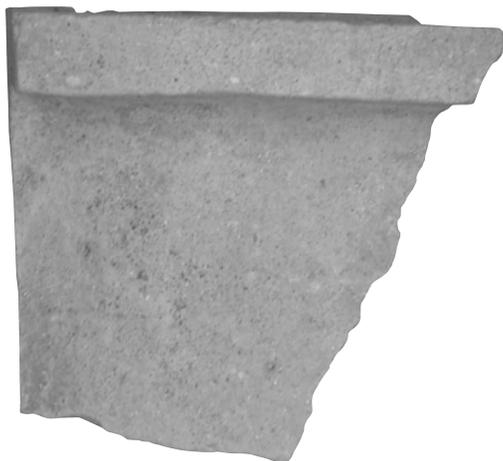
图版23 Ⅲ~Ⅴ群軒平瓦(1)



166



167



168



169



170



171



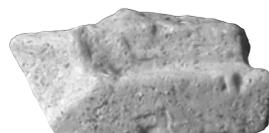
172



173



76



图版24 Ⅲ~Ⅴ群軒平瓦(2)



174



176



175



177



178



179



180



181



182



183



184

図版25 Ⅲ～Ⅴ群軒平瓦（3）



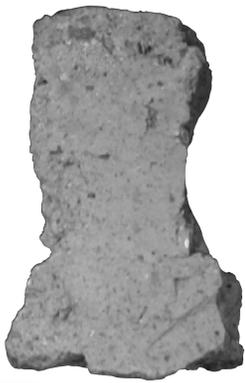
185



186



187



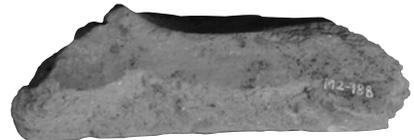
188



189



190



图版26 Ⅲ~Ⅴ群道具瓦(1)



195



191



196



197



193



198

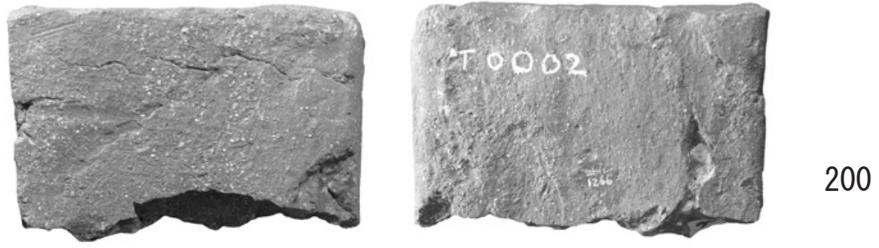


194

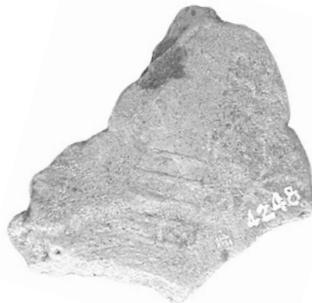
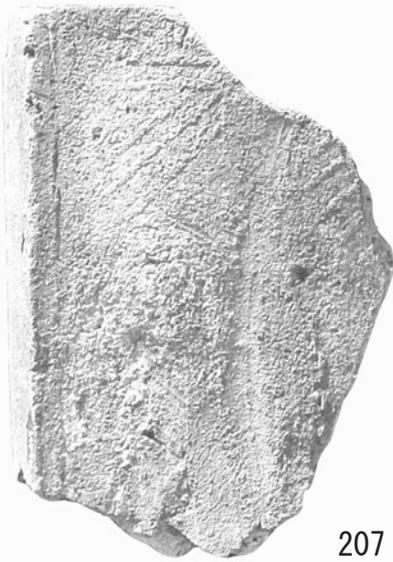


199

图版27 Ⅲ~Ⅴ群道具瓦(2)



図版28 Ⅲ～Ⅴ群タタキ目痕と刻線



図版 29 写真集成 1 (1~11)

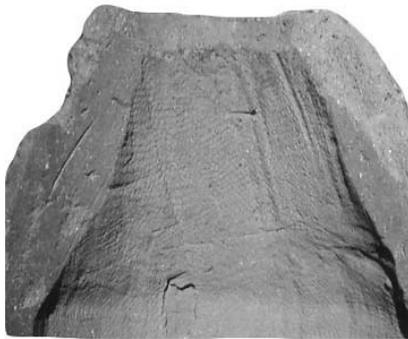


写真1 No.1 I群丸瓦玉縁部凹面(吊紐痕無し)



写真2 No.1 I群丸瓦凹面筒部上段吊紐痕



写真3 No.1 I群丸瓦凹面筒部下段吊紐痕



写真4 No.1 I群丸瓦凸面
縄タタキ痕、凸面は丁寧にナデ調整されており
めだたない。



写真5 No.11 I群平瓦凸面
斜め格子文のタタキ目痕(幅が一定で浅く浮き出
た面が平ら)。



写真6 No.22 I群平瓦凸面
斜め格子文のタタキ目痕(幅一定せず深くて、浮
き出た面が平坦でない)

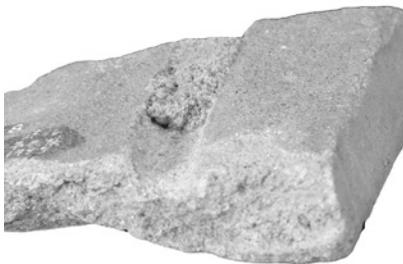


写真7 No.19 I群平瓦凸面
側辺に平行に穿たれた溝と充填された粘土。

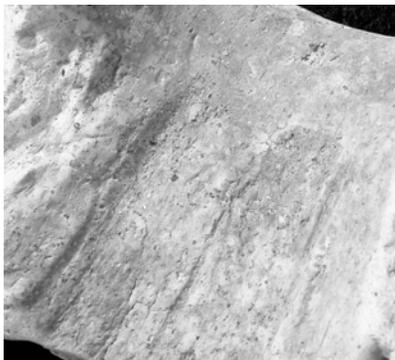


写真8 No.25 II群丸瓦玉縁部凹面
特徴的な鬚状の窪みが巡り、吊紐痕がみられない。



写真9 II群丸瓦玉縁部凸面縄タタキ痕

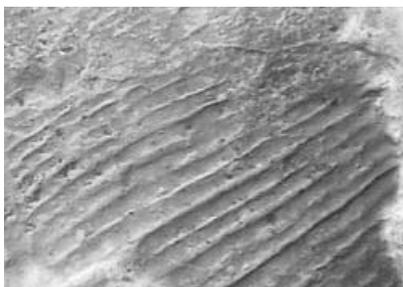


写真10 No.28 II群丸瓦凹面糸きり痕

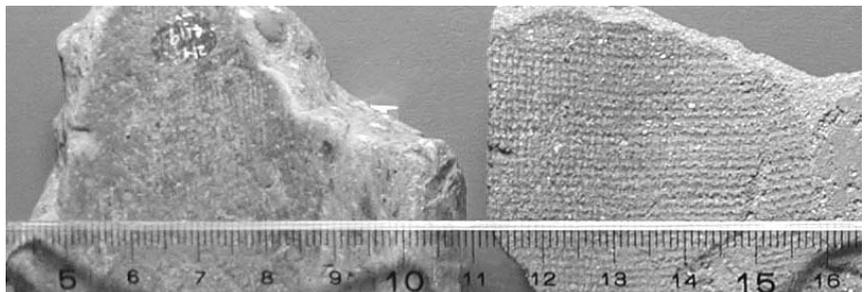


写真11 左II群丸瓦凹面布目痕(細かい) 右I群丸瓦凹面布目痕(粗い)

図版 30 写真集成 2 (12 ~ 23)

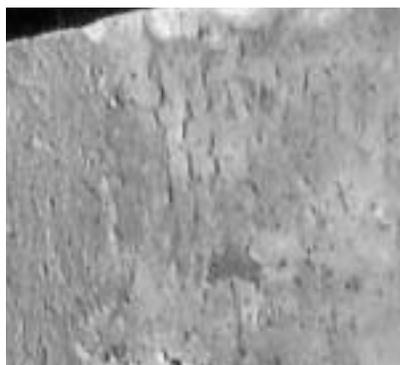


写真 12 II 群凸面縄タキ痕



写真 13 No. 42 II 群平瓦凹面折り返し痕

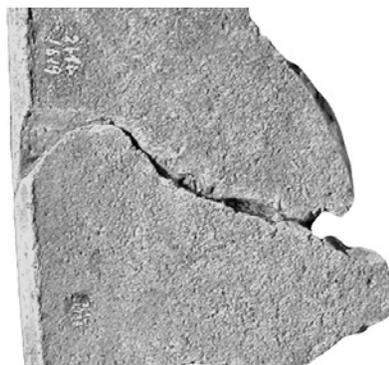


写真 14 No. 42 II 群平瓦凸面はみだし痕



写真 15 No. 46 II 群軒丸瓦凸面範傷



写真 16 No. 47 II 群軒丸瓦凸面範傷



写真 17 No. 49 II 群軒平瓦凸面文様
形状が整わない大きめの連珠文の左脇に、右上の方向に伸びる細長い粘土が張り付いている。上の平坦面は平瓦部から剥落した面。



写真 18 No. 54 II 群軒平瓦凸面顎脱落部分
格子状に刻みが入られ、別粘土で補強される。



写真 19 IV 群丸瓦玉縁部凹面



写真 20 V 群丸瓦凹面筒部上段吊組痕

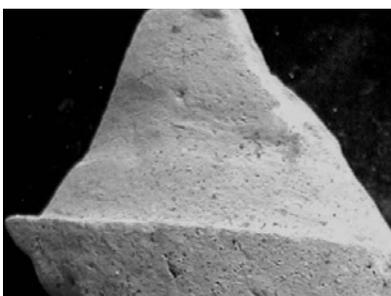


写真 21 V 群丸瓦凸面玉縁部 指押さえ痕

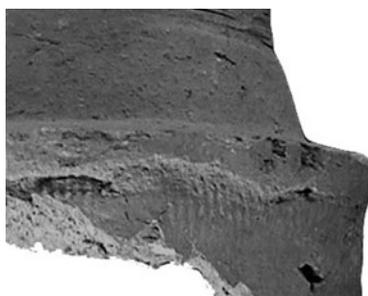


写真 22 No. 58 III 群丸瓦凸面 縄タキ痕



写真 23 No. 135 V 群平瓦凸面 バリ

図版 31 写真集成 3 (24 ~ 35)

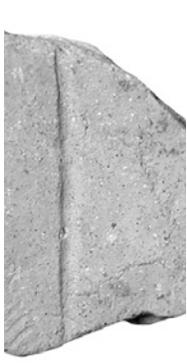


写真 24 No. 102 (IV群) No. 147 (V群)
平瓦凹面 「よれ」部分拡大写真



写真 25 No. 148 V群軒丸瓦 三巴文

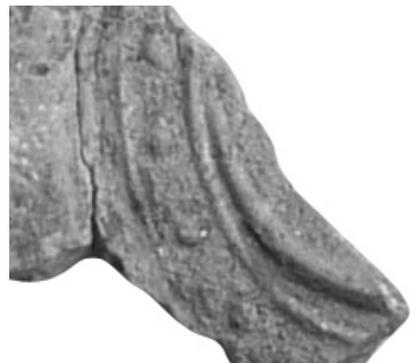


写真 26 No. 153 V群軒丸瓦 珠文・圏線



写真 27 No. 159 V群 軒丸瓦瓦当周縁
部内側に螺旋状の沈線が巡る。



写真 28 No. 155 IV群軒丸瓦瓦当断面



写真 29 No. 186 V群軒丸瓦 切断面に
塗られた粘土



写真 30 No. 167 V群軒平瓦凸面の凹型台痕



写真 31 満開の蓮花 (上方から)

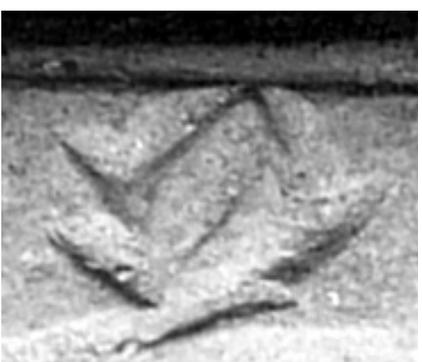


写真 32 蓮花の蕾



写真 33 咲きかけの蓮花



写真 34 満開の蓮花 (横から)



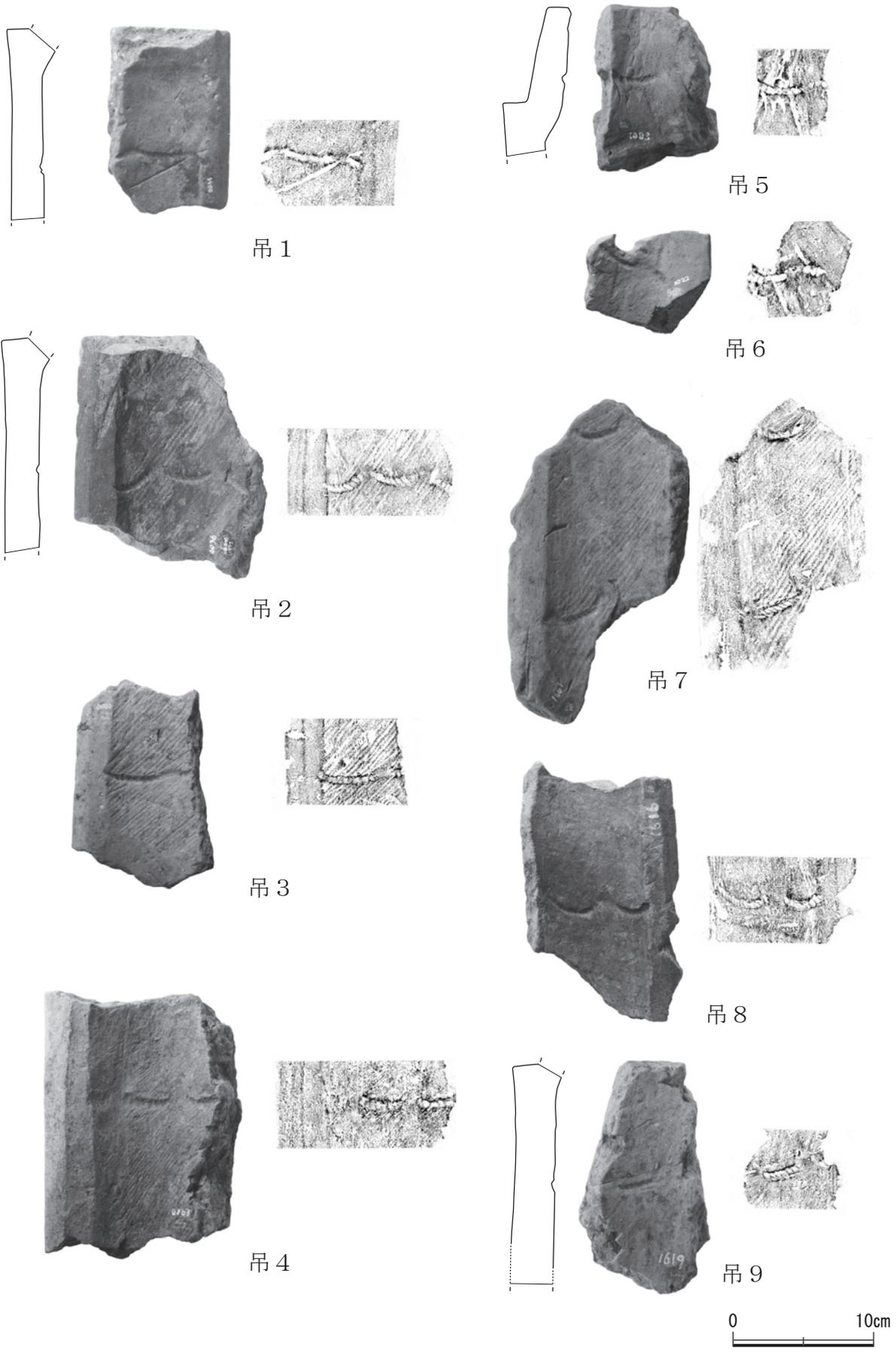
写真 35 横からみたハチス

No.	群	部位	布目部分 (mm)	紐部分 (mm)	比率 (紐 / 布目)
第6図1-1	I	2	20	27	1.4
第6図1-2	I	2	25	35	1.4
第6図1-3	I	3	21 >	39	> 1.9
第6図2	I	2	11	19	1.7
第11図57	III	1	17	17	1.0
第11図59	III	2	13	28	2.2
第11図60	III	2	20	33	1.65 >
第38図 206-1	III	1	12	24	2
第38図 206-2	III	1	15	24	1.6
第38図 206-3	III	2	11	34	3.1
第40図吊1	IV	2	13	34	2.6
第40図吊2	IV	2	9	36	4
第40図吊3	IV	3	14	> 40	> 2.9
第40図吊4	IV	2	11	33	3
第40図吊5	IV	1	15	> 30	> 2.0
第40図吊6	IV	1	14	> 28	> 2.0
第40図吊7	IV	3	14	31	2.2
第40図吊8	IV	2	16	38	2.4
第40図吊9	IV	2	27	25	0.9
第41図吊10	IV	3	31	30	1
第41図吊11	IV	2	13	41	3.2
第41図吊12	IV	2	20	35	1.8
第41図吊13	IV	3	25	39	1.6
第41図吊14	IV	2	12	30	2.5
第41図吊15	IV	2	14	39	2.8
第41図吊16	IV	3	22ないし28	33ないし38	1.2ないし1.7
第41図吊17	V	1	16	22	1.4
第41図吊18	V	2	8	35	4.4
第41図吊19	V	3	15	26	1.7
第42図吊20	V	2	12	34	2.8
第42図吊21	V	2	22	>25	> 1.1
第42図吊22	V	3	17	43	2.5
第42図吊23	V	3	16	43	2.7
第42図吊24	V	2	11	31	2.8
第42図吊25	V	2	>12	42	3.5 >
第42図吊26	V	2	12	33	2.8
第42図吊27	V	3	17	>39	> 2.3
第42図吊28	V	2	17	35	2.1

No.	群	部位	布目部分 (mm)	紐部分 (mm)	比率 (紐 / 布目)
第42図吊29	V	2	14	> 31	> 2.2
第43図吊30	V	2	20	40	2
第43図吊31	V	2	16	> 36	> 2.3
第43図吊32	V	2	>16	36	2.3 >
第43図吊33	V	2	17	36	2.1
第43図吊34	V	3	12	> 36	> 3.0
第43図吊35	V	2	18	> 25	> 1.8
第43図吊36	V	2	16	34	2.13
第43図吊 37-1	V	2	13	35	2.7
第43図吊 37-2	V	2	10	29	2.9
第21図 112-1	V	1	15	32	> 2.1
第21図 112-2	V	2	10	34	3.4
第21図 112-3	V	2	17	25	1.5
第21図 112-4	V	3	20	24	1.2
第21図 112-5	V	3	20	25	1.3
第21図 113-1	V	1	15	31	2.1
第21図 113-2	V	1	16	31	1.9
第21図 113-3	V	2	15	28	1.9
第21図 113-4	V	2	11	33	3
第21図 113-5	V	2	13	32	2.5
第22図114	V	1	28	39	1.4
第22図 115-1	V	2	16	24	1.5
第22図 115-2	V	2	15	22	1.5
第22図116	V	2	17	32	1.9
第23図 117-1	V	1	13	18	1.4
第23図 117-2	V	2	10	35	3.5
第23図 117-3	V	2	15	35	2.3
第23図119	V	3	20	37	1.9
第24図121	V	3	> 21	> 47	-
第24図123	V	3	> 22	49	2.2 >
第32図165	V	3	21	35	1.7

資料番号で「1-1」や「206-3」等、「-」でつないだものは、同一資料で複数箇所計測したことを示す。「-」の左が資料番号で、右が計測した単位の番号である。ただ、どの単位を計測したかは、図に示していない。部位欄は、吊紐痕の認められる箇所を示し、1は玉縁部、2は筒部上部、3は筒部下部を示す。数値欄の「21>」は21よりも小さいことを、「> 1.9」は1.9よりも大きいことを示す。比率の数値は、小数点以下第2位を四捨五入した。

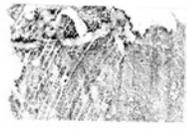
表4 丸瓦吊紐痕計測一覧表



第40図 吊紐 (1)



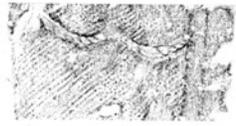
吊10



吊15



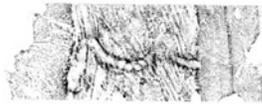
吊11



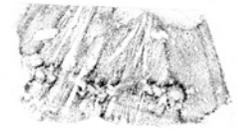
吊16



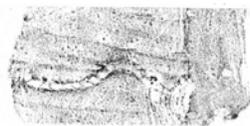
吊12



吊17



吊13



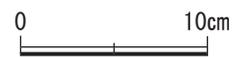
吊18



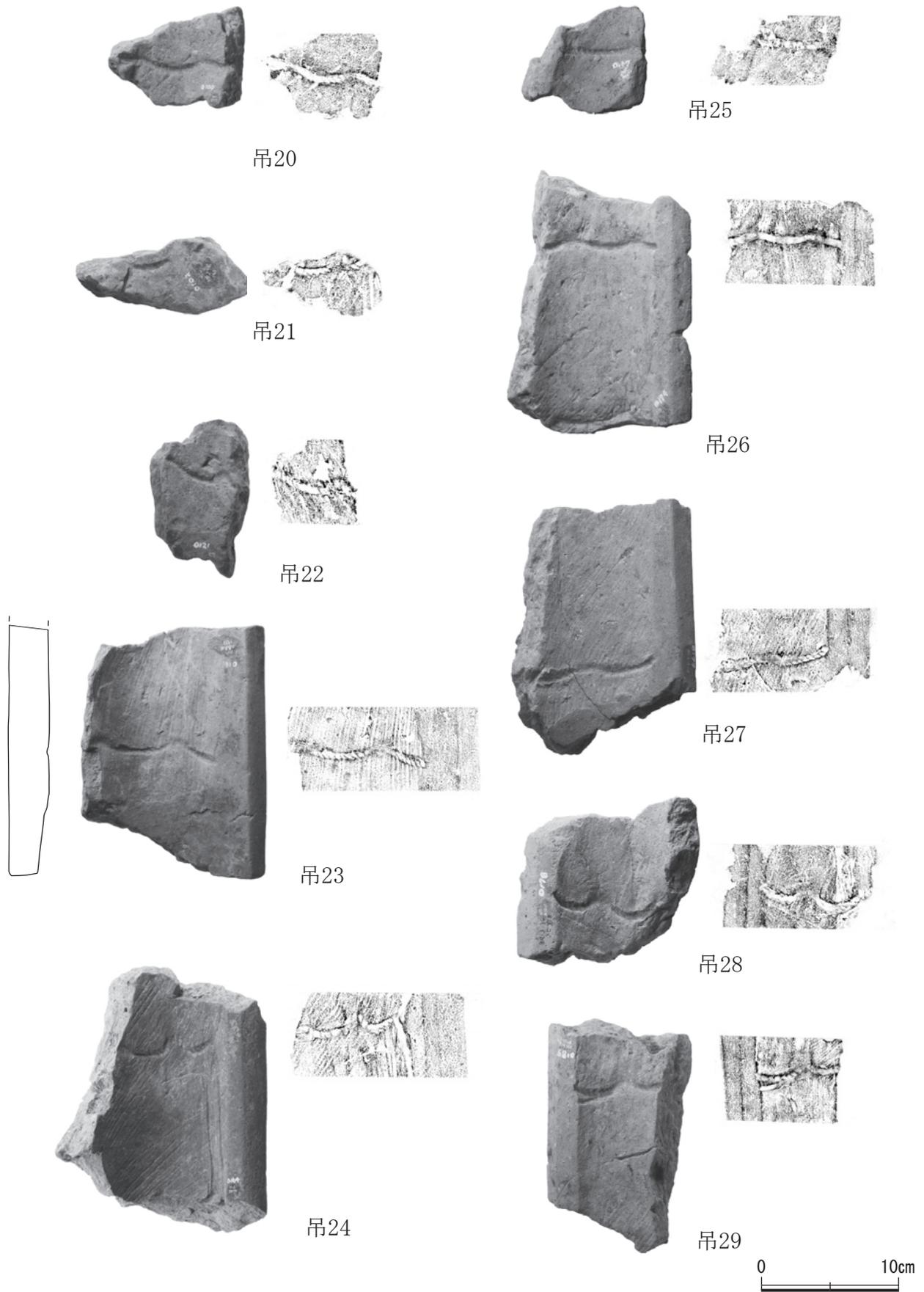
吊14



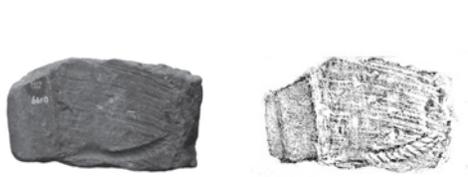
吊19



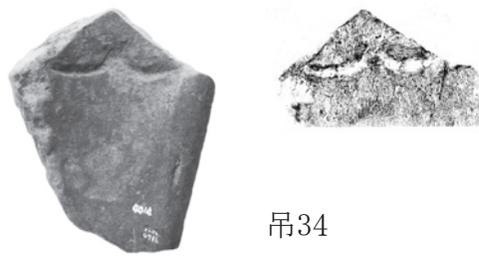
第41図 吊紐 (2)



第42図 吊紐 (3)



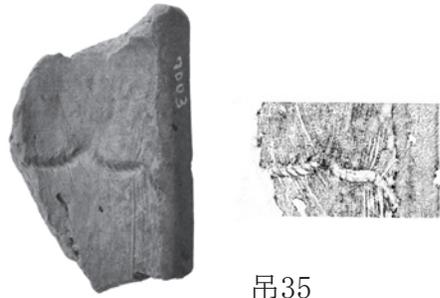
吊30



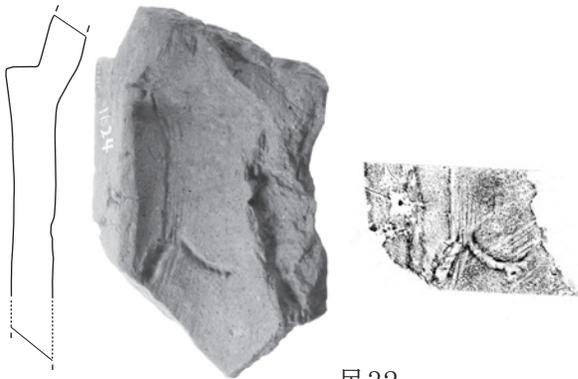
吊34



吊31



吊35



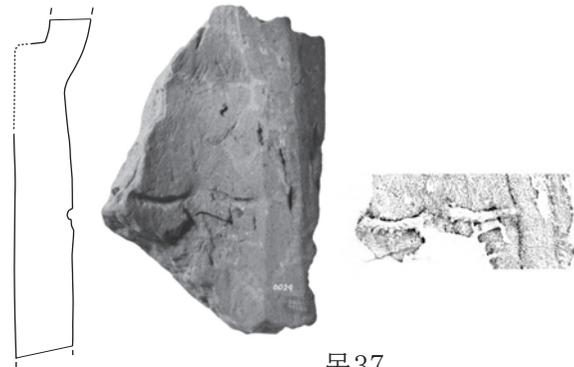
吊32



吊36



吊33



吊37



第43图 吊紐 (4)

第三章 真慈悲寺をどのように考えたらよいか

—平安末・鎌倉時代の丘陵霊場—

峰岸純夫（都立大学名誉教授）

1. 真慈悲寺はどのような歴史をたどったか

10年近くにわたる多くの方々の御努力で、真慈悲寺の姿が次第に明らかになってきている。この時点で次の調査研究の一層の進展のために、日本各地で調査された霊場研究を参考にして、私なりの予想される真慈悲寺の全体像を試論的に述べておきたい。

御存知のとおり仏道修行の霊場として中国の天台山・峨眉山などの山岳霊場をモデルとして、平安時代に最澄によって近江の比叡山延暦寺、空海によって紀伊の高野山金剛峯寺が仏道修行の道場として開かれ、両教団の各地域への新出と荘園公領制の全国的展開とがからみあってこのような山岳・丘陵霊場が全国各地に普及した。

11世紀末～12世紀に存在した真慈悲寺は天台系教団の影響を受け、仏道修行の場に加えて經典埋納供養という特色を持って発足した。すなわち法華経などの經典を書写して経筒に入れて儀式を行い、これを見晴らしのよい高所に小マウンドを築きそのなかに埋納することによって、經典の功德が書写・埋納者に及ぶという信仰に基づくものであった。そのほかの仏道修行は、寺堂に多数が集まって經典を読み上げ、あるいは朝夕に、流れ落ちる滝に打たれて身体を清浄化して信仰を深めることなどであった。そこには、この霊場を経営する住僧と諸国を巡回する修行僧や在俗の修行者の共同の場が形成されていた。

ところが12世紀末には、治承寿永の内乱もあり、またこの霊場が荘園などの経済基盤がないところから衰退してきたので、有尋という住僧が成立したばかりの鎌倉幕府に赴き、助成とその再建を訴えた。源頼朝はこれを許容し一切経を納める経蔵の造立を命じて有尋を院主職に任命した（「吾妻鏡」）。これによって真慈悲寺は幕府

の祈願寺という形で再出発することになった。当時の幕府の祈願寺は、近隣の幕府御家人たちが檀那としてバックアップするのが通例であったので、おそらく武蔵国府に支配権を及ぼしていた畠山氏、隣接の船木田荘を支配する横山氏や真慈悲寺が立地する吉富郷の地頭職をもつ日奉氏などが寄り合って支援していたと考えられる。

やがて鎌倉中・後期に入ると畠山氏・横山氏などは執権北条氏によって滅ぼされ、北条氏と姻戚関係にあった勢力を伸ばした安達氏が、武蔵に進出して真慈悲寺の檀那になっていった。頼朝の御落胤といわれる安達景盛が没すると、その子義景夫妻が父景盛夫妻を供養して真慈悲寺の奥の院ともいべき西方の一角に阿弥陀堂を建立して、妻（「源氏」、小笠原時長娘）の名で阿弥陀如来像を造立・納入した（「阿弥陀如来像背銘」）。景盛は高野山金剛三昧院を管轄する住僧で、かつ鎌倉幕府の有力御家人をも兼ねていた。この阿弥陀如来像（国重要文化財）には、景盛の姿を見るようでもある。その後、鎌倉後期の蒙古襲来時に神仏の加護を求めて寺堂などの建立が盛行する中で、義景の子泰盛によって大型の本堂（大日堂か）が建立され、阿弥陀堂も含めてこれら大量の瓦が近年に発掘調査されている。これらの時点で、武蔵一宮の小野神社の西方山上にあった末社に鶴岡八幡宮から八幡大菩薩（本地は阿弥陀如来）を勧請して真慈悲寺とセットの八幡神社とした再建されたと想定される。この八幡神社は、鎌倉末期の安達氏の滅亡、やがて幕府の滅亡とともに解体の運命にさらされた真慈悲寺になりかわって、南北朝・室町期には神宮寺として全体の霊場地域を管轄するようになったと考えられる。

2. 真慈悲寺の内部構成はどのようになっていたか

A 経筒埋納の霊場—仁王塚

平安末—鎌倉初期の真慈悲寺は、前記のように単に仏道修行の霊場というだけでなく、経筒埋納供養の場であった。そのための施設として經典を収蔵しておく経蔵（宝蔵ともいう）が置かれ、ここから經典を取り出して書写したり、この經典供養を行う堂宇があり、そしてこれを土中に埋納する高台の聖地が存在した。これらの場所は、元禄十三年（1700）に百草の村人によって経筒などが発掘された仁王塚の地域と考えられる。この地域には古代の古墳（円墳）が二つ並んであったので、あたかも仁王門のようだとの連想からこのような地名がつけられたと思われる。この古墳の墳丘上が経筒埋納の地だったと思われる。この地は、大栗川へ流入する水路の谷筋、新堂ヶ谷戸の北斜面にあり、大栗川を越えて関戸方面を見下ろす景勝地となっていた。このA地域一帯に、堂宇・経蔵・経筒埋納地などがセットとなって分布していたと考えられる。

B 新堂ヶ谷戸—東電学園の中心部—

新堂ヶ谷戸の谷筋の南に展開する広い台地上の空間の小字名は新堂ヶ谷戸、ここには現在東電学園の主要建物が立ち並んでいる。百草山のなかで一番利用価値の高い場所である。ここには真慈悲寺の重要な堂塔が建立されていたのではないかと想定する。おそらく、対岸の仁王塚の初期霊場に対して、幕府の助成によって新たな堂宇が建設されたがゆえに新堂ヶ谷戸の地名が遺されたのではないかと想定する。東電学園建設の大土木工事によって、かなりの遺構が破壊されたと思われるが、残された場所での遺構の発見が期待される。

C 大日堂・観音堂・八幡神社—京王百草園地域

真慈悲寺の奥の院ともいべき西方の高地に、有力御家人安達氏によって鎌倉中後期に大規模な堂宇が建設されて真慈悲寺は新たな時代を迎える。即ち本堂（大日堂か）・阿弥陀堂など瓦葺の礎石建物、それに加えて宝塔（あるいは三重塔）、そして改築された八幡神社が立ち並び、壮観な様相を呈したと思われる。これによって真慈悲寺の中心部がA・B地区からこの奥の院のようなC

地区に移動したと思われる。

しかし、この地域はその後の土木工事によって多くの改変が加えられて遺構の検出に困難を極めている。すなわち戦国期に百草城（柵井城というべきか）という中規模の連郭式山城が構築されて、その南面の平場は帯曲輪として整地され、建物礎石などは片づけられ、散乱した瓦の多くは東の谷筋（現在は水洗便所となっている付近）に廃棄されてしまった。またこの平場には、江戸時代に二つの松連寺が相次いで建てられ、明治維新後にこの地を買い取った貿易商の青木角蔵による庭園・池の造成によって改変が加えられた。その後にこの地を買い取った京王電鉄によって百草園という梅園になるが、この過程で東斜面の盛土がなされ、さらにその東下の斜面地（現在の八幡下公園とその東の住宅地）には都営地下鉄工事の廃土が運ばれて大規模な埋め立て工事が行われるなど、大きな変化に見舞われている。旧地表面を確定して真慈悲寺の残された遺構を確認する努力は今後も続けられなければならない。

D 滝行の場所

霊場にとって各地から参集する修行者が滝行を行う場所は必要不可欠である。この場所をどこに求めるかという、地名でいえば倉沢川に沿った滝ヶ谷戸があり、ここは現在でも湧水の流れが豊富である。その他、百草の北に接する落川地区の川崎街道の南に接して真照寺という真言宗寺院がある。この寺の山号は清谷山といい、南山頂部からの清流が流れ下っていたという。真慈悲寺の滝行を担当した坊がもとになって寺になったとも考えられる。また百草に西北に接する三沢地区の山林中に今も滝壺が存在するところもある。北と南と西のそれぞれに滝行の場所があっても不自然ではない。

E 宿坊の場所

全国から多くの仏道修行者や在家信者がやってきて、数か月ないし数年滞在して修行を行うのであるから、その人たちが止宿する多くの宿坊が準備されなければならない。地質条件によっては洞窟や鎌倉のやぐらのような所を活用する場合もあるが、真慈悲寺の場合は新堂ヶ

谷戸・百草谷戸・倉沢谷戸など三つの谷筋に沿った平場に掘立小屋の宿坊を作って寝起きし、周辺の畠を耕すなど自給的な生活をしつつ、仏道修行にはげんだのである。それぞれの宿坊にはそれを管理する下級の住僧や地元住民の協力者がいた。この宿坊は生活空間であったから、うまく発掘調査されれば当時の生活遺構・遺物を多く見つけ出すことができるであろう。

F 三昧と無常堂―墓と葬祭施設―

住僧・回国の修行僧・一般在家の信者などが、霊場を中心として仏道修行の共同体を営んでいるわけであるから時として死者が出る。その場合どうするか。人がまさに死に向かわんとするとき、まず無常堂という堂に担ぎ込み、正面に掲げた阿弥陀如来の掛軸の阿弥陀の手のところから五色のテープをたらし横たわった人に持たせ、多くの参会者の読経のなかで極楽往生を遂げさせる。無常堂はこのような人の往生の場合の活用のみでなく、葬儀や法要の時などにも利用される。死者はその近くで荼毘（だび・火葬）に付される。火葬骨は上位の人の場合は骨壺に入れられ、石組みの穴の中に納められ石で蓋をして上部を少しマウンドにする。骨壺の代わりに骨箱や布袋の場合もあるが、これらの場合は腐食して残らない。簡単な埋葬は、火葬骨を地上に振り撒き、その上を小石で覆い土をかぶせる。これらの墓は三昧（さんまい）といわれ、この埋葬業務は三昧聖（ひじり）といわれる被差別の非人が担当し、彼らは近くの非人小屋に住んでいた。以上の無常堂や三昧は丘陵の条件の悪い北斜面などに営まれる場合が多く、真慈悲寺の場合は、陣屋山の北斜面（東電学園の敷地内）から発掘調査されている。

三昧は石敷きで構築されるのでボーリング調査で確認されやすい。現在発見されている無常堂や三昧は板碑を伴わない鎌倉中後期のものと考えられているが、鎌倉末・南北朝・室町期になるとその場所に供養塔婆が立てられるようになる。その遺跡は八幡神社の西にある「あさひさま」と小峰の川崎街道沿いの北斜面にある墓地（個人所有）などである。前者は開発で壊されてしまったが、石組みの中に常滑焼か渥美焼か不明だが大甕をセットし

平たい大石で蓋をして納骨し、まわりに板碑が林立していた。大甕の中には数代にわたるとされる多くの人の遺骨が収められていたという。おそらく家族共同墓の形態とみてよい。この二つの墓ともに真慈悲寺関係者のものというよりは、有力な地域住民の墓と考えられる。

3、QあんどA

① 真慈悲寺の名の起りは何か。

經典に慈悲の種類のことから記され、親が子を慈しむ縁の慈悲、師が弟子を慈しむ法縁の慈悲などがあるが、すべての人を平等に慈しむ仏の慈悲こそが真の慈悲である、という表現から来ている。真慈悲寺という寺名は、現在のところこの武蔵真慈悲寺以外に見つかっていない。

② 真慈悲寺と八幡神社の関係はどのようなものだったのか。

前近代の日本の伝統は、神仏習合であったので、神は仏の化身としてこの世にあらわれ、仏を守護するものと考えられていた。神にはそれぞれ「本地」といって発生の基があり、八幡大菩薩は阿弥陀如来が本地である。このような関係で、神社は、檀那寺である寺院の管理下にあった。一方、もともと神社自身が寺化して神宮寺となり（例、鶴岡八幡宮寺）、その場合にはその傘下に寺堂を包摂することになる。真慈悲寺が解体した南北朝期以後に残された八幡神社は、独立して神宮寺として機能し旧真慈悲寺傘下の残された寺堂などを管轄していたと考えられる。

③ 江戸時代の松連寺と真慈悲寺の関係はどのようなものだったのか。

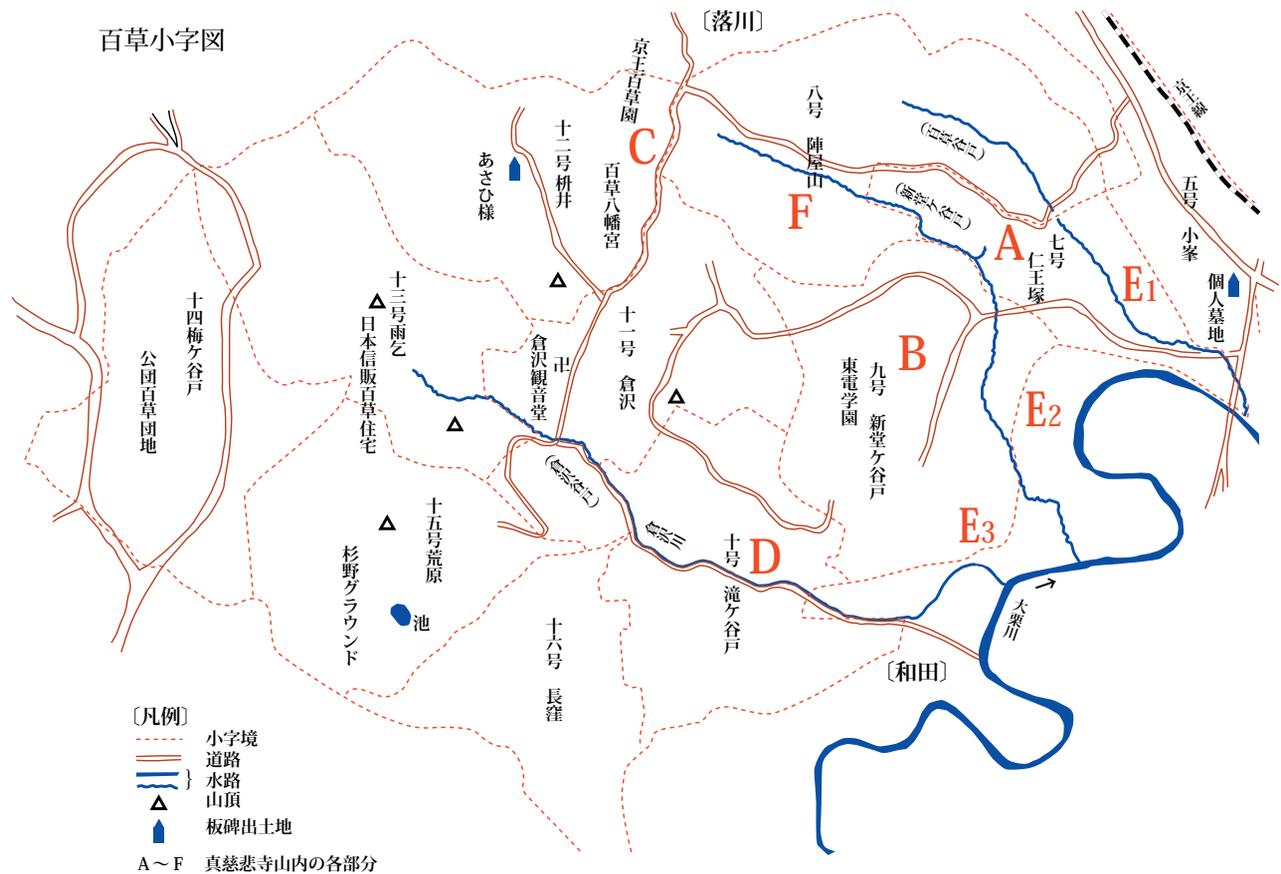
直接のつながりはない。江戸中期に百草の領主小林正利が自己の持仏堂である観音堂を作り、それを足掛かりに寺院を建立しようとした時、幕府の厳しい新設寺院禁止の幕府法令の網を潜り抜けるために、当時発掘された真慈悲寺関係の経筒などを活用して古代以来あった松連寺を再建するという名目によって建立を許可されて旧真慈悲寺のC地区に榊井山松連寺を建立した。その後、小

林氏の百草村の領主を改易された時に廃寺となったが、間もなく小田原藩大久保氏の妻室寿昌院元長尼によって慈岳山松連寺として再建されて明治維新まで続いた。その結果、真慈悲寺関係の仏像や遺物が寺宝として松連寺に伝えられ、今日に残されたのである。

④ 高幡不動と真慈悲寺の相違はどのようなものか。

平安末期に丘陵霊場として発足した時は、その規模はほぼ同様なものであったと考えられる。しかし、高幡不動は不動明王を祀る不動堂を中心にして「十院不動堂」という真言系の霊場であった。そこでは経筒埋納供養は行わず、10の堂宇が南平地区の山中に設置されていた。真慈悲寺がその後に幕府の祈願寺になり、また安達氏の保護を受けて大きな堂宇が建立され

て発展を遂げていくなかで、十院不動堂の方はそのままの形で継続していったと思われる。ところが建武二年（1335）に未曾有の台風がこの地域を襲った時、同様な被害を受けて堂宇が崩壊した。ところが、真慈悲寺はバックにあった安達氏や幕府がすでに相次いで滅亡しており、再建する者がなく八幡神社を残してそのまま解体していったのに反して、不動堂はこの地域の地頭高麗助綱夫妻と十院の一つ虚空蔵院の住僧儀海が協力して再建した。その際に、三年の歳月を費やして山中にあった堂宇を現在地の高幡の平場に移して、不動三尊像の修復を果たして今日の繁栄の基礎を作った。すなわち、災害後の復旧過程に大きな相違があったのである。



附篇 1 真慈悲寺本堂復元の一例

高橋俊行・金村忠（真慈悲寺調査の会）

1. はじめに

京王百草園出土の瓦は、時期の異なる瓦が混在して一括廃棄された状況で出土した。出土地点は京王百草園内の中腹である。上方の平場には江戸時代に開基された松連寺が存在していた。この寺は明治の廃仏毀釈で廃寺になっており、その後明治20年に青木角蔵により跡地が公園として整備され、現在は梅の名所として京王百草園が開園している。

出土した13世紀中頃と13世紀後半～末にかけての瓦をのせていた真慈悲寺の堂宇は、江戸時代に松連寺があったと同じ平場に建てられていたと推定している。残念ながら、これまでに数度にわたり実施された発掘調査ではいまだ建物の遺構を確認するには至っていない。

ここでは、13世紀後半～末に分類されている丸瓦のNo.112、平瓦のNo.125・126・127を使って、これらが葺かれていたであろう建物の復元を試みた。これらの瓦は出土量や組成の検討から総瓦葺きに用いられた瓦とされている。

2. 丸瓦と平瓦の実測値

ほぼ完形に近い丸瓦112と平瓦125～127の実測値を図1に示した。個々の瓦によって、大きさや厚さには多少の違いがある。今回復元の基になる大きさとして以下の数値を採用した。

平瓦：全長33.5cm・幅28.0cm・重さ3.7kg

丸瓦：全長40.0cm・幅16.5cm・重さ3.4kg

3. 野地と平瓦の関係

仮に1間を180cm×180cmとし、幅5cmの角材で野地を組んだとすると、平瓦を横方向に5枚、縦方向に4枚並べることができる。横方向に36cmの間隔で設置さ

れた角材の中に幅28cmの平瓦を置くと、野地の角材との間に1.5cmの隙間を開けて並ぶことになる(図3)。次に縦方向に45cmの間隔で設置された角材の中に長さ33.5cmの平瓦を並べると想定してみる。仮に45cmごとに釘で止めるとすると、葺き足は15cmとなり(図4・5)、3枚毎に釘が打たれることになる。もし30cm間隔の野地を設置したとすると、2枚毎に釘を打つことになる(図6)。

発掘調査で出土した瓦は元位置を留めておらず、また一括廃棄された瓦全部を調査したわけでもないので、釘穴をもつ平瓦の割合を求めることは不可能である。

しかし、平瓦の重ね方について興味深い平瓦が出土している。No.63はⅢ群に分類された13世紀後半～末の瓦であるが、凸面の中央付近に3cm幅で黒色のタール状の付着物が付いている。この付着物は瓦を重ねるときに瓦を安定させる為に置いた緩衝材の痕跡と考えられる。下端から付着物まではほぼ15cmである。

今回の復元にあたっては、野地の間隔を45cmとして計算することにする。(高橋)

4. 瓦量の推定

1271(文永9)年2月、鎌倉で名越時章・教時兄弟が、京都六波羅で執権時宗の異母兄時輔が謀判の疑いありとして討たれるという二月騒動が発生した。安達泰盛の庶兄で吉富郷地頭 安達頼景(関戸次郎)は鎌倉に召し下され、所領2ヶ所を没収された。宗尊親王派の名越流の排除にあったようである。泰盛は二月騒動の確信犯であり、これにより幕府に確固たる地位を築いた。

頼賢・憲静 師弟は文永(1264～1275)の頃 鎌倉に下り異国降伏の秘法を修すべき霊場の修復を説いて、時宗・泰盛の全面的な援助を得た。泰盛はその一環として吉

富郷の真慈悲寺に本堂の再建を図ったと思われる。

当時鎌倉は東大寺系の工匠が多数下向していた。泰盛自身は真言宗徒であったがこれら工匠を容易に使い得る立場にあった。したがって和様建築に少し大仏様の味の入った鎌倉経由の建物が出来あがったと想像される。

当時、本堂としては少なくとも五間堂以上が要求された。間面（けんめん）記法による三間の母屋に庇が四面に巡って五間になる建物である。今回復元するⅢ～Ⅴ群の瓦がのる建物は、三間四面堂の再建本堂と推定される。

勸進は多摩川の関銭の徴収であろう。

規模は当時の平均的な大きさで下記のとおりとする。

建物規模（単位mm）

建 物	規 模	屋根形等
本 堂	三間四面堂 12,200 × 13,000	入母屋造り 総瓦 葺き 向拝一間

瓦の大きさ 平瓦の働きを150とした。

種 類	部 位	大きさ、働き （単位mm）	1㎡当り枚数
Ⅲ～Ⅴ群 酸化焰	平瓦	275 × 335 150 × 280	23.8枚 / ㎡
	丸瓦	165 × 335 l=340	10.5枚 / ㎡

屋根面積から瓦枚数を算出することができる。

瓦量

各推定建物の屋根瓦葺き実面積を出し係数をかけて枚数を算出する。役瓦は図面上から数える。

屋根面積

$$(10.0 \times 10.0) \times 2 + (4.0 \times 5.0)1/2 \times 4$$

$$+ (4.5 \times 8.0) \times 2 + (4.0 \times 5.0)1/2 \times 4$$

$$+ (7.2 \times 2.5) = 375.0 \text{ m}^2$$

平瓦 $375.0 \times 23.8 = 8,930$ 枚

丸瓦 $375.0 \times 10.5 = 3,940$ 枚

軒平瓦 $59 + 64 = 123$ 枚

掛軒平瓦 $22 \times 4 + 9 \times 2 = 62$ 枚

掛軒丸瓦 $22 \times 4 + 9 \times 2 = 62$ 枚

大棟 $l = 10.3 \text{ m}$

丸瓦 $10.3/0.34 = 30$ 枚

熨斗瓦（台熨斗共） $10.3 / 0.28 \times 6 \times 2 = 441$ 枚

平瓦 $(10.3/0.28) \times 2 = 220$ 枚

面戸瓦 $33 \times 2 = 66$ 枚

平行棟、隅降棟、稚児棟、妻降棟

$$l = 6.4 \times 4 + 1.5 \times 4 = 31.6 \text{ m}$$

丸瓦 $31.6/0.34 = 94$ 枚

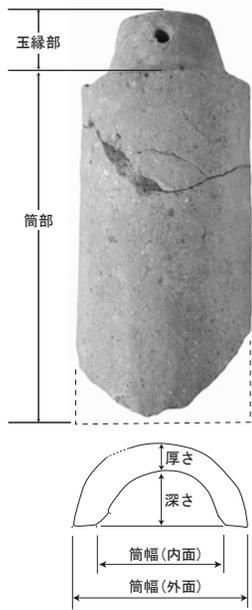
熨斗瓦（台熨斗共） $(31.6/0.28) \times 4 \times 2 = 902$ 枚

面戸瓦 $12 \times 8 + 22 \times 4 = 184$ 枚

鬼瓦 $= 16$ 枚

参考文献

1. 福島 金治『北条時宗と安達泰盛』第2章 山川出版社 2010
2. 網野 善彦『中世東寺と東寺領荘園』第3章 岩波書店 1978
3. 関口 欣也『増補 鎌倉の古建築』「第2章 天下禅刹の盛」有隣新書 2005
4. 伊藤 延男『中世和様建築の研究』彰国社 1960
5. 高橋 俊行『京王百草園出土の瓦について（案）』2008 真慈悲寺調査の会検討資料

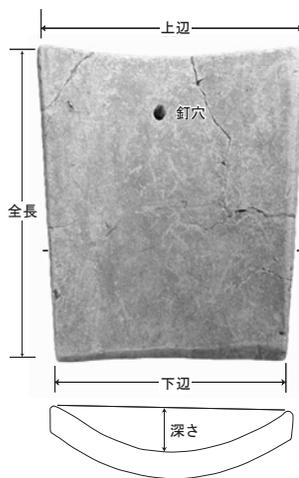


(1) 丸瓦

単位cm

	報告No.112
玉縁	6.5
玉縁端から釘穴まで	1.8
筒部	30.0*
筒幅(外面)	16.5
筒幅(内面)	12.0
深さ	5.4
厚さ	2.3 ~2.5
重量	3.40kg*

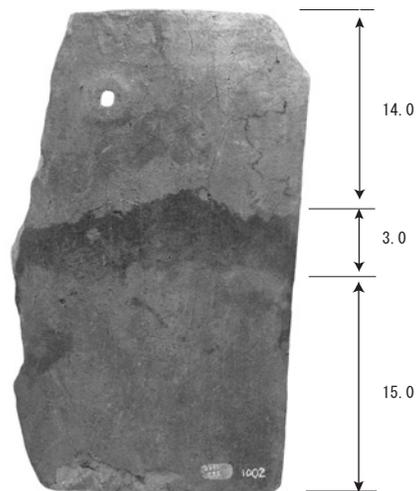
* : 推定値



(2) 平瓦

単位cm

	報告No.125	報告No.127	報告No.126
釘穴	釘穴有	釘穴有	釘穴無
上辺	28.0	27.5	27.0
下辺	24.5	25.0	24.5
全長	33.5	33.5	32.5
上辺から釘穴まで	5.6	6.0	なし
厚さ	2.7 ~3.0	2.2 ~2.6	2.0 ~2.5
重量	3.96kg	3.66kg	3.50kg
上辺深さ	5.2	4.2	5.1
下辺深さ	4.6	4.5	5.1



報告No.63

図1

(1) 野地の棧組

- ・ 1間を仮に180cm×180cmとし、5cmの角材の中心～中心で計測する。
- ・ 現存する平瓦1枚の大きさ（縦33.5cm、横28.0cm）から横方向に5拵、縦方向に4拵と考える。

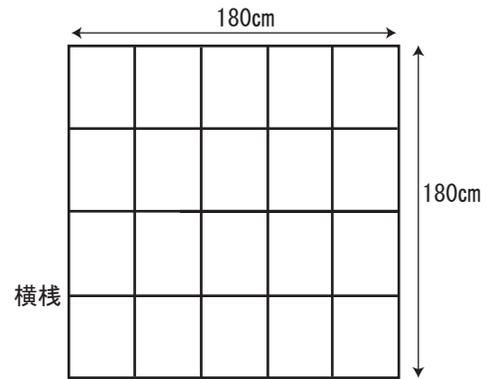


図2

(2) 1拵当り横方向の考え方

横（縦棧中心～中心）

$$180\text{cm} \div 5\text{拵} = 36.0\text{cm}$$

$$2.5 + 1.5 + 28.0 + 1.5 + 2.5 = 36.0$$

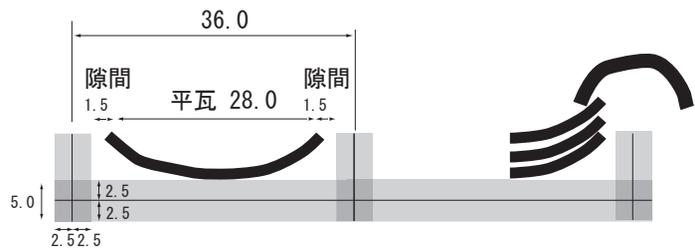


図3

(3) 1拵当り縦方向の考え方

縦（横棧中心～中心）

$$180\text{cm} \div 4\text{拵} = 45.0\text{cm}$$

$$2.5 + 40.0 + 2.5 = 45.0\text{cm}$$

①④は釘穴有で全長33.5cm

②③は釘穴無で全長は33.5cm以下で可

現存する釘穴無の平瓦は32.0cm

屋根全体の軽量化を図るため釘穴無の平瓦はやや小振りに造っていたか？

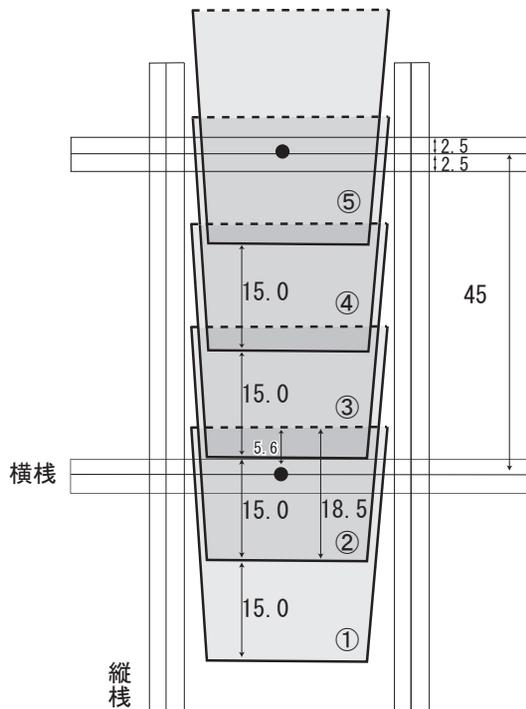
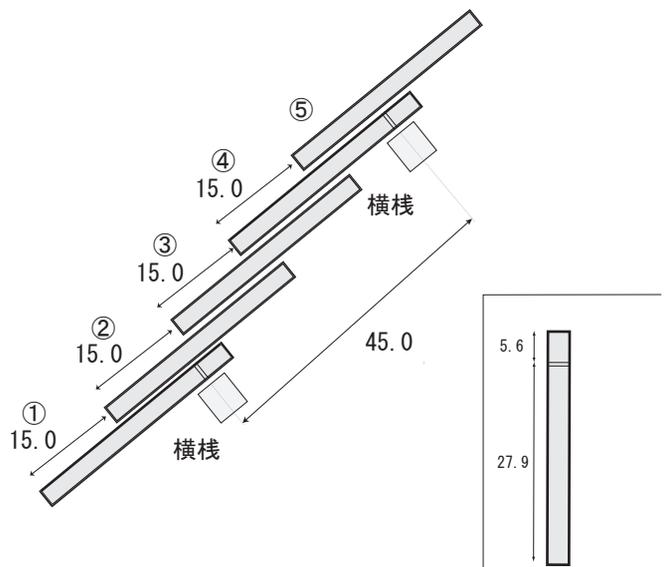


図4



釘穴有の平瓦1枚の長さ

図5

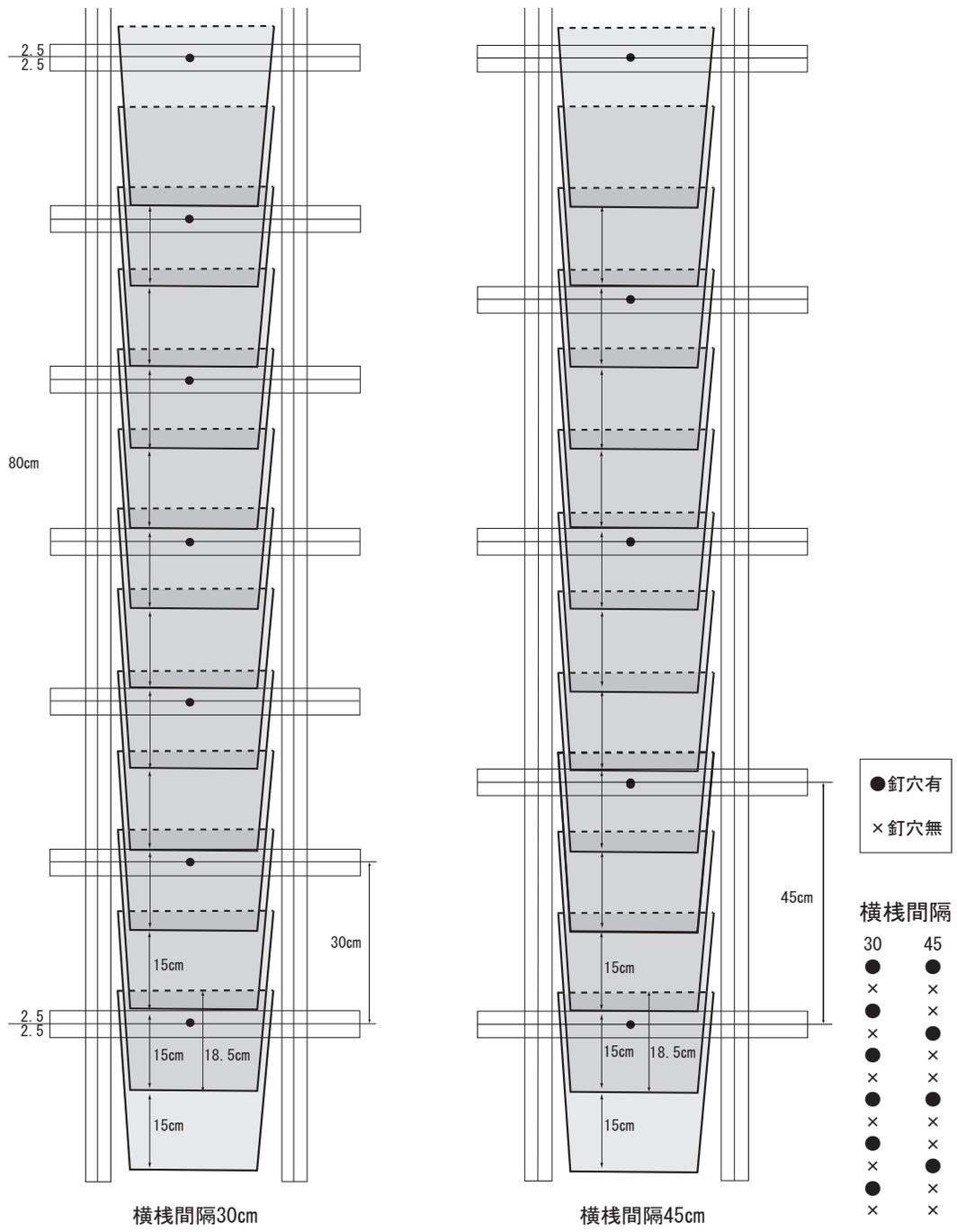
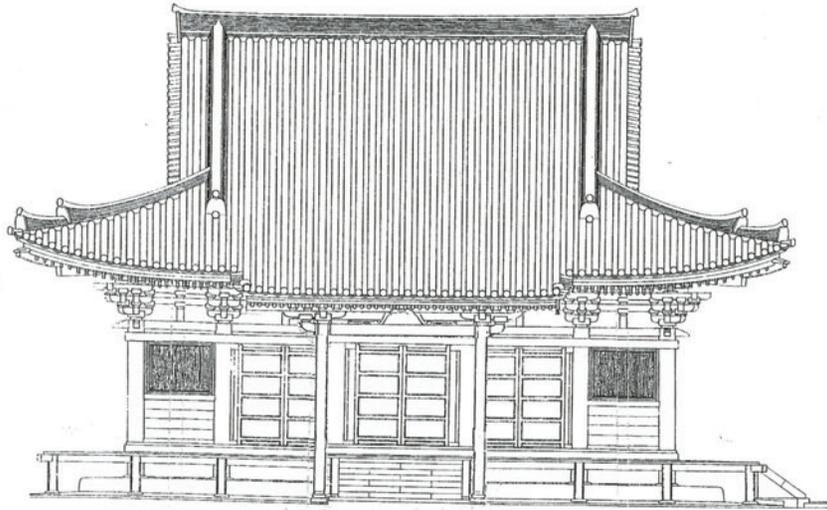
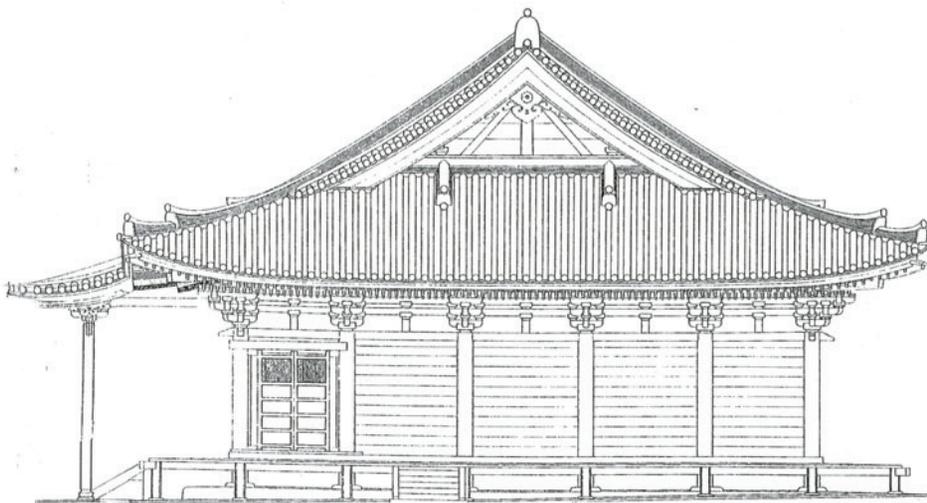


図 6



本堂東面図 1/200



本堂北面図 1/200

真慈悲寺本堂想定図 金村作成 (2013/03/01)

図7

附篇 2 京王百草園出土瓦分類の妥当性等の検討

野村武男・山口昭^{*}・按田宗忠^{*}・斎藤勝美^{*}・梶谷尚^{*}（*真慈悲寺調査の会）

はじめに および 目的

平安末期から鎌倉時代に存在した東京都日野市百草真慈悲寺の遺物と考えられている瓦片の分類と製作年代の割り出しが行われている（文献1～4）。

分類にはいろいろな方法があるが、本報告の目的はこれまであまり試みられたことのない瓦片の密度の分布によって分類の妥当性あるいは確認を試みることである。

ここで測定・計算された比重は密度とほとんど同じ値になるため、密度とした。

2. 事項の定義等

比重：物質の質量と、それと同体積の標準物質の質量の比。通常標準物質は、4℃の水とする。同一場所での測定ならば、両者の重さの比をとってもよい、ということから比重という名がつけられた。

密度（質量密度）：上記によって測定された比重に4℃の水の密度0.999973を掛ければ、その物質の密度となる。実際には比重と密度の差はほとんどない。無視してよい。

標準偏差：変数Xの平均値をE(X)とすれば、 $\{X - E(X)\}^2$ の平均値(σ^2)を分散といい、 σ (> 0)を標準偏差という。

3. 測定した瓦

東京都日野市百草にある「京王百草園」は、中世初期に存在し、鎌倉幕府の祈祷所として『吾妻鏡』に記載された「真慈悲寺」伽藍の一部が存在したと考えられている（文献3・4）。この遺跡から出土した瓦片を実験に

供した。

4. 比重の測定原理および測定方法

原理的に、「もの」がその「もの」の体積分だけ水を排除すること、を利用した方法を用いる。いろいろの方法があるが、今回の実験では以下の方法を用いた（図1参照）。具体的には以下のように実験し、計算する。

1) 容器体積を求める（図1左側）

- からの容器の重量を v (gwt.) とする。
- 満杯の水を入れた時の重量を計る。

これを A (gwt.) とする。

水のみ重量は $(A - v)$ gwt.

水の重量 (gwt.) \div 水の体積 (cm^3)

したがってこの容器の体積は、

$(A - v) \text{ cm}^3$ 【①】

2) 瓦片の体積を求める（図1右側）

- 瓦片の重量を測定する。
 - 容器に瓦片を入れ、ふたをして水で満杯になった状態の重量を測定する。
- これを B (gwt.) とする。

実際には、ほぼ満杯の水の中へ瓦片を入れ、すぐふたをすることによってあふれ出た余分の水を除き、容器全体の重量を計る。瓦片を水に入れると瓦片の空隙から空気の泡が出るため、この操作を迅速に行う。ふたをした後も泡は盛んに出るが、ふたで密閉した状態を保てば全体の重量に変化はない。この時の重量Bは容器と瓦片と容器中の水の重量の和である。

$$B = v + M + (\text{水の重量})$$

$$\text{水の重量} (\equiv \text{水の体積}) = B - v - M \text{【②】}$$

- ・瓦片の体積を求める。

瓦体積を X (cm^3) とする。

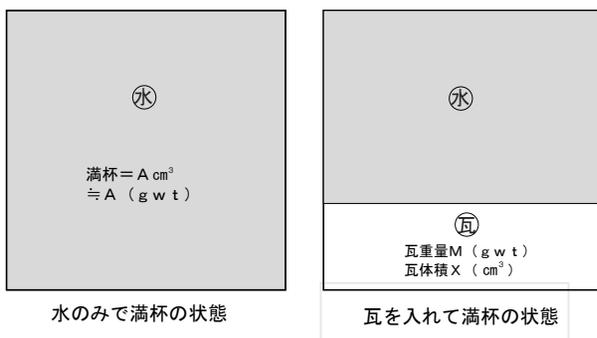
瓦片の体積は、

容器の体積【①】－水の体積【②】となる。

したがって瓦片の体積 (X) は、

$$(A - v) - (B - v - M) \\ = (A + M - B) \text{【③】}$$

図1 瓦体積測定実験原理 瓦の体積を求める



3) 瓦片の比重 (≡密度) を求める

- ・瓦片の比重 (≡密度 ρ) は、

$$(\text{瓦片の重量 } M) \div (\text{瓦片の体積}) \text{【③】}$$

$$\text{したがって } \rho = M \div (A + M - B)$$

4) 実験値を求める

したがって、以下の数値を実験的に求めれば、比重 (≡密度) が求まる。

- ・満杯にした容器の重量 (gwt.) (A)
- ・乾燥状態での瓦片の重量 (gwt.) (M)
- ・水でほぼ満たした容器の中へ瓦片を入れ、ふたをして余分の水を溢れ出させたのちの容器全体の重量 (gwt.) (B)

5. 実験データ

- ・2回実験を行う。
- ・出土した瓦片の中から測定容器に入る大きさのもの、

見た目によって分類した群 (I群～V群) それぞれから無作為抽出した瓦片を実験に供した。

実験に供した瓦片延べ総数は、269片。

- ・瓦片ごとに比重を計算する。

6. 各瓦片の密度分布およびデータの統計的処理

密度 (ρ) 分布をグラフに表したところ、各群すべてほぼ正規分布を示したため、各群の平均密度に差があるかどうかを統計分析処理を行った。

1) 各群の平均密度と標準偏差値 (表1)

表1 各群の平均密度と標準偏差値

群	平均密度	標準偏差
I	1.80	0.056
II	1.73	0.054
III	1.88	0.063
IV	1.80	0.062
V	1.79	0.065

2) 各群の平均密度それぞれの差の有無

統計処理した結果、表2のような結果となった。

なおこれらの評価の危険率は5%である。

すなわち各群の密度は、危険率5%において、

- ・II群は他の群すべてと有意差がある。
- ・III群は、V群を除いた他の群と有意差がある。
- ・I群はIV群およびV群との間に差が見られない。
- ・IV群とV群の間にも差がない。

表2 各群平均密度の差の有無

●：有意差あり、×：有意差なし (危険率5%)

	I	II	III	IV	V
I		●	●	×	×
II	●		●	●	●
III	●	●		●	×
IV	×	●	●		×
V	×	●	×	×	

7. 結果

目視観察から分類された瓦片のうちⅡ群は、その他すべての群に対してその密度の平均値に5%の危険率で有意差のあることがわかった。またⅢ群もⅠ群、Ⅱ群とⅣ群に対し有意差があった。

8. 考察

真慈悲寺の遺物と考えられる東京都日野市百草にある京王百草園出土の瓦片について目視的な違いから分類が行われた。ここで分けられた6群のうち5群(Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ群)について密度に違いがあるかどうかを測定して検討を加えた。

その結果、結果に示したようにⅡ群とⅢ群は他の群との密度平均値に有意に差があることが判明した。Ⅱ群は平均密度1.73、Ⅲ群は平均密度1.87であった。またその他のⅠ群とⅣ群についてはⅡ群とⅢ群に対しては差があったが、その他のそれぞれに対しては有意差は見られなかった。

このことからⅡ群とⅢ群については目視的分類によるものと密度からの分類はほぼ一致したことがわかる。いったん分類した瓦の各群の密度を測定し、その平均値を求めることによってある程度のその分類の確かさを確認することによって密度測定の意味があるかもしれない。

しかしながら密度のみ測定してその値からは分類はできない。なぜならば、群を考慮しないで密度を測定してグラフ上に1点ずつそれらを分布させるとランダムな広がりを見せるだけだからである(図2-1)。

今後中世瓦分類に密度測定の利用を考えるにはどうしたらよいかについては、さらに大がかりな実験を考える必要がある。他の物理的な分析、他の複数の地域から出土した中世瓦や時代の分かった瓦の分析、他の時代の瓦の分析、あるいは用途の違う瓦、たとえば丸瓦・平瓦・軒瓦・道具瓦・鬼瓦などの瓦の分析などとの比較も必要かもしれない。

しかし密度分析によって産出地域の、あるいは工房の

違い、すなわち作り方の違い、使用粘土やその他の材料の違いなども判明してくる可能性もある。

今回の密度測定の意義は、瓦分析の方法として密度分析も一つの方法として使用できるかもしれないという結果を得たことにあるだろう。

文献

- (1)「京王百草園(推定「真慈悲寺」跡)出土中世瓦の研究Ⅰ—丸瓦についての中間報告—」中山弘樹 日野市郷土資料館紀要第2号(通巻第10号) 日野市教育委員会 平成19年(2007)3月31日
- (2)「京王百草園(推定「真慈悲寺」跡)出土中世瓦の研究Ⅱ—軒平瓦についての中間報告—」小黒恵子 日野市郷土資料館紀要第3号(通巻第11号) 日野市教育委員会 平成20年(2008)3月31日
- (3)『京王百草園の発掘調査—幻の真慈悲寺を探る—』日野市遺跡調査会編 京王帝都電鉄株式会社
- (4)『京王百草園内三椽庵移築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』京王電鉄株式会社

実験実施 平成20年(2008)4月12日
平成23年(2011)2月05日

図2-1 全瓦密度の単純スポット (同じ瓦が2度測定されていれば、同じ瓦が2つのスポットとなる)

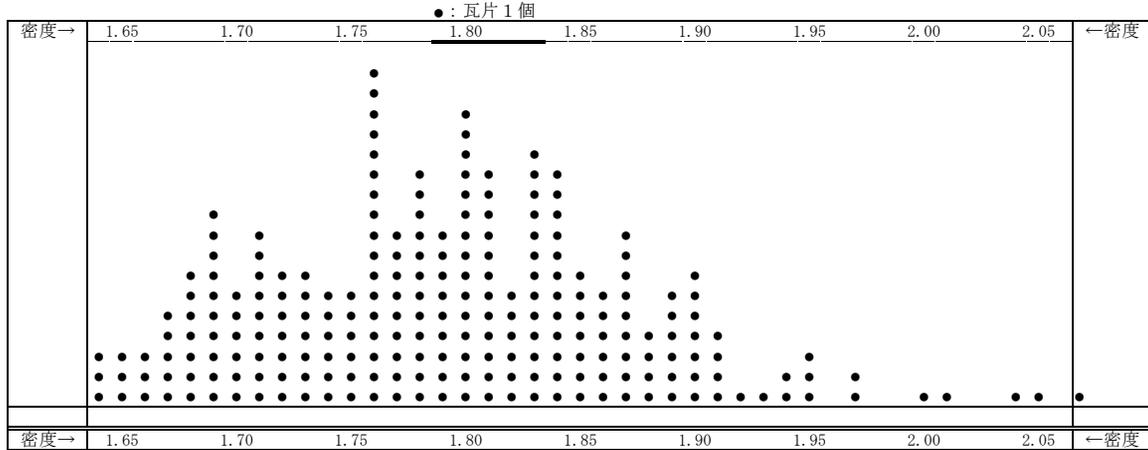
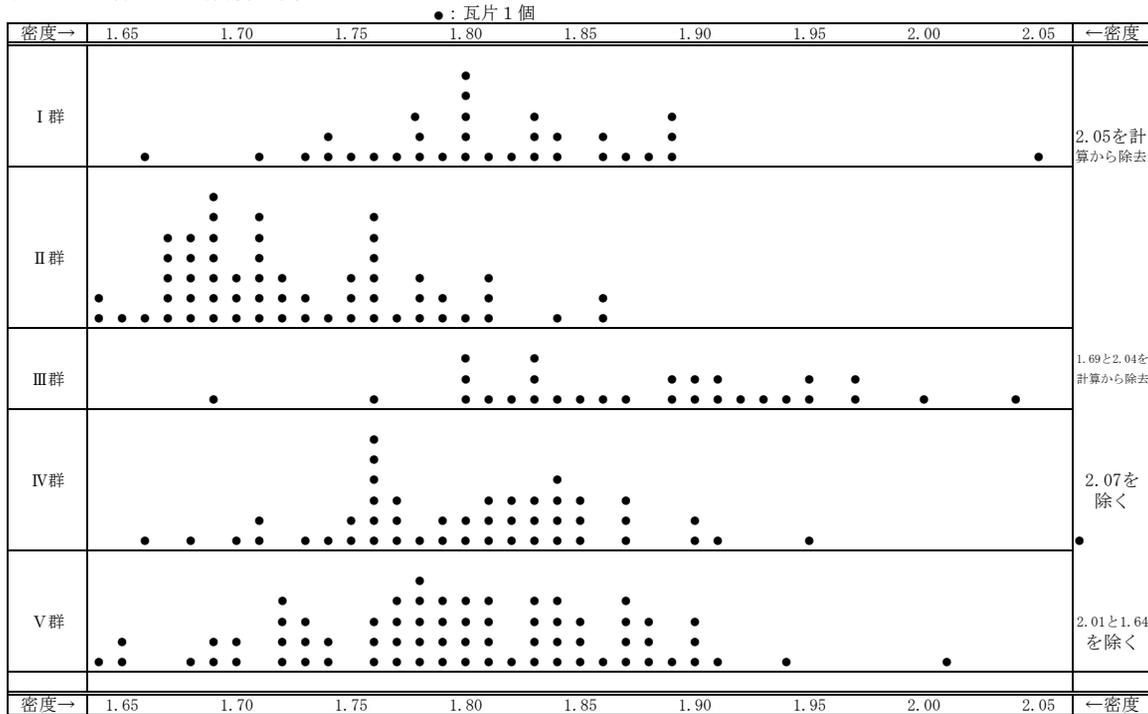


図2-2 群ごとの瓦密度の単純スポット



附篇3 京王百草園出土瓦の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

日野市百草に所在する京王百草園では、数次にわたって行われた発掘調査により、主に中世の遺構・遺物が検出された。そのうち遺物では中世瓦が多数出土したことなどから、鎌倉幕府の御願寺である「真慈悲寺」の寺域に相当する可能性があるかと推定されている。また、これまでの発掘調査に加えて分布調査などが継続実施された結果、大量の瓦片が採取・収蔵されることとなり、これまでその属性分類や編年試案などの研究成果が継続的に公表されている。

今回の分析調査では、瓦の重要な属性の一つである胎土について、岩石学的手法を用いた分析を行い、その特性記載を行う。この特性から、瓦の原料となった土の由来や、その地域性を検討し、また、瓦間における胎土の違いあるいは類似性も見出すことにより、その生産と供給事情に係わる資料を作成する。

1. 試料

試料は、京王百草園より出土した瓦片7点と、比較対照試料として京王百草園より南東へ約1kmの位置にある、大栗川左岸の上総層群連光寺層上部の露頭で礫層

表1 分析資料一覧

報告No.	試料名	分類	種類	備考
	No.56	I群	丸瓦	還元焼成。胎土緻密。
38	No.53	II群	平瓦	13世紀半ば。赤褐色。胎土粗い。表面の離れ砂特徴。
29	No.1690	II群	丸瓦	13世紀半ば。赤褐色。胎土粗い。
	No.2025	III群	丸瓦	13世紀後半。灰色。胎土粗い。
	No.1711	IV群	丸瓦	III群とV群の間の色。胎土粗い。
	No.6070	V群	平瓦	赤色。胎土粗い。表面の離れ砂わずか。
	No.0279	V群	丸瓦	赤色。胎土粗い。
	粘土2	-	-	大栗川左岸上総層群連光寺層の上部の粘土

上部に狭在する粘土層より採取された粘土1点の合計8点である。あわせて、京王百草園裏山で採取された軟質のシルト岩1点も、参考試料として提供されている。

分析試料の選択は、当社技師が収蔵施設に赴き数回にわたる協議を経て行った。その際には、日野市郷土資料館により提示されている、瓦の焼成状態や色調、質感などに基づく分類に従い、瓦の主体を占めるI群からV群までの試料を選択した。分析試料の内訳は、I群が丸瓦1点、III群、IV群が丸瓦各1点、II群とV群が平瓦と丸瓦の各2点である。各分類群の特徴および各試料の遺物番号は、一覧にして表1に示す。

なお、京王百草園裏山で採取されたシルト岩は粘土1、大栗川左岸で採取された粘土試料は、粘土2という試料名が付されている。粘土1のシルト岩は、灰白色を呈し、固結はしているが軟弱であり、砂混じりのシルトから構成されている。一方粘土2は、灰黄褐色を呈するシルト質粘土であり、砂分をほとんど含まない。

2. 分析方法

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法とがある。前者は粉碎による重鉱物分析や薄片作製などが主に用いられており、後者では蛍光X線分析が最もよく用いられている方法である。今回の試料のように比較的粗粒の砂粒を含み、それほど高温で焼成されていないと考えられる瓦の分析では、前者の方が胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいことなどの利点がある。さらに前者の方法の中でも、薄片観察は胎土中における砂粒の量はもちろんのこと、その粒径組成や砂を構成する鉱物、岩石片および微化石の種類なども捉えることが可能であり、胎土

の特徴として得られる情報は多い。

この情報をより客観的な方法で表現したものとして、松田ほか(1999)の方法がある。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いを見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。したがって、ここでは薄片観察法による胎土分析を行う。以下に手順を述べる。

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。なお、径0.5mm以上の粗粒砂以上の粒子については、ポイント数ではなく粒数を計数した。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを作成する。

3. 結果

結果を表2、図1、図2に示す。以下に、鉱物片・岩石片組成、粒径組成および碎屑物の割合に分け、考古学的観察結果に基づく分類群に従って述べる。

1) 鉱物片・岩石片組成および基質

I群: 丸瓦1点のみである。鉱物片では石英が多く、中量の斜長石を伴い、他には微量のカリ長石や黒雲母などが含まれる。石英、斜長石には第四紀のテフラ由来とみられる、清澄なものも多く認められる。岩石片ではチャートが比較的多く、同じ堆積岩類では頁岩や砂岩も伴

われる。また、凝灰岩と多結晶石英はチャートに次いで多く含まれ、さらに流紋岩・デイサイト、花崗岩類、珪長岩なども微量認められ、他種類の岩石構成となっている。凝灰岩にはやや結晶質なものと認められ、また、変質岩は流紋岩を原岩とする粘土岩である。

なお長石類は溶融し、斜長石のリムにはきわめて微細なムライトが晶出している。

II群: 平瓦と丸瓦の2点あるが、傾向としてはほぼ同様の鉱物片・岩石片組成を示すとみてよい。鉱物片では、石英と斜長石が同量程度に多く、他にはカリ長石や緑廉石または黒雲母などが極めて微量含まれる。岩石片は全体的に少量かつ少種類であるが、その中ではチャートがやや多く、次いで多結晶石英、頁岩、流紋岩・デイサイトなどが含まれる。

基質は、2試料ともシルト質であり、酸化鉄が斑状をなして散在している。

III群: 丸瓦1点のみである。鉱物片では石英が多く、中量の斜長石を伴い、微量のカリ長石と極めて微量の黒雲母が含まれる。岩石片では、チャートが比較的多く、次いで多結晶石英を伴い、微量の花崗岩類も含まれる。また、粘土・シルト塊とした粒子が多量に含まれることも特徴である。この粒子は、胎土の基質とは比較的明瞭な境界をなし、外形は円礫状であり、シルト質の基質にごく僅かに砂が混じっている。

基質は、ややシルト質である。また、長石類は微弱に溶融しており、斜長石のリムには隠微晶質なムライトが生成している可能性がある。

IV群: 丸瓦1点のみである。鉱物片では石英が非常に多く、斜長石は少量である。また、微量のカリ長石、角閃石、黒雲母が含まれる。岩石片では、チャート、頁岩、流紋岩・デイサイト、多結晶石英が少量ずつ含まれ、これらに次いで砂岩、安山岩、花崗岩類などが微量含まれる。また、III群の試料と同様、粘土・シルト塊も少量含まれる。

基質はややシルト質であり、粘土鉱物は比較的残存している。長石類の溶融は認められず、角閃石には弱酸

化角閃石化しているものが認められる。

V群: 平瓦と丸瓦があり、鉱物片と岩石片の種類はほぼ同様であるが、それらの量比に若干の違いが認められる。平瓦では、鉱物片は石英が多く、斜長石は少量であり、微量のカリ長石や角閃石、黒雲母などが含まれ、岩石片はいずれも微量であるが、チャート、頁岩、砂岩、流紋岩・デイサイト、安山岩、多結晶石英、花崗岩類、ホルンフェルス、粘板岩など多くの種類が認められる。また、粘土・シルト塊を非常に多く含むことも、特徴である。シルト塊の一部には、砂混じりのものも認められる。一方丸瓦では、鉱物片は石英が非常に多く、斜長石も中量含まれ、微量のカリ長石と極めて微量の黒雲母も含まれる。岩石片は、平瓦と同様にいずれも少量であるが種類は多く、チャート、頁岩、砂岩、凝灰岩、流紋岩・デイサイト、安山岩、多結晶石英、花崗岩類などが認められる。そのうち、凝灰岩には結晶質なものもある。なお、粘土・シルト塊も含まれるが、少量である。

基質は、2試料ともに雲母粘土鉱物質で褐色を呈し、酸化鉄が散在し、一部酸化鉄が斑状に点在する部分も認められる。弱酸化角閃石化した角閃石がごく微量含まれる。

粘土2: 鉱物片では石英が非常に多く、少量の斜長石を伴い、微量のカリ長石や黒雲母を含み、極めて微量の角閃石、緑廉石、白雲母なども含まれる。岩石片は全体的に微量であり、多結晶石英と安山岩が認められるのみであり、他に火山ガラスも微量認められる。火山ガラスは平板状のバブル型と発泡した塊状の軽石型が混在する。基質はセリサイト質である。

2) 粒径組成

I群は細粒砂と中粒砂がほぼ同量程度でモードを示し、II群は2試料とも粗粒シルトをモードとするが、第二のピークが中粒砂にある。III群、IV群およびV群の丸瓦は、いずれも中粒砂をモードとする。これらに対して、V群の平瓦は粗粒砂をモードとする。粘土2は極細粒砂をモードとし、細粒砂や粗粒シルトの割合も高い。中粒砂以上の碎屑物は、ほとんど含まれない。

3) 碎屑物の割合

I群が最も多く、約20%を示す。次いで、III群、IV群、V群の試料が10～15%、II群は10%未満で最も低い。

4. 考察

(1) 胎土の地質学的背景

瓦胎土中の砂粒にみられる鉱物片および岩石片の種類構成は、胎土の材料となった砂や粘土などの堆積物が採取された場所の地質学的背景を反映している可能性がある。これまで京王百草園から出土した多量の瓦の製作地については、候補となりえる瓦窯の発見が待たれる現状にある。したがって、ここではまず瓦試料の出土地周辺の地質と今回の分析調査で得られた瓦胎土の特徴を、比較することにしたい。

京王百草園の立地する多摩丘陵は、相模川水系によりもたらされた碎屑物で形成された地形である。坂本ほか(1987)や尾崎ほか(2002)などの地質図と日本の地質「関東地方」編集委員会(1986)などの記載により相模川水系流域の地質を概観すると、相模川上流域左岸側の山地には砂岩・頁岩・チャートなどの堆積岩類を主体とした地質である、四万十帯と呼ばれる中生代白亜紀から新生代古第三紀に形成された地質が分布し、右岸側の山地は新第三紀の凝灰岩やデイサイトなどからなる丹沢層群が分布、さらに最上流域の山地には甲府深成岩体と呼ばれる新第三紀の花崗岩類からなる地質が分布する。今回の分析結果では、I群やIV群、V群の試料に多種類の岩石片が認められたが、その種類構成と相模川流域の地質分布はよく一致しているといえる。

したがって、京王百草園から出土した瓦の胎土は、多摩丘陵内あるいは丘陵周縁の堆積物に由来する可能性が高い。ただし現時点では、地質学的なスケールでの地域性までにとどめざるを得ない。より具体的な瓦の生産事情を検討するためには、今後さらに素地となる可能性がある粘土等について、より詳細な地域性を明らかにする必要がある。そのための方法の一つとして、今回の分析試料のように、周辺で採取可能な自然堆積物について

分析事例を蓄積することがあげられる。今回の分析調査では、大栗川左岸で採取された粘土2を比較試料としたが、含有される碎屑物の種類数や全体的な量、さらには粒径組成が7試料の瓦胎土で確認された砂とは特徴が明らかに異なることから、少なくとも今回の分析試料は粘土2を単味で素地とした可能性は小さいといえる。ただしこれらの胎土が、水肥をはじめ砂粒の混和や杯土などの素地の調整過程を経ている場合、粘土2が素地の一部として使用されたことは十分想定される。その点については、周辺の自然堆積層から素地に使用された可能性のある粘土について分析事例を蓄積するとともに、混和材として仕様される可能性がある砂についても分析事例を得ることで、瓦胎土の地域性を考える際の有用な資料となるものと考えられる。

なお、今回参考資料とした粘土1試料(京王百草園裏採取のシルト岩)では、砂を僅かに含むシルト質基質を有する特徴が観察されたが、これはⅢ群やⅤ群の胎土中で認められた多量の粘土・シルト塊の特徴に類似する。これらの瓦試料の胎土では、粘土・シルト塊が円礫状の外形を呈しているが、軟弱なシルト岩が風化して砂粒となった場合には、砂粒の角は容易にとれて円礫状となることが推定される。したがって、粘土1とされたシルト岩は、これらの瓦胎土の一部を構成するという事もできる。ただし、粘土1を破碎して粘土2に混和した場合角礫状を呈することが想定され、Ⅲ群やⅤ群の瓦で見られる円礫状の外形とは矛盾し、また砂粒組成も異なることが予想される、これより、これらの瓦で素地として主に使用された堆積物は、相模川水系で同様のシルト岩が分布する付近河川堆積物であることが示唆され、少なくとも粘土2採取地点とは別に存在する可能性が大きいと考えられる。

(2) 瓦の分類と胎土

今回の胎土分析により、考古学的観察結果に基づく分類ごとの胎土の特徴を把握することができた。今回分析対象とした5分類7試料の結果から見る限り、分析により把握された胎土中の砂粒の種類構成、粒径組成、

およびその全体量に基づく分類と、Ⅰ群からⅤ群までの考古学的分類がほぼ整合することが明らかになった。上述の分析結果において、Ⅰ群からⅤ群までの考古学的分類ごとに記載したのも、そのためであった。

さらに、各分類に属する瓦試料では、特定鉱物の変質に基づき推定される焼成温度に差異が認められ、薄片観察結果(表2)の備考欄に記載したが、Ⅰ群の試料については長石類の溶融とムライトの晶出が認められていることから、その焼成温度は1200℃前後と推定され、Ⅲ群の試料については長石類の微弱な溶融が認められていることから、その焼成温度は1150～1200℃と推定される(五十嵐,2007)。その他の試料ではこのような変化が認められなかったことから、1150℃より低い焼成温度であったことが推定される。

以上の2点より、Ⅰ群からⅤ群までの考古学的分類ではそれぞれ焼成温度が異なり、かつ瓦の素地に使用した堆積物の由来が異なる可能性が大きいことが理解される。

引用文献

- 五十嵐俊雄,2007,土師器・須恵器等に関する焼成温度推定手法の開発. 徳永重元博士献呈論集,パリオ・サーヴェイ株式会社,281-297.
- 松田順一郎・三輪若葉・別所秀高,1999,瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察—岩石学的・堆積学的による—. 日本文化財科学会第16回大会発表要旨集,120-121.
- 日本の地質「関東地方」編集委員会,1986,日本の地質3 関東地方. 共立出版,335p.
- 尾崎正紀・牧本 博・杉山雄一・三村弘二・酒井彰・久保和也・加藤碩一・駒沢正夫・広島俊男・須藤定久,2002,20万分の1地質図幅「甲府」,産業技術総合研究所地質調査総合センター.
- 坂本 亨・酒井 彰・秦 光男・宇野沢 昭・岡 重文・広島俊男・駒沢正夫・村田泰章,1987,20万分の1地質図幅「東京」,地質調査所.

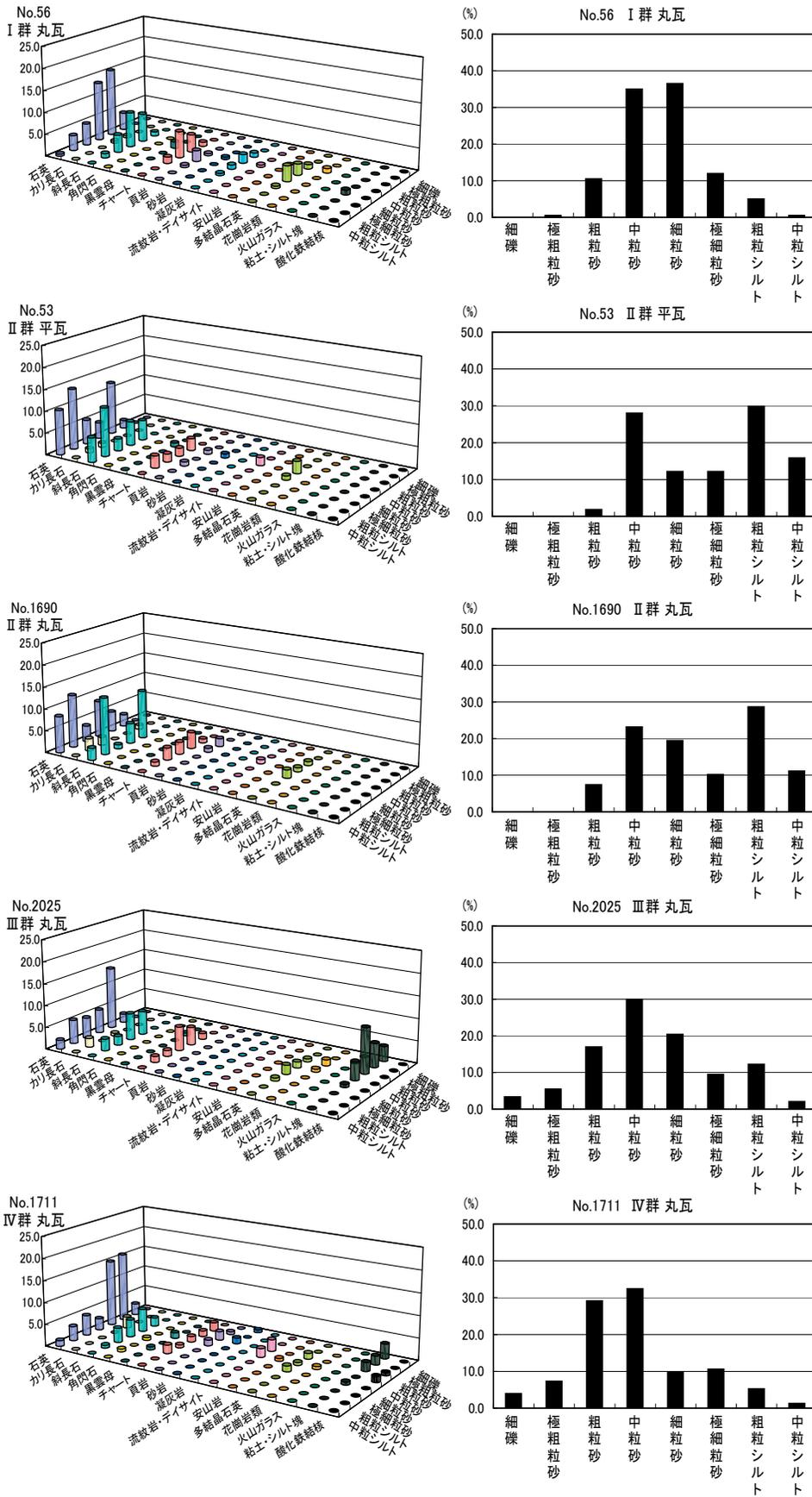


図1(1). 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(%)および粒径組成

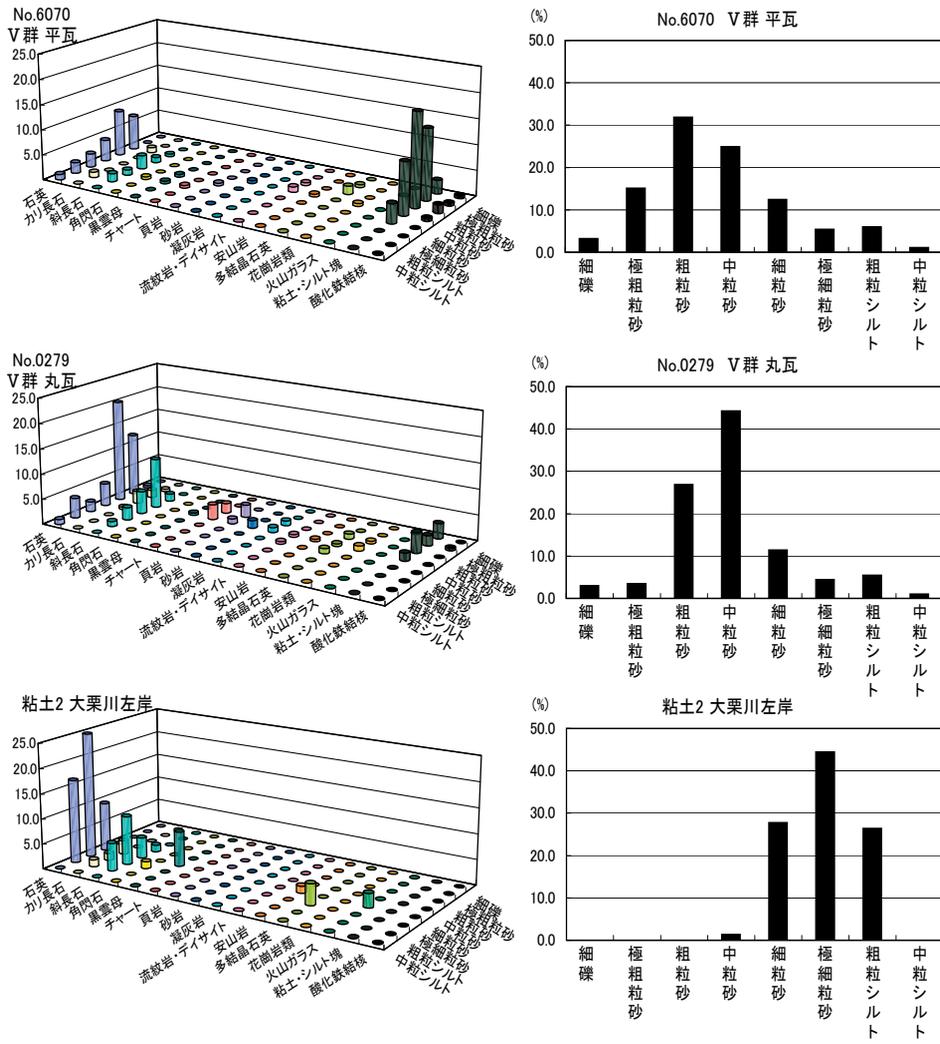


図1(2). 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(%)および粒径組成

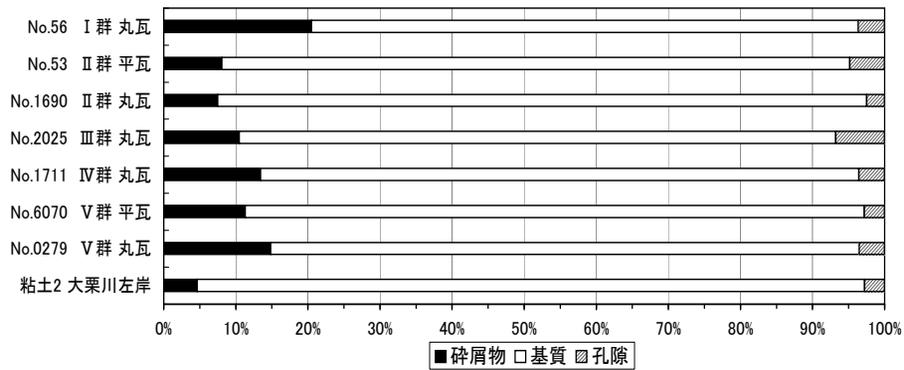
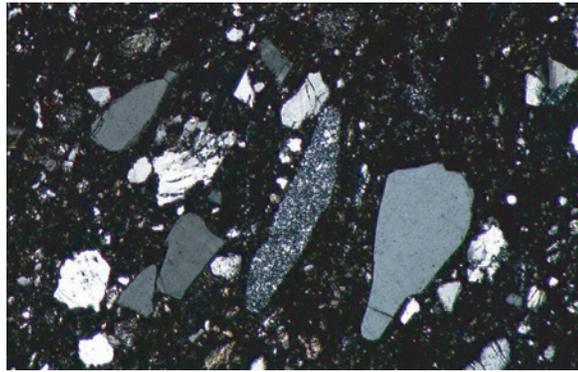
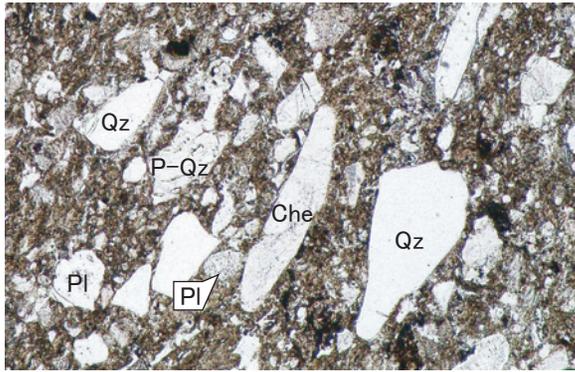
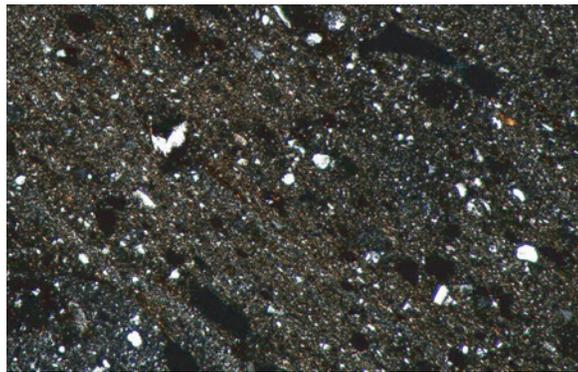
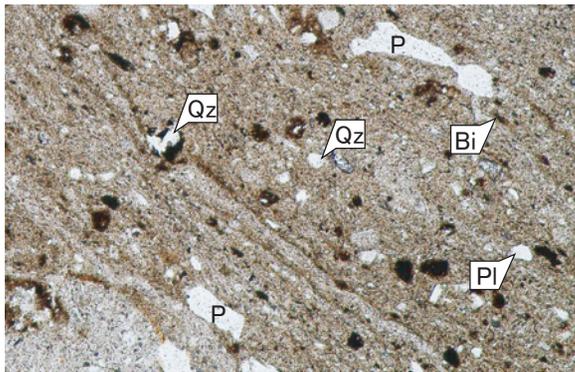


図2. 碎屑物・基質・孔隙の割合

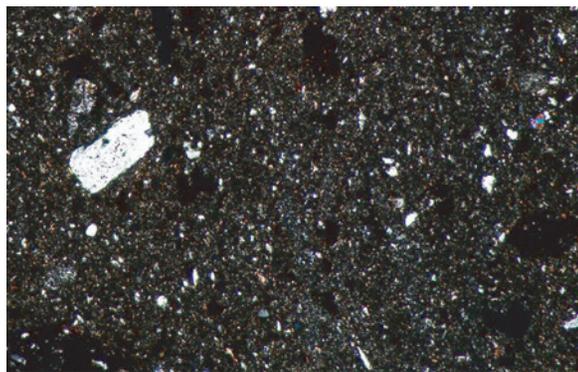
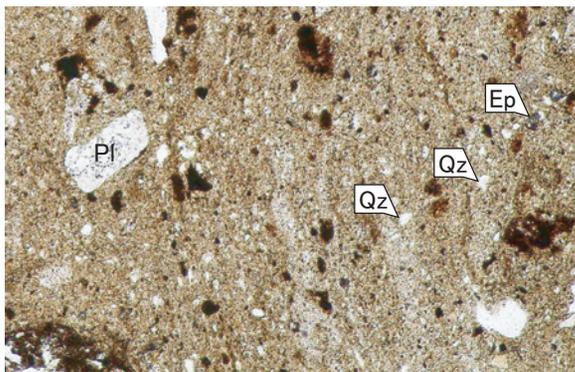
図版1 胎土薄片(1)



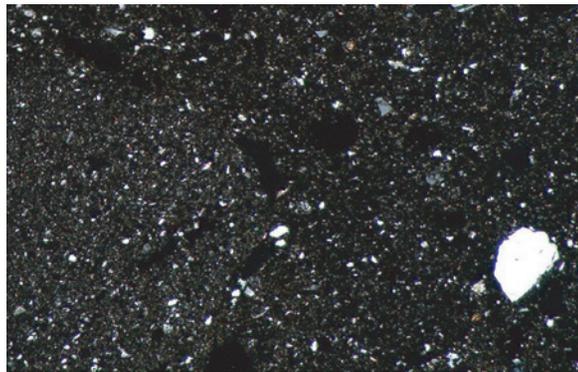
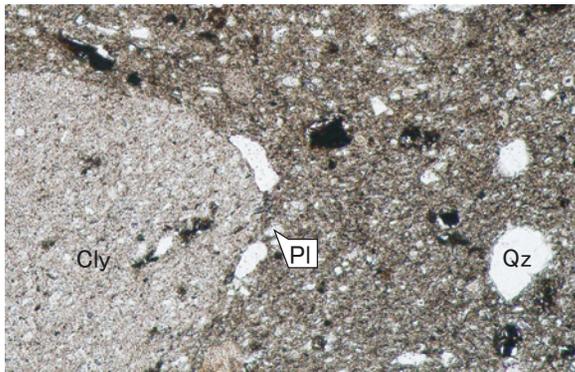
1. I群 丸瓦 No.56



2. II群 平瓦 No.53



3. II群 丸瓦 No.1690



4. III群 丸瓦 No.2025

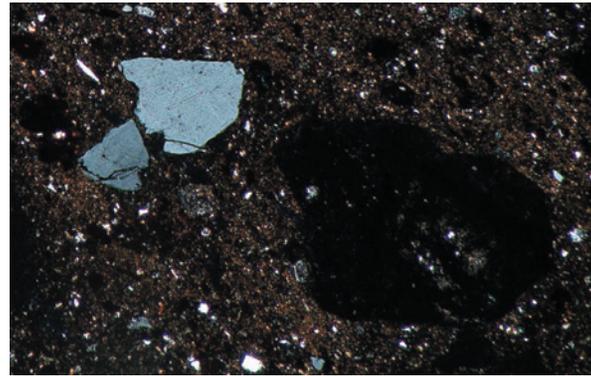
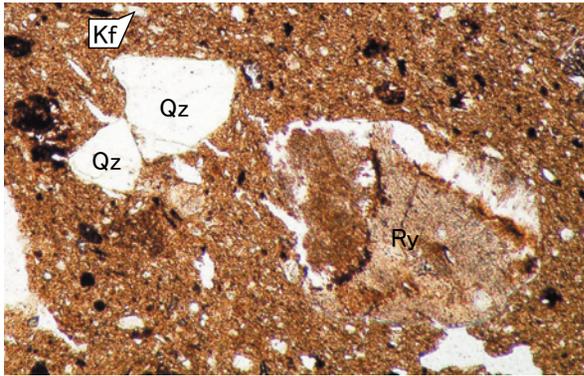
0.5mm

Qz:石英. Pl:斜長石. Ep:緑レン石. Bi:黒雲母. Che:チャート. P-Qz:多結晶石英.

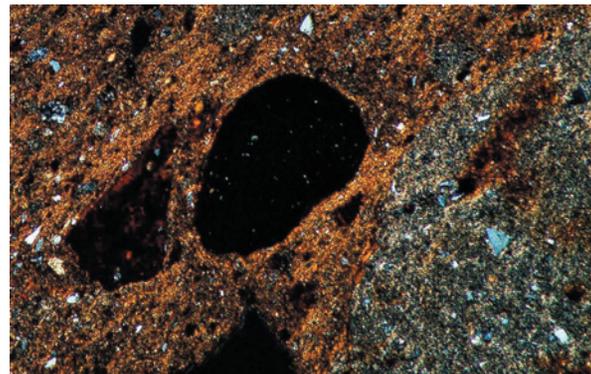
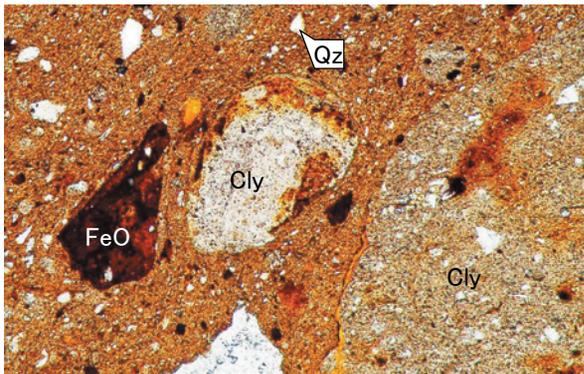
Cly:粘土・シルト塊. P:孔隙.

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

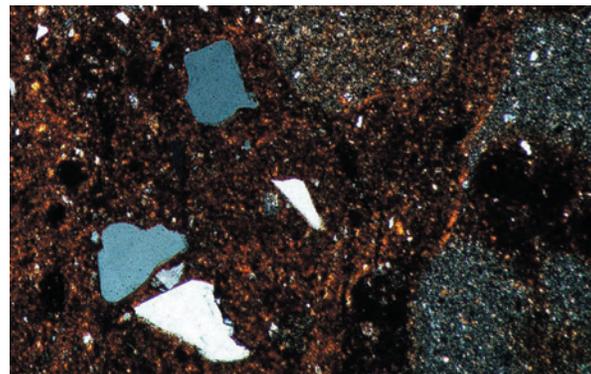
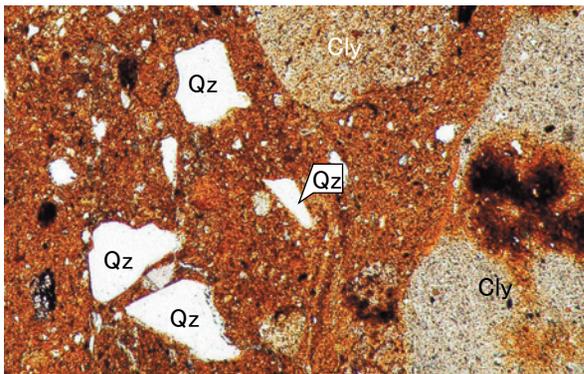
図版2 胎土薄片(2)



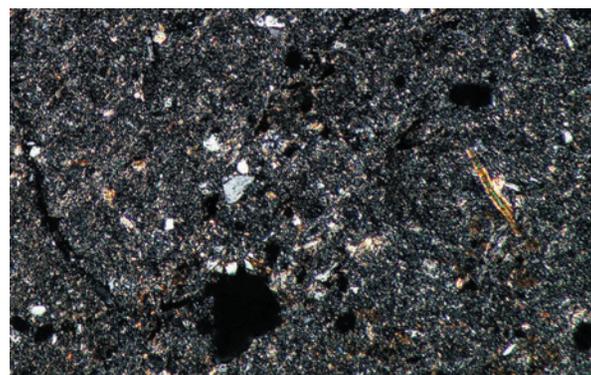
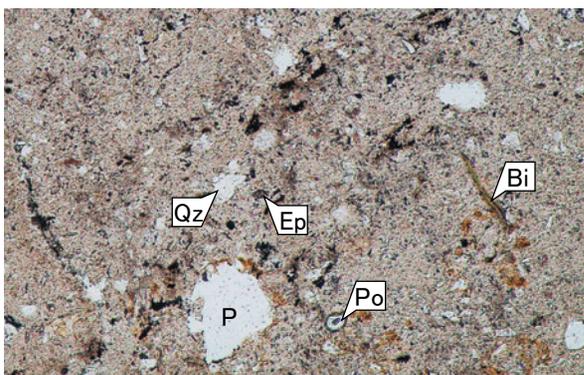
5.IV群 丸瓦 No.1711



6.V群 平瓦 No.6070



7.V群 丸瓦 No.0279



8.粘土2 大栗川左岸上総層群連光寺層上部

0.5mm

Qz:石英. Kf:カリ長石. Ep:緑レン石. Bi:黒雲母. Ry:流紋岩. FeO:酸化鉄結核.

Cly:粘土・シルト塊. Po:植物珪酸体. P:孔隙.

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

附篇 4 日野市指定有形文化財の瓦

平成元年（1989）に京王百草園内で出土した瓦の内39点と、園内から表面採集された瓦3点の合計42点の瓦が「真慈悲寺推定地出土の中世瓦」として平成23年8月17日に日野市指定有形文化財（考古資料）に指定された。これらの瓦は、本書でも報告している。本書での報告No.と指定No.の対応を下表に示す。また、指定された瓦のカラー写真をかかげておく。なお、指定理由は以下のとおりである。

出土した瓦は、圏線のない「左三巴文軒丸瓦」と「連珠文軒平瓦」がセットとなり、軒平瓦に「顎貼付け技法」を用いている13世紀中頃の瓦と、圏線のある「右三巴文軒丸瓦」と「蓮華唐草文軒平瓦」がセットとなり、軒平瓦に「瓦当貼付け技法」を採用する13世紀後半の瓦の大きく分けて二種類の瓦である。特に、13世紀後半の瓦は本瓦葺き（総瓦葺き）の屋根に葺かれたものである。

本瓦葺きの屋根に葺かれた中世の瓦が大量に出土しているのは東京都内でも他に類例をみない。背銘に「日本武州多西吉富真慈悲寺」と刻まれた建長二年（1250）鑄造の阿弥陀如来坐像（国指定重要文化財）が、京王百草園隣の百草八幡神社に伝えられていることから、『吾妻鏡』の文治二年（1186）二月三日条と建久三年（1192）五月八日条に記載された格式高い大寺院である真慈悲寺が当地にあったことを特定する根拠となり得る。

「蓮華唐草文」は13世紀後半に鎌倉幕府の寺社造営に活躍した僧である忍性に関する瓦との関連性が注目され、造瓦及び寺院の造営集団の技術的系譜を考える上で貴重な資料である。百草地域ならびに日野市域一帯の宗教的状况を考える上で、また鎌倉幕府との関係性を検証する上で極めて重要であるといえ、文化財に指定されるにふさわしいと考えられる。

報告書No.	指定瓦No.	時代	種別
46	1	鎌倉時代（十三世紀中頃）	軒丸瓦
47	2		軒丸瓦
49	3		軒平瓦
50	4		軒平瓦
53	5		軒平瓦
51	6		軒平瓦
52	7		軒平瓦
54	8		軒平瓦
55	9		軒平瓦
25	10		丸瓦
22	11		丸瓦
23	12		丸瓦
29	13		丸瓦
32	14		丸瓦
38	15		平瓦
40	16		平瓦
148	17	鎌倉時代（十三世紀後半）	軒丸瓦
152	18		軒丸瓦
155	19		軒丸瓦
157	20		軒丸瓦
153	21		軒丸瓦
166	22		軒平瓦
175	23		軒平瓦
167	24		軒平瓦
174	25		軒平瓦
185	26		軒平瓦
187	27		軒平瓦
186	28		軒平瓦
112	29		丸瓦
113	30		丸瓦
125	31		平瓦
126	32		平瓦
127	33		平瓦
195	34		谷戸瓦
197	35		谷戸瓦
196	36		谷戸瓦
199	37		谷戸瓦
198	38		面戸瓦
193	39	熨斗瓦	
191	40	熨斗瓦	
192	41	熨斗瓦	
202	42	鬼瓦	

日野市指定有形文化財瓦と報告No.対応表



軒丸瓦・軒平瓦 (13 世紀中頃)



軒丸瓦・軒平瓦 (13 世紀中頃)



軒丸瓦・軒平瓦（13世紀後半）



軒丸瓦・軒平瓦（13世紀後半）



丸瓦・平瓦・道具瓦（13世紀後半）



丸瓦・平瓦・道具瓦（13世紀後半）

武州多西吉富

真慈悲寺推定地出土の中世瓦

発行日 平成 25 (2013) 年 3 月 31 日

編 集 日野市郷土資料館

東京都日野市程久保 550

T E L 042-592-0981



「三巴文軒丸瓦」